

小野地区の遺跡

北梅本悪社谷遺跡 2次調査地

北 梅 本 北 池 遺 跡

北 梅 本 太 尺 寺 遺 跡

2001

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯學習振興財團

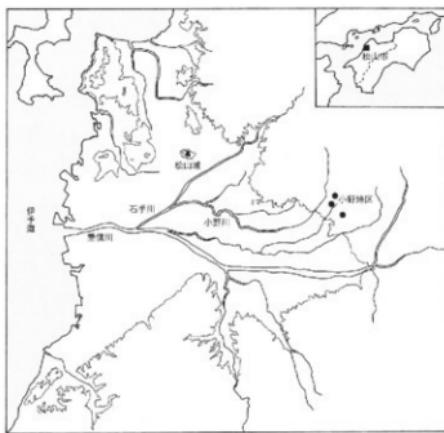
埋蔵文化財センター

おのの 小野地区の遺跡

北梅本悪社谷遺跡 2次調査地

北梅本北池遺跡

北梅本太尺寺遺跡



2001

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター



巻頭図版 北梅本悪社谷遺跡 2次調査地遠景（南より）

序

松山平野の南東部に位置する小野地区には、横穴式石室内で木棺が発見されたことで全国的に知られる葉佐池古墳をはじめとする数多くの古墳と、駄馬蛇ヶ壠窯址や悪社谷窯址等の古墳時代から古代にかけての須恵器生産の窯址群が発見されています。

今回報告致します北梅本悪社谷遺跡2次調査地・北梅本北池遺跡・北梅本太尺寺遺跡は、松山市北梅本町に所在し、近年の発掘調査によって古墳や窯跡だけではなく、弥生時代や古墳時代の集落の存在が明らかになりつつあります。

北梅本悪社谷遺跡2次調査地では、近接している悪社谷1号窯の灰原と推定される遺構が検出されています。北梅本北池遺跡では、弥生時代や古墳時代の土坑や溝を検出し、また北梅本太尺寺遺跡においては遺物包含層を検出したことから、周辺地域に集落が存在したことが明らかとなりました。

そのほか、小野地区に所在する窯址等で採集した須恵器についても、須恵器編年の基礎資料となる貴重な遺物を確認することができました。

こうした成果をあげることができましたのも、市民の皆さまの埋蔵文化財に対するご協力とご理解のたまものであり、心から感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財の発掘調査事業に関して、より一層のご協力をお願い申し上げます。

平成13年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財團

理事長 中村時広

例　言

1. 本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成9～11年度に松山市北梅本町で実施した3遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及びA～H区の試掘調査報告書である。
2. 遺構は呼称を略号で記述した。自然流路：SR、土坑：SK、溝：SD、柱穴：SP、性格不明遺構：SX、試掘トレンチ：Tである。遺構番号は遺跡ごとに通し番号とした。また、試掘トレンチ番号も区ごとに通し番号とした。
3. 遺物の実測・製図、遺構の作図・製図は、高尾和長・相原浩二・山之内志郎・加鳥次郎の指示のもと、仙波千秋・仙波ミリ子・東山里美・金子育代・高尾久子・山崎真理・中村紫・宮内真弓が行った。
4. 写真図版は山之内と大西朋子が協議し、遺物の撮影及び図版作成は大西が行った。
5. 遺構の写真撮影は山之内・大西が行った。
6. 遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケールドに記した。
7. 本書に使用した方位は、すべて真北である。
8. 本書に関わる遺物や記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
9. 本書の執筆は山之内が行った。経書は中村が担当した。
10. 本書の編集は高尾の指示のもと山之内が行った。
11. 製版 写真図版 175綴
印刷 オフセット印刷
用紙 カラー写真 本文 マットコート 110kg
写真図版 マットコート 135kg
製本 アジロ綴り

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	
2. 刊行組織	
3. 環境	
第2章 北梅本悪社谷遺跡2次調査地	7
1. 調査の経過	
2. 層位	
3. 遺構と遺物	
4. 小結	
第3章 北梅本北池遺跡	37
1. 調査の経過	
2. 層位	
3. 遺構と遺物	
4. 小結	
第4章 北梅本太尺寺遺跡	67
1. 調査の経過	
2. 1区の調査	
3. 2区の調査	
4. 小結	
第5章 A～H区の試掘調査	83
1. 試掘調査の経過	
2. 層位・遺構と遺物	
3. 小結	
第6章 自然科学分析	[株式会社 古環境研究所] 127
第7章 調査の成果と課題	130
附 章 松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料	131
写真図版	155

挿 図 目 次

第1章 はじめに	
第1図 調査地周辺の主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）	3
第2図 調査地位置図（縮尺1/10,000）	6
第2章 北梅本忠社谷遺跡2次調査地	
第3図 調査地位置図（縮尺1/2,000）	10
第4図 基本土層図（縮尺1/20）	11
第5図 遺構配置図（縮尺1/800）	12
第6図 SR1測量図（縮尺1/60、1/100）	13
第7図 SR1出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）	14
第8図 SR1出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、1/3、1/4）	15
第9図 SR2測量図（縮尺1/100、1/250）	17
第10図 SR2出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、1/3）	18
第11図 SR2出土遺物実測図(2)（縮尺2/3）	19
第12図 SK4測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/30）	20
第13図 SD2測量図（縮尺1/20）	20
第14図 SX1測量図（縮尺1/40）	21
第15図 SX1出土遺物実測図（縮尺1/3）	22
第16図 SX2測量図・出土遺物実測図(1)（縮尺1/3、1/20）	24
第17図 SX2出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、2/3、1/3）	25
第18図 SX3測量図・出土遺物実測図（縮尺1/3、1/100）	26
第19図 SK2測量図（縮尺1/30）	27
第20図 SD1測量図（縮尺1/100）	27
第21図 地点不明出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、2/3、1/3）	28
第22図 地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、2/3）	29
第3章 北梅本北池遺跡	
第23図 調査地位置図（縮尺1/2,000）	40
第24図 基本土層図（縮尺1/20）	40
第25図 遺構配置図（縮尺1/400）	41
第26図 SK10測量図・出土遺物実測図（縮尺1/1、1/3、1/30）	44
第27図 SK2測量図（縮尺1/30）	45
第28図 SD1測量図（縮尺1/20、1/40）	46
第29図 SX1測量図・出土遺物実測図（縮尺2/3、1/3、1/200）	47
第30図 SX2測量図・出土遺物実測図（縮尺1/1、1/100）	49
第31図 SR1測量図（縮尺1/150、1/250）	50
第32図 SR1出土遺物実測図（縮尺1/1、2/3、1/3）	51

第33図	SD 4 測量図（縮尺1/60、1/100）	52
第34図	SD 4 出土遺物実測図（縮尺1/1、2/3、1/3）	53
第35図	SD 2 測量図・出土遺物実測図（縮尺1/1、1/40、1/100）	54
第36図	SK 1・3・4・5 測量図（縮尺1/30）	55
第37図	SK11・12・13 測量図（縮尺1/30、1/60）	57
第38図	地点不明出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、2/3、1/3）	59
第39図	地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺1/1）	60
第4章 北梅本太寺跡遺跡		
第40図	調査地位置図（縮尺1/1,000）	70
第41図	基本上層図（縮尺1/20）	71
第42図	1区造構配置図（縮尺1/200）	72
第43図	2区造構配置図（縮尺1/500）	73
第44図	2区D造構配置図（縮尺1/60）	75
第45図	2区第VI層出土遺物実測図（縮尺1/1、2/3）	76
第46図	地点不明出土遺物実測図(1)（縮尺1/1、2/3）	77
第47図	地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺1/1、2/3）	78
第5章 A～H区の試掘調査		
第48図	A区トレーナー配置図（縮尺1/1,500）	88
第49図	A区柱状土層図(1)（縮尺1/40）	89
第50図	A区柱状土層図(2)（縮尺1/40）	90
第51図	A区柱状土層図(3)（縮尺1/40）	91
第52図	B区トレーナー配置図（縮尺1/1,500）	92
第53図	B区柱状土層図(1)（縮尺1/40）	93
第54図	B区柱状土層図(2)（縮尺1/40）	94
第55図	C区トレーナー配置図（縮尺1/2,000）	95
第56図	C区柱状土層図(1)（縮尺1/40）	96
第57図	C区柱状土層図(2)（縮尺1/40）	97
第58図	C区柱状土層図(3)（縮尺1/40）	98
第59図	C区柱状土層図(4)（縮尺1/40）	99
第60図	C区柱状土層図(5)、トレーナー測量図・土層図(1)（縮尺1/40、1/80）	100
第61図	C区トレーナー測量図・土層図(2)（縮尺1/80）	101
第62図	C区トレーナー測量図・土層図(3)（縮尺1/80）	102
第63図	D区トレーナー配置図（縮尺1/2,000）	103
第64図	D区柱状土層図(1)（縮尺1/40）	104
第65図	D区柱状土層図(2)（縮尺1/40）	105
第66図	D区柱状土層図(3)（縮尺1/40）	106
第67図	D区柱状土層図(4)（縮尺1/40）	107
第68図	D区柱状土層図(5)、トレーナー測量図・土層図(1)（縮尺1/40、1/80）	108

第69図	D区トレチ測量図・土層図(2) (縮尺1/80)	109
第70図	D区トレチ測量図・土層図(3) (縮尺1/80)	110
第71図	E区トレチ配置図 (縮尺1/1,000)	111
第72図	E区柱状土層図(1) (縮尺1/40)	112
第73図	E区柱状土層図(2)・トレチ測量図・土層図 (縮尺1/40、1/200)	113
第74図	F区トレチ配置図 (縮尺1/1,500)	115
第75図	F区柱状土層図(1) (縮尺1/40)	116
第76図	F区柱状土層図(2) (縮尺1/40)	117
第77図	F区柱状土層図(3)・トレチ測量図・土層図(1) (縮尺1/40、1/100、1/120)	118
第78図	F区トレチ測量図・土層図(2) (縮尺1/100)	119
第79図	F区トレチ測量図・土層図(3) (縮尺1/40、1/100)	120
第80図	F区トレチ測量図・土層図(4) (縮尺1/100)	121
第81図	G区トレチ配置図 (縮尺1/1,000)	122
第82図	G区柱状土層図 (縮尺1/40)	123
第83図	H区トレチ配置図 (縮尺1/500)	124
第84図	H区柱状土層図・トレチ測量図・土層図 (縮尺1/40、1/100)	125
第6章 自然科学分析		
第85図	2区SR2出土木材の顕微鏡写真	129
附 章 松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料		
第86図	伊予市三秋窯址位置図 (縮尺1/20,000)	132
第87図	伊予市三秋窯址採集資料実測図(1) (縮尺1/3)	133
第88図	伊予市三秋窯址採集資料実測図(2) (縮尺1/3)	134
第89図	松山平野東部古窯址群位置図(1) (縮尺1/2,000)	135
第90図	松山平野東部古窯址群位置図(2) (縮尺1/2,000)	136
第91図	潮見山南窯址採集資料実測図(1) (縮尺1/3)	137
第92図	潮見山南窯址採集資料実測図(2) (縮尺1/3)	138
第93図	潮見山南窯址採集資料実測図(3) (縮尺1/3)	139
第94図	駄馬姥ヶ懐2号窯址採集資料実測図 (縮尺1/3)	140
第95図	枝条下池3号窯址採集資料実測図 (縮尺1/3)	141
第96図	悪社谷2号窯址採集資料実測図(1) (縮尺1/3)	142
第97図	悪社谷2号窯址採集資料実測図(2) (縮尺1/3)	143
第98図	悪社谷2号窯址採集資料実測図(3) (縮尺1/3)	144
第99図	悪社谷1号窯址採集資料実測図 (縮尺1/3)	145

表 目 次

第1章 はじめに	
表1 調査地一覧	1
第2章 北梅本悪社谷遺跡2次調査地	
表2 自然流路一覧	31
表3 土坑一覧	31
表4 溝一覧	31
表5 性格不明遺構一覧	31
表6 SR1出土遺物観察表 土製品	31
表7 SR1出土遺物観察表 石製品	32
表8 SR2出土遺物観察表 土製品	32
表9 SR2出土遺物観察表 石製品	33
表10 SK4出土遺物観察表 土製品	33
表11 SX1出土遺物観察表 土製品	33
表12 SX2出土遺物観察表 土製品	34
表13 SX2出土遺物観察表 石製品	34
表14 SX3出土遺物観察表 土製品	35
表15 地点不明出土遺物観察表 土製品	35
表16 地点不明出土遺物観察表 石製品	35
第3章 北梅本北池遺跡	
表17 自然流路一覧	62
表18 土坑一覧	62
表19 溝一覧	62
表20 性格不明遺構一覧	63
表21 SK10出土遺物観察表 土製品	63
表22 SK10出土遺物観察表 石製品	64
表23 SX1出土遺物観察表 土製品	64
表24 SX1出土遺物観察表 石製品	64
表25 SX2出土遺物観察表 石製品	64
表26 SR1出土遺物観察表 土製品	64
表27 SR1出土遺物観察表 石製品	65
表28 SD4出土遺物観察表 土製品	65
表29 SD4出土遺物観察表 石製品	65
表30 SD2出土遺物観察表 石製品	65
表31 地点不明出土遺物観察表 土製品	66
表32 地点不明出土遺物観察表 石製品	66
第4章 北梅本太尺寺遺跡	
表33 上坑一覧	80

表34 溝一覧	80
表35 性格不明遺構一覧	81
表36 2区第VI層出土遺物観察表 石製品	82
表37 地点不明出土遺物観察表 石製品	82
第5章 A～H区の試掘調査	
表38 試掘調査一覧	85
第6章 自然科学分析	
表39 北梅本悪社谷遺跡2次調査地における樹種同定結果	127
附 章 松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料	
表40 伊予市三秋窯址採集遺物観察表 土製品	147
表41 伊予市三秋窯址採集遺物観察表 瓦製品	148
表42 伊予市三秋窯址採集遺物観察表 石製品	148
表43 潮見山南窯址採集遺物観察表 土製品	148
表44 駄馬姫ヶ瀬2号窯址採集遺物観察表 土製品	150
表45 枝栄下池3号窯址採集遺物観察表 土製品	151
表46 悪社谷2号窯址採集遺物観察表 土製品	151
表47 悪社谷1号窯址採集遺物観察表 土製品	154

図版目次

- 巻頭図版 北梅本悪社谷遺跡2次調査地遠景（南より）
- 図版1 1. 調査前風景（北より）
2. SK4遺物出土状況（東より）
- 図版2 1. SR1遺物出土状況（北より）
2. 悪社谷1号窯（奥）とSX2遺物出土状況（東より）
- 図版3 1. SR2土層（南より）
2. SR2遺物出土状況（北西より）
- 図版4 1. SR1出土遺物
2. SK4出土遺物
3. SX2出土遺物
- 図版5 1. 調査前風景（北より）
2. SR1完掘状況（北より）
- 図版6 1. 1区A・1区B完掘状況（北より）
2. SK10出土遺物
- 図版7 1. 調査前風景（南より）
2. 1区完掘状況（南より）
- 図版8 1. 2区完掘状況（北より）
2. 出土遺物（1～3：2区第VI層、8～12：地点不明）

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

1996（平成8）年10月に松山市長田中誠一氏（以下、申請者）より松山市北梅本町甲3,427外における土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No166北梅本遺物包含地（弥生）」及び「No105潮見山古墳群・愛宕山古墳・山越古墳」があり、周知の遺跡として知られている。

申請地周辺には、これまでに小野谷や枝栄下池周辺において6～8世紀代の窯跡が10数基確認されている。また南に位置する陸上自衛隊松山駐屯地がある丘陵部には播磨塚古墳群があり、そのうち未発見であった播磨塚天神山古墳が調査され、6世紀前半の前方後円墳であることが明らかとなった。

よって文化教育課では、確認願いが提出された地点についての埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、平成9年から11年の間、約168,000m²の面積において8区（A～H区）に区分し試掘調査を実施した。その結果、申請地内の約40,000m²で土坑・溝・柱穴・須恵器窯の一部と思われる遺構と弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器などの土器やサスカイトの石器が出土したことから、申請地には古墳時代や古代における須恵器の生産と集落に関連する遺跡があることを確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者及び関係者は遺跡の取扱いについての協議を行った。その結果、切除により遺跡が消滅する約20,000m²に対し、当該地域における古墳時代や古代の須恵器生産関連遺構や集落関連遺構の広がりの解明を目的に3地区において本格調査を実施するものとした。なお残りの約20,000m²では盛土を施して保護措置がとられることになった。

本格調査は文化教育課及び財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となり、申請者及び関係者各位の協力のもと、平成10年から12年の間に行われた。野外調査終了後は埋文センターが主体となり、屋内調査及び報告書刊行事業を実施した。

なお、3遺跡の名称・所在地・面積・期間・調査担当者を表1に記し、3遺跡及び試掘調査A～H区の位置については第2図に記した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(m ²)	期間	調査担当
北梅本惡社谷遺跡 2次調査地	松山市北梅本町乙697-1外	6,265	1999（平成11）年4月8日 ～同年9月22日	高尾 和長 山之内志郎
北梅本北池遺跡	松山市北梅本町甲1,732外	9,561	1999（平成11）年10月7日 ～2000（平成12）年3月31日	高尾 和長 山之内志郎
北梅本大尺寺遺跡	松山市北梅本町甲3,489-1外	4,575	1998（平成10）年4月7日 ～同年9月30日	相原 浩二 山之内志郎

2. 刊行組織（平成13年3月31日現在）

松山市教育委員会	教 育 長	中矢 陽三
事務局	局 長	園上 和敬
	局長付参事	森脇 将
	次 長	赤星 忠男
文化教育課	課 長	馬場 洋
財団法人松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村 時広
	事務局長	二宮 正昌
	事務局次長	江戸 孝
	事務局次長	森 和朋
埋蔵文化財センター	所 長	中川 隆
	専 門 監	野木 力
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
	調査担当	高尾 和長・相原 浩二 山之内忠郎・大西 朋子

3. 環 境

(1) 遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のはば中央に位置する県下最大の平野であり、高縄山に源を発した石手川と重信川という二大河川により形成された沖積平野である。本書で取り上げる小野地区は、平野の南東部に位置し、石手川の支流である小野川や悪社川によって形成された小規模な扇状地となっている。

(2) 歴史的環境（第1図）

ここでは小野地区を中心に、遺構の密度が濃い西方の来住・久米地区を含めた遺跡について時代順に概観する。

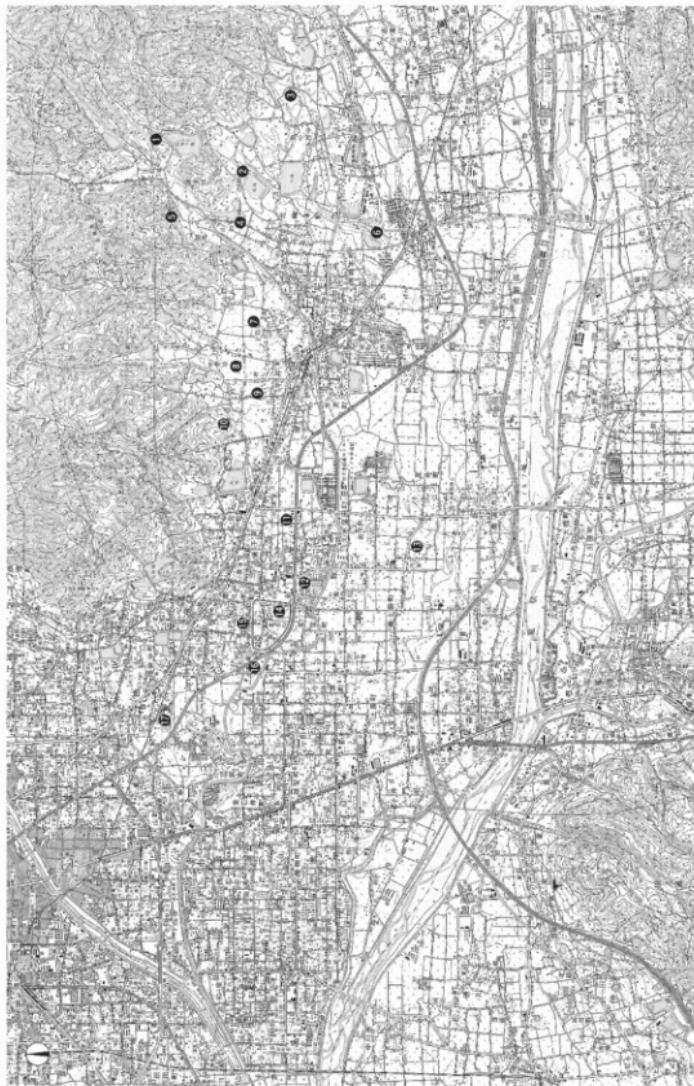
旧石器時代

旧石器時代の遺構は確認されていない。遺物は表探資料や單独出土であるが、五郎兵衛谷古墳出土のナイフ形石器や久米山山池遺跡のナイフ形石器などがある。今後は遺構の検出とともに其伴遺物の出土が期待される。

縄文時代

小野地区では古市遺跡2次調査地で円形土坑から晩期の土器が出土している。近接する下刈屋遺跡2次調査地においても晩期の浅鉢と深鉢が各1点出土していることから、当該期の集落の存在がより明確になった。なお古市遺跡2区においてアカホヤ火山灰土の可能性がある土層を確認している。

来住・久米地区では近年検出例が増加している。時期はいずれも後期～晩期である。後期の遺構として最も注目されるのは久米崖田森元遺跡の土坑出土の一括資料である。時期は後期前半である。晩期では中葉の円形竪穴式住居址が久米高畠遺跡36次調査地で確認され、同遺跡26・35次調査地でも土坑から同時期の遺物が出土している。同遺跡33次調査地では落し穴と考えられる長方形の土坑が1基確認されている。時期は晩期後半と推定されている。



第1図 調査地周辺の主要遺跡分布図 ($S = 1 : 50,000$)

弥生時代

来住・久米地区では前期末から後期の遺構と遺物を検出しているが、その中核をなすのは前期末～中期初頭の土坑群と環濠である。土坑群は久米高畠遺跡24・27次調査地などで検出しており、同様の土坑群は小野地区の古市遺跡2次調査地と五楽遺跡でも確認されている。古市遺跡1区などで検出の自然流路SR1出土の遺物とあわせて考えると周辺地域での集落の存在が想定される。また環濠と推定される複数の大溝は久米高畠遺跡23・25次調査地で検出し、同時期に併存すると考えられている。

中期は検出例が少なく、米住庵寺15次調査地出土の中期後半の資料が注目される。今後は同時期の集落の展開を他地域を含めて考えていく必要がある。

後期もまた検出例は少なく、その中でも注目される遺跡として南久米片廻り遺跡の円形竪穴式住居があげられる。時期は終末期のものである。また国道11号松山東道路関係の発掘調査や来住庵寺域内でもこの時期の遺構が確認されている。

古墳時代

近年小野地区における古墳時代集落の調査例が増加し、その構造や変遷を知る上で貴重な遺跡が多く発見されるようになった。下丸屋遺跡1～3次調査地においては古墳時代後期集落の一角が調査され、堅穴式住居・掘立柱建物・須恵器の座乗土坑などが検出された。これらの遺構から焼けアミや焼成不良の須恵器が出土することから、北や北東方向の丘陵上に存在する松山平野東部古窯址群（生産地）から来住・久米地区など（消費地）への中継地点、集積地の役割を担っていたことが指摘されている。また上丸屋遺跡1・2次調査地においては後期の掘立柱建物・土坑・柱穴を検出していることから、今後の近隣地域の調査により集落の変遷がより明確になると思われる。

来住・久米地区では来住町遺跡7・8次調査地で6世紀末から7世紀中葉段階の集落の変遷が明らかとなった。また闇遺跡1・2次調査地では6世紀代の堅穴式住居形態の変遷や、掘立柱建物の建物方位の変化、堅穴式住居から掘立柱建物への移行が確認されている。

小野地区における古墳は中・後期に限定される。中期の古墳には桧山峠7号墳・觀音山古墳・曾我神社古墳などがあり、5世紀末の前方後円墳である桧山峠7号墳は松山平野における横穴式石室の導入時期を考える上で興味深い古墳である。後期の古墳には北部や北東部の丘陵上に分布する芝ヶ岡古墳群・かいなご古墳群・久米大池古墳群・播磨塚古墳群などがある。このほか波賀郡神社古墳・二ツ塚古墳・タンチ山古墳・葉佐池古墳といった大規模な前方後円墳が平野部に出現する。これらのうち古墳の保存とともに本格調査が実施された葉佐池古墳は、横穴式石室内に木棺や有機物が残存していたことから、石室構造のみならず当時の葬送儀礼に関するあらゆる情報を得ることができた。

古代

小野地区的北部丘陵上には前述した松山平野東部古窯址群が存在する。主要なものとしては駄馬姫ケ懐・鬼杜谷・枝栄下池・潮見山南・茨谷窯址など10数基があるが、本格調査が実施されたのは駄馬姫ケ懐1号窯のみである。これらの表採資料などから推定される操業時期は6世紀後半から8世紀後半の年代をあてている。

古市遺跡2区では興味深い遺構を検出している。それは瓦器碗と上師器碗を掘立柱建物の柱穴内に埋納しており、建物の廃絶に伴う祭祀遺物と推定されている。

来住・久米地区には、近年全国的に注目されている久米官衙遺跡群があり、7世紀における重要施設が集中する政治の中心地であった可能性が考えられる。同時に白鳳期の寺院である来住庵寺につい

てもその全容解明に向けて調査が行われている。

中・近世

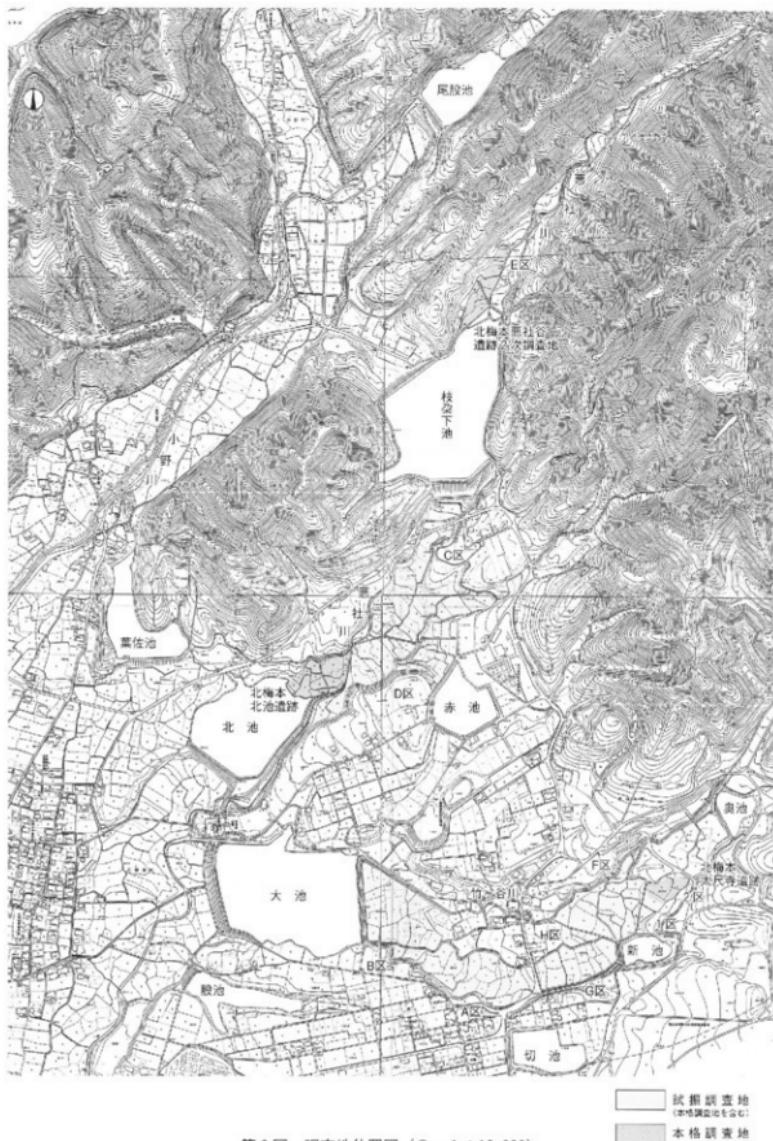
小野地区における中世の遺構としては下刈屋遺跡2次調査地で生産関連遺構や遺物包含層を確認している。近世は下刈屋遺跡3次調査地で江戸時代前期の墓2基を調査している。礫石積みの外部構造や下部構造、出土した石碑や古銭から確認できた年代や被葬者像など、近世墓から多くの情報を得ることができた。

来住・久米地区における中世の遺構としては来住廃寺21次調査地において検出した大規模な総柱建物群があげられる。近世では来住廃寺15次調査地において土坑墓群が検出されている。

【参考文献】

- 森 光晴 1978『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会
- 1986「愛媛県史 資料編考古」愛媛県史編纂委員会
- 西尾 幸則ほか 1993『来住廃寺遺跡第一回調査報告書』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 西尾 幸則・木村 完児・小笠原善治 1993『来住廃寺第二回調査地』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 重松 佳久 1996「下刈屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 相原 浩二・小玉紀子 1997「久米高畠遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木 謙一ほか 1996『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 1998「小野川流域の遺跡Ⅱ」松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田 康敏 1987「南久米片廻り遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』松山市教育委員会
- 1989「久木庭森元跡跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会
- 栗田 康敏・加島 次郎・大森 一成 1995「鶴佐池古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田 康敏・大森 一成 1997「猪山跡7号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田 康敏・相原 浩二・河野 史知 2000「吉市遺跡・下刈屋遺跡2・3次調査地」松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田 康敏・吉岡 和哉 2000「播磨御天神山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅺ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野 史知 1998「久米高畠遺跡35次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅻ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾 和長・宮内 憲一 1996「久米高畠遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅼ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 橋本 雄一・小笠原善治 1996「久木高畠遺跡24次調査地」「来住町遺跡7次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 1998「久木高畠遺跡33次調査地」「久木高畠遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 橋本 雄一・相原 秀仁 1995「久木高畠遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮内 憲一・相原 秀仁 1997「久木高畠遺跡27次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅺ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 1999「来住町遺跡8次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅻ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 山本 健一・山之内忠郎 1997「吉市遺跡・2次調査地」「万束遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅼ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

はじめに



第2図 調査地位置図 ($S = 1 : 10,000$)

第2章

きたうめもとあくしゃだに
北梅本悪社谷遺跡2次調査地



第2章 北梅本悪社谷遺跡2次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

本調査は、1998（平成10）年11月～1999（平成11）年2月の間に行われたE区6,265m²内における、試掘調査の結果を受けて実施したものである。試掘調査では、土坑・溝・須恵器窯の灰原と思われる遺構と須恵器・土師器・陶磁器などの土器や石器・窯業片が出土した。また本調査地の北西約20mには周知の窯跡である「悪社谷1号窯」がある。そのため埋文センター及び文化教育課・申請者の三者は遺跡の取り扱いについての協議を行い、土地改良総合整備事業に伴う工事により破壊される遺跡の記録保存を行うため、事前の発掘調査が必要と判断された。

調査は、古墳時代や古代の須恵器生産関連遺構や集落関連遺構の広がりの確認を目的とし、1999（平成11）年4月8日より埋文センターが本格調査を開始した。

なお試掘調査の結果については第5章で詳述しているので参考にされたい。

(2) 調査の経緯（第3・5図）

1999（平成11）年4月5日に調査事務所を設置する。4月8日より調査区を設定し重機により表土はぎを行う。調査対象地を3区に区分けし、北より1区・2区・3区とした。その後1区から遺構検出作業を行い、4月16日に1区遺構検出状況の写真撮影を行う。6月16日に1区完掘状況及び2区遺構検出状況の写真撮影を行う。8月12日に2区完掘状況及び3区遺構検出状況の写真撮影を行う。9月13日に3区完掘状況の写真撮影を行う。9月22日に全ての測量が完了し屋外調査を完了する。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B…Y・Z・a・b…m・nとし、東から西へ1・2…25・26と設定した。

(3) 調査組織

調査地 松山市北梅本町乙697-1外

遺跡名 北梅本悪社谷遺跡2次調査地

調査期間 1999（平成11）年4月8日～同年9月22日

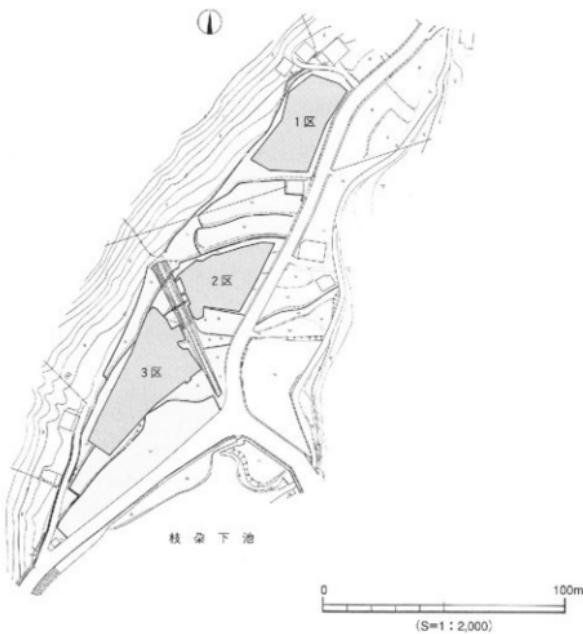
対象面積 6,265m²

調査担当 高尾 和長・山之内志郎

調査作業員 上河淳浩・後藤公克・重松吉雄・高松健太郎・松本正義・松田常義・横森淳一・池田昌登史・田丸真裕・高原雄貴・平岡祐二朗・藤方史朗・守谷亮・池田一紀・武智弘文・野首克幸・山本啓太・古川義章・阿部達也・仲神利卓・弓矢英明・政田尚久・石山丈史・大北隼人・山下徹・日吉直哉・藤方雄一・吉田良平・原山尚彦・藤本清志・松川栄治・金子育代・仙波千秋・仙波ミリ子・東山里美

2. 層位（第4図）

本遺跡は、悪社谷に水源を発する悪社川によって開削された標高146～154mの谷間に立地する。基本層位は5層に分層でき、第Ⅰ層灰色粘質土、第Ⅱ層橙色微砂質土、第Ⅲ層灰白色微砂質土、第Ⅳ層



第3図 調査位置図

橙灰色微砂質土、第V層粗砂を含む褐色粘質土である。旧地形は北東から南西へ傾斜しているが、現代の農耕に伴う削平により旧地形が段カットされている。

第I層：現代の農耕による耕作土である。調査区全域に厚さ6~80cmで堆積する。1区南半部は削平または流出により第II層が露呈している。

第II層：耕作土に伴う床土である。調査区全域に厚さ3~20cmで堆積する。

第III層：旧耕作土である。3区南東部を除く調査区全域に厚さ3~33cmで堆積する。

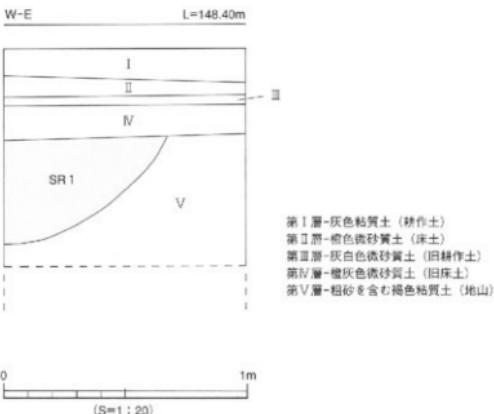
第IV層：旧耕作土に伴う旧床土である。1・2区東端部を除く調査区全域に厚さ4~40cmで堆積する。1・2区東端部は10~20cmの風化砂岩礫を含む黄色砂礫で造成している。

第V層：地山である。後述するすべての遺構はこの層を切り込んでいる。

3. 遺構と遺物（第5図）

本調査では、古代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路2条・土坑4基・溝3条・性格不明遺構3基である。遺物は須恵器・土師器・陶器・石鏃・砥石・敲石・磨石・石核・剝片・碎片である。

ここでは主な遺構と遺物について時代別に概説する。



第4図 基本土層図

〔1〕古代

遺構は流路2条・土坑1基・溝1条・性格不明遺構2基である。

(1) 流 路

SR1 (第6図、図版2)

1区中央のB3～G6区に位置する。SD1とSX1に切られ、北側は調査区外に続く。規模は残存検出長26.4m、幅0.7～5.7m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、部分的に二段掘りを呈する。方向は北東から南西方向へ流れた後、屈折して北西から南東方向へ蛇行する。埋土は5層に分層でき、1層褐色粘質土(橙白色含む)、2層灰色粘質土(橙色含む、やや砂質)、3層暗灰色粘質土、4層灰白色微砂質土、5層明灰色微砂質土である。遺物は須恵器と石器がある。

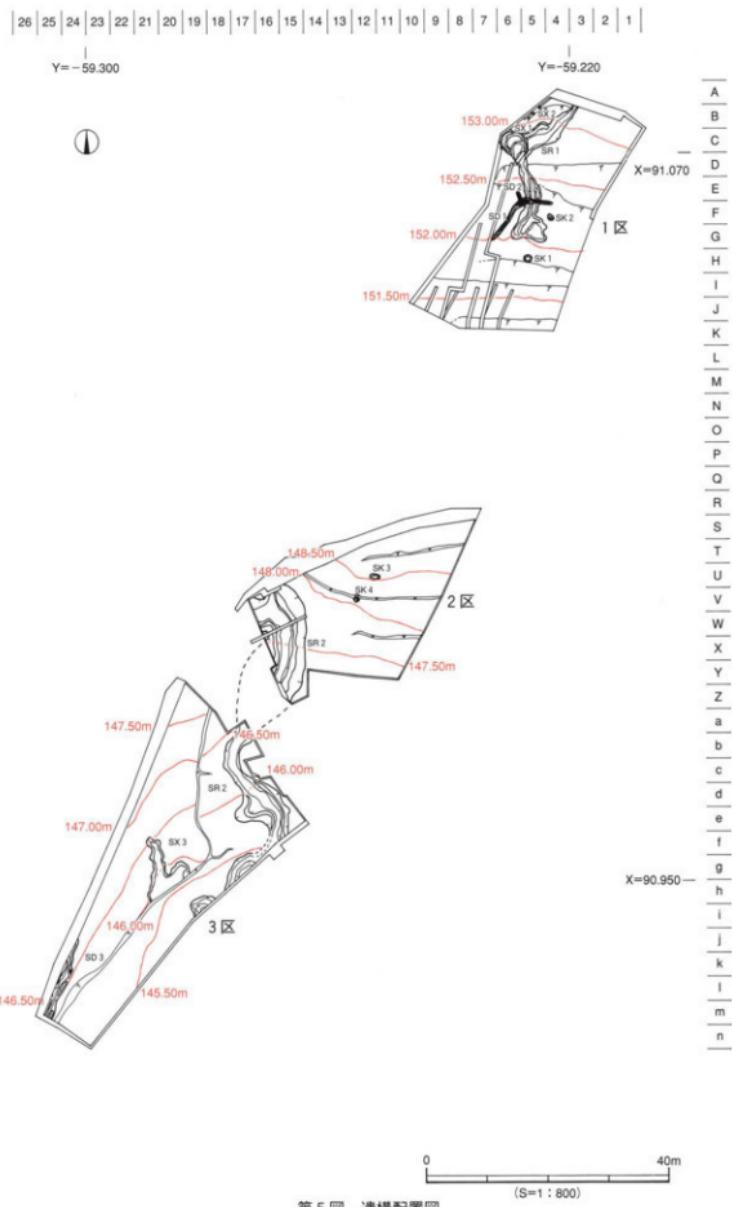
出土遺物 (第7・8図、図版4)

須恵器 (1～16) 1～6は壺である。1は口縁端部内外面に沈線をもつ壺である。2・3・5・6は「ハ」の字状の高台をもつ壺である。4は口縁部片である。7は長頸壺の肩部～胴部片である。肩部と胴部の境に1条の沈綫を施す。8～16は臺である。8は口縁部～肩部片である。端部は「コ」の字状を呈し、端面は平らにおさめる。頸部に三本平行線のヘラ記号が施される。頭部と肩部の境に段をなし、肩部には平行タタキ痕が顯著に残る。9～15は口縁部片である。9は8と同様に外反し、端部は「コ」の字状を呈し、端面はナデ凹む。10の端面は平らにおさめる。11の端面は平らでわずかに上下に拡張する。12～14は大型品で、器壁は厚く、端部外面に下垂する突帯が巡る。12・14は端面がややナデ凹む。15は口縁部片である。やや直立する口縁部の端面に凹みをもつ。16は頭部～肩部片である。頭部と肩部の境は凹みをもち、外面に平行タタキ痕が顯著に残る。

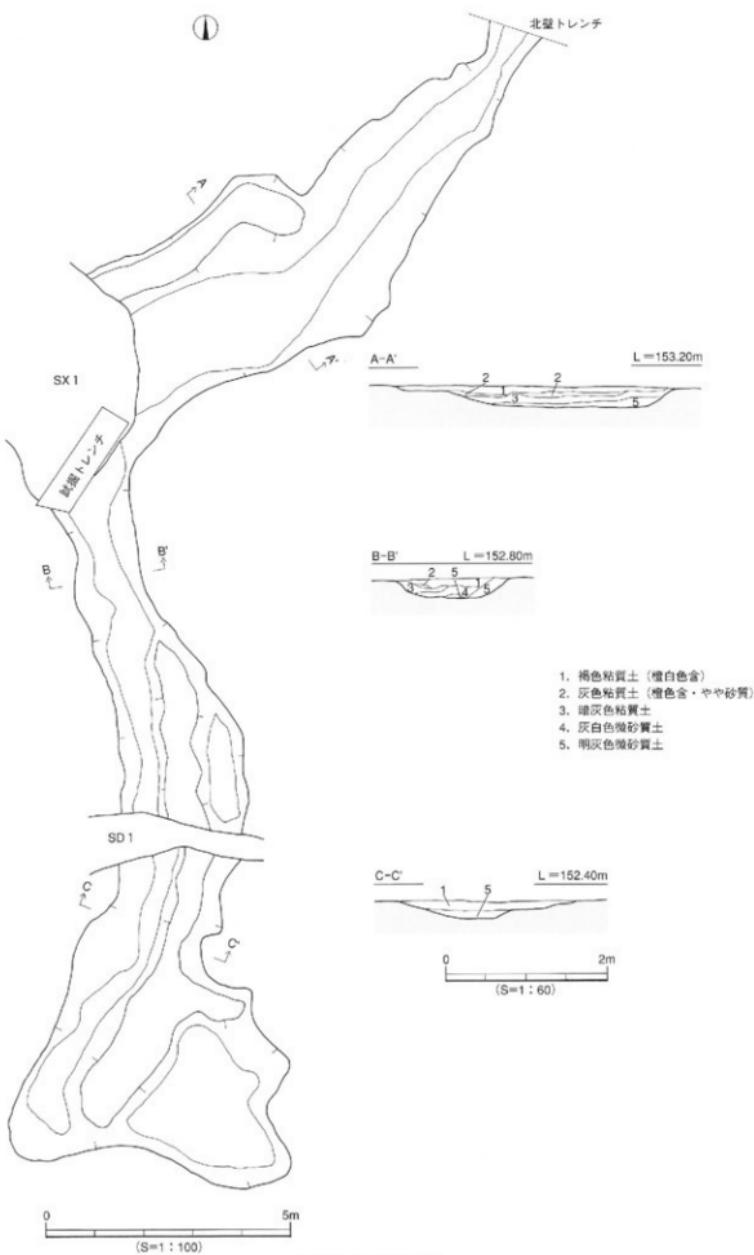
石器 (17) 刺片である。わずかに自然面が残る。サムカイト製。

時期：出土した須恵器の年代より、8世紀前半とする。

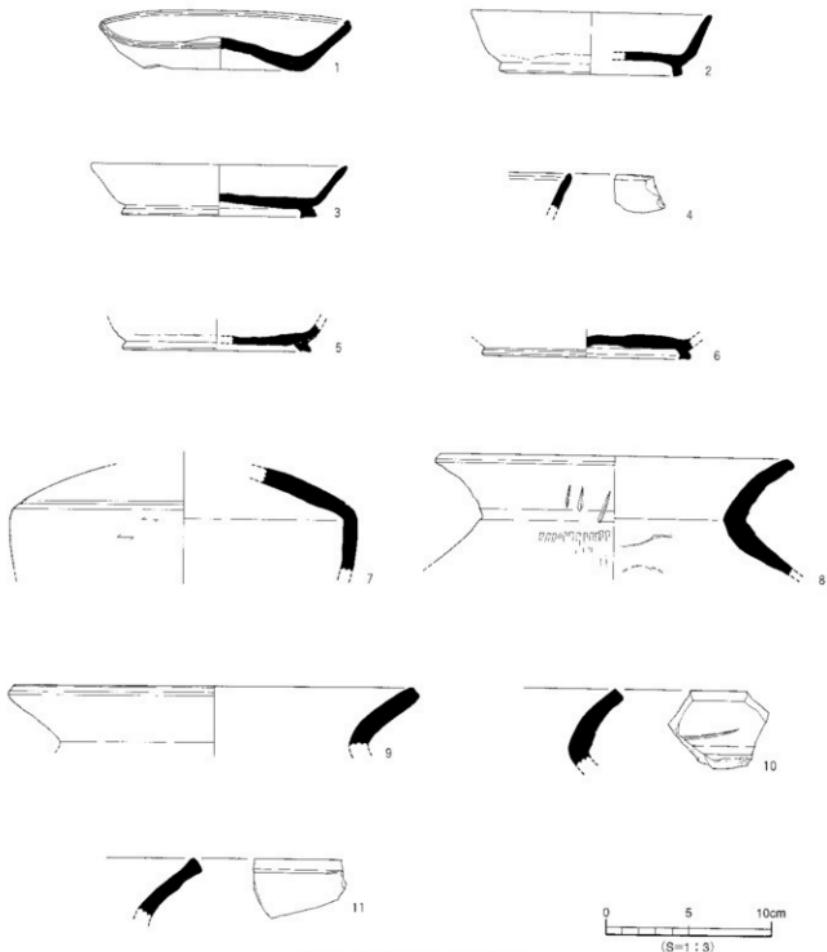
北梅本悪社谷道路 2 次調査地



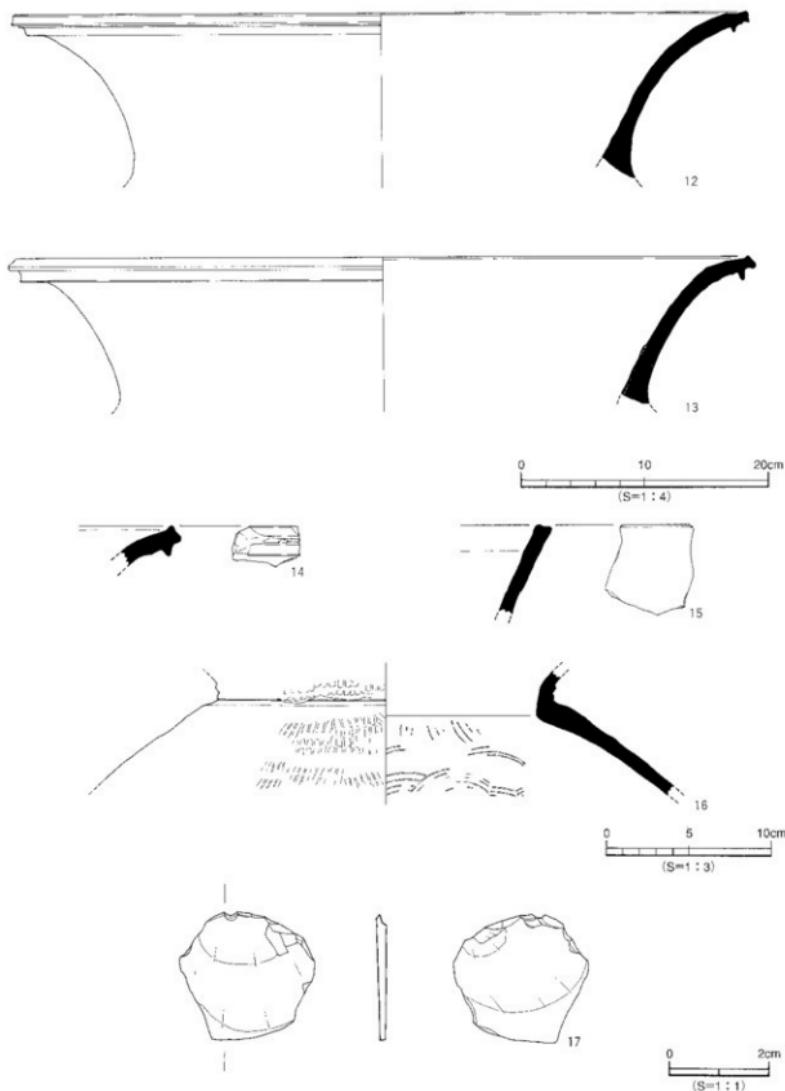
第5図 道構配置図



第 6 図 SR 1 測量図



第7図 SR 1 出土遺物実測図(1)



第8図 SR 1 出土遺物実測図(2)

SR 2 (第9図、図版3)

2区東及び3区西のU15～i19区に位置する。両端と中央部は調査区外に続く。規模は残存検出長65.0m、幅2.31～8.18m、深さ0.92mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、部分的に二段掘りを呈する。北東から南西方向へ大きく蛇行しながら流れている。堆土は8層に分層でき、1層灰色微砂質土(やや橙色混じり)、2層暗灰色シルト、3層黒色粘質土、3-②層灰褐色粘質土(黄色混じり)、4層暗灰色微砂質土(混じり気なし)、5層灰色微砂質土、6層暗灰色微砂質土(5層混じり)、7層褐色粗砂質土(有機物や流木含む)、8層灰色粗砂質土である。遺物は須恵器、石器、多量の流木や有機物がある。有機物や流木のうち、人工的に加工されたものはなかった。

出土遺物 (第10・11図)

須恵器(18～27)18～20は壺蓋である。18は天井部と口縁部の境に断面三角形の稜をもつ。20は中央部がやや突出する壺蓋のつまみである。21～23は壺である。扁平な蓋で、中形品(21)と大型品(22・23)がある。22と23は天井部にわずかな段を有し、口縁部が鍵状を呈する。24～26は壺である。24は口縁部が大きく外反し、端部は上方へ突出する。双耳瓶の可能性もある。25・26は長頸壺である。25は胴部片、26は「ハ」の字状に開くやや長い高台である。27は壺の頭部片である。頸部と肩部の間に1条の沈線を施す。

石器(28～33)28は平基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。赤色珪質岩製。29は石核である。自然面が残る。姫島産黒曜石製。30・31は剥片である。30は刃部に刃こぼれの痕跡を残す。赤色珪質岩製。31は一部に自然面を残す。サヌカイト製。32は砥石である。三面を使用面とし、片方の端部のみ残存する。石英粗面岩製。33は不明石器である。石器素材の可能性もある。結晶片岩製。

時期：流路の性格を考え、上記遺物のうち最も新しい須恵器の年代より、8世紀中葉とする。

(2) 土 坑**SK 4 (第12図、図版1)**

2区中央のV12・13区に位置する。平面形態は円形である。現代の耕作により遺構の大半を削平されている。規模は残存長径1.4m、短径1.02m、深さ12～49cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐色シルト(最下層は炭混じり)である。遺物は土師器と須恵器があるが、須恵器の壺は胴部片のため固化するに至らなかった。

出土遺物 (第12図、図版4)

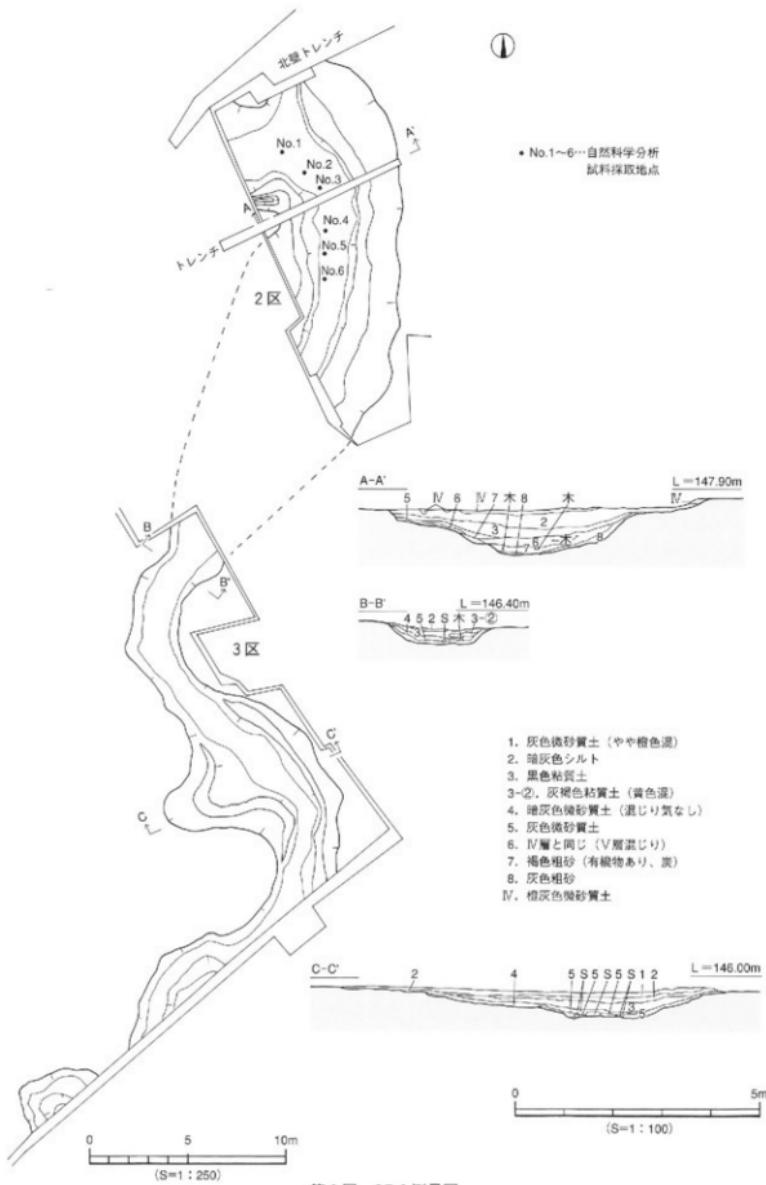
土師器(34・35)34は皿である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。器壁の摩滅が著しく調整は不明である。35は上鍋である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は「コ」の字状を呈し、端面は平坦におさめる。

時期：出土した土師器の年代より、8世紀初頭とする。

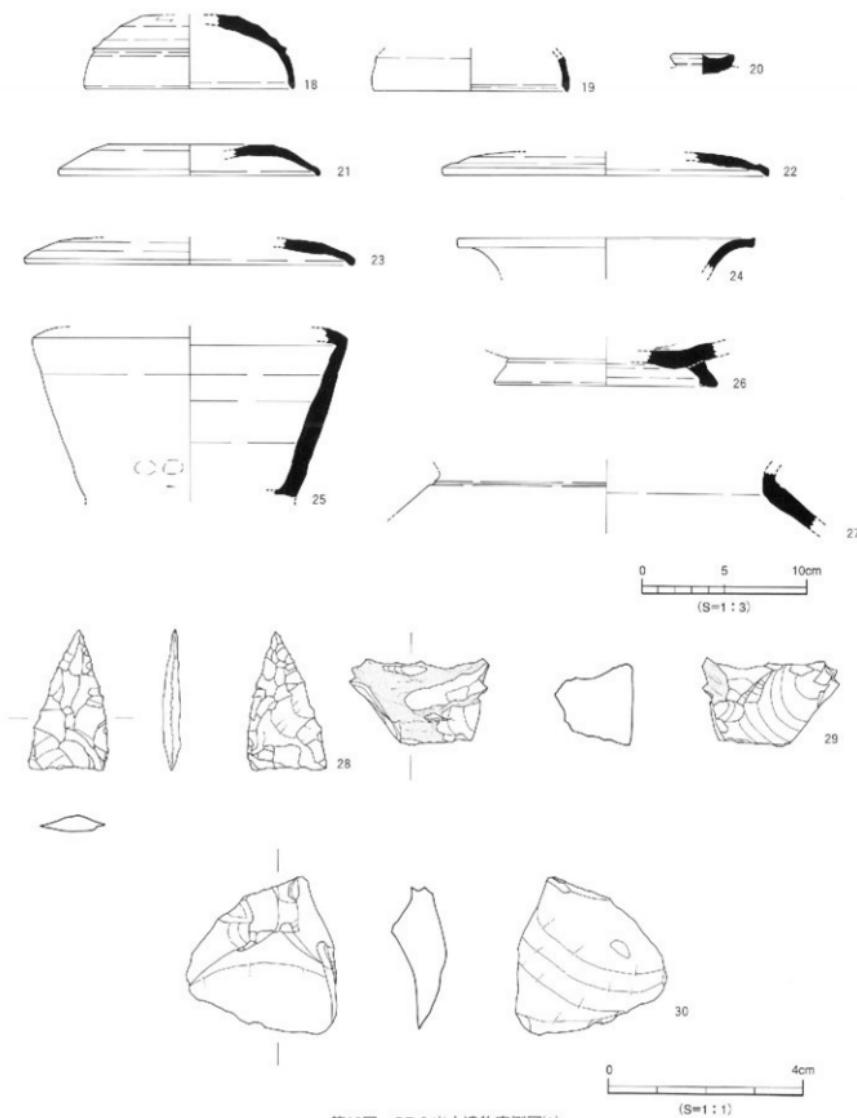
(3) 溝**SD 2 (第13図)**

1区中央のE6区に位置し、SD1に切られる。規模は残存検出長1.37m、幅23～34cm、深さ4cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐色粘質土である。遺物は須恵器があるが固化するに至らなかった。

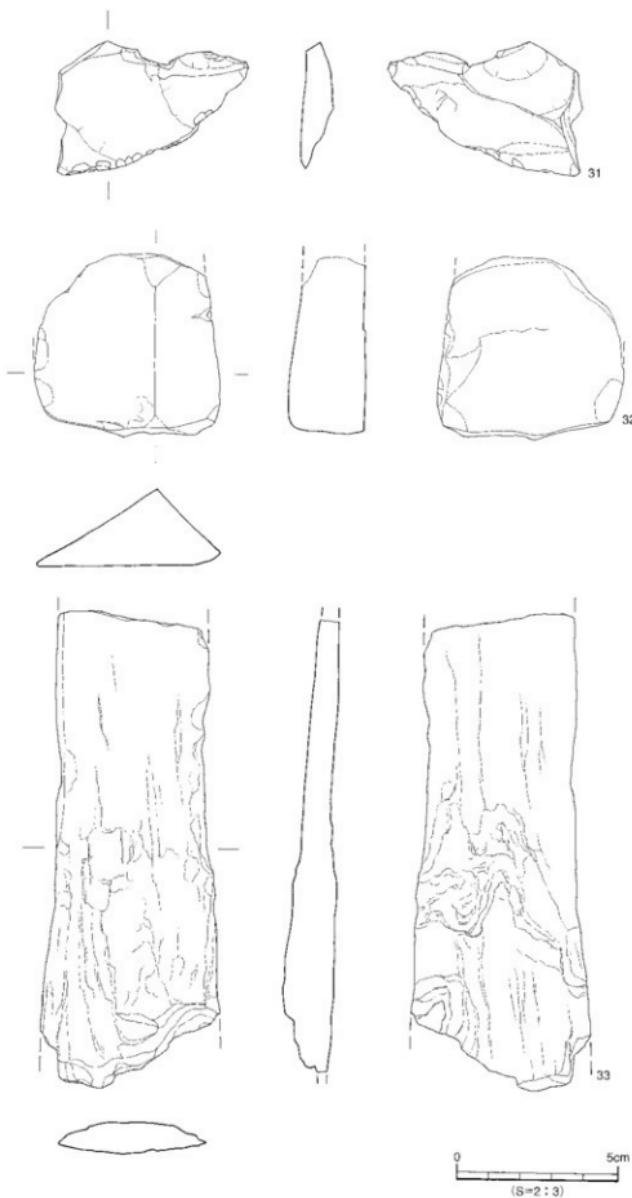
時期：遺構埋土がSR1-1層と同じであるため、8世紀前半とする。



第9図 SR 2測量図



第10図 SR 2 出土遺物実測図(1)

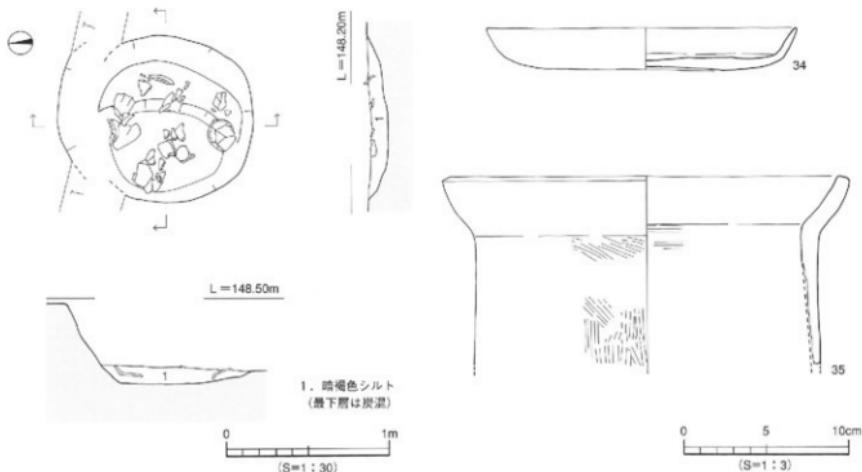


第11図 SR 2 出土遺物実測図(2)

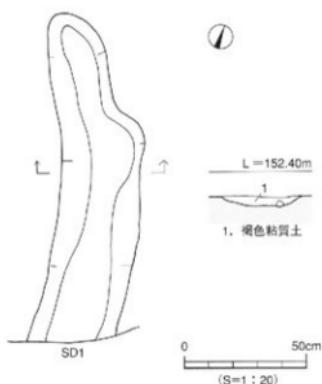
(4) 性格不明遺構

SX1 (第14図)

1区北西のC 5～D 6区に位置し、SR 1を切り、調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は残存長径4.88m、短径3.85m、深さ18cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は5層に分かれ、1層橙灰色微砂質土(橙色少、灰色多、炭含む)、2層灰色微砂質土(やや粘質)、3層橙灰色微砂質土、4層灰色微砂質土(2層より粗、橙色混じり)、5層暗灰色微砂質土(やや粗い)である。遺物は須恵器がある。



第12図 SK 4 測量図・出土遺物実測図

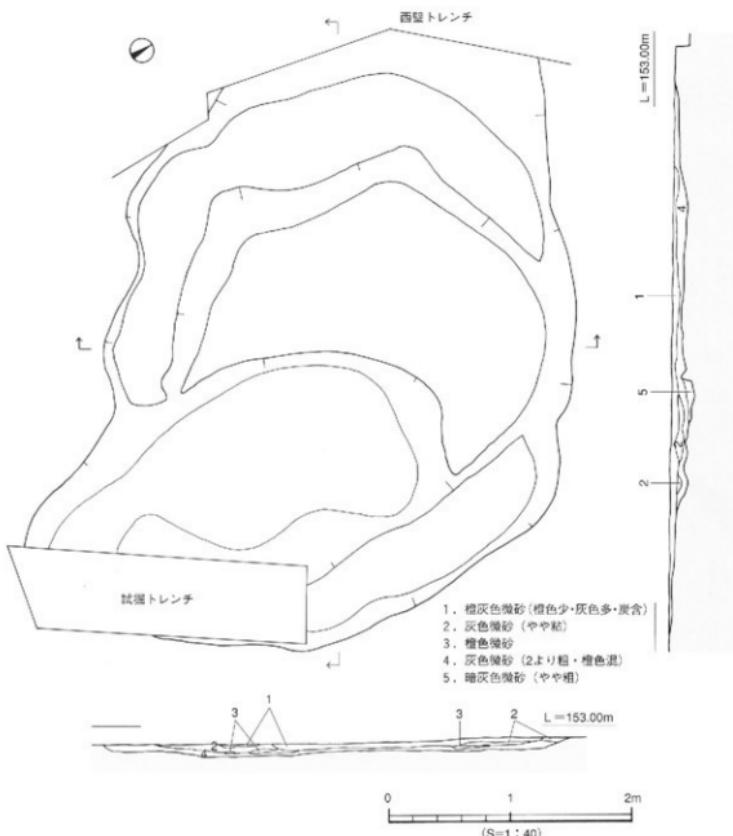


第13図 SD 2 測量図

出土遺物（第15図）

須恵器（36～44）36は蓋である。口縁部は短く屈曲し、端部はやや尖る。焼けひずんでいるが、中形品と思われる。37～40は壺である。37は口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。38は径が小さく短い高台がつく。39は「ハ」の字状の短い高台がつく。40は口縁部～体部片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反気味に伸びる。41は短頸壺の底部である。42～44は壺である。42は口縁部片である。口縁端部は「コ」の字状を呈し、平坦におさめる。43は頸部～体部片である。頸部と肩部の境に段をなし、体部外面に平行タタキ痕がわずかに残る。44は頭部～肩部片である。口縁部は直立気味に立ち上がる。頸部と肩部の境に1条の凸線をもつ。

時期：出土した須恵器の年代より、8世紀中葉とする。



第14図 SX 1測量図

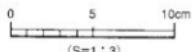
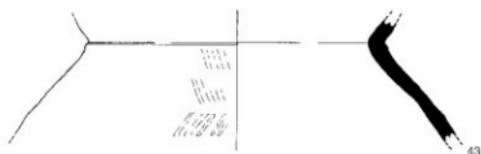
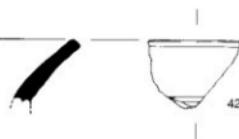
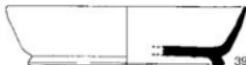
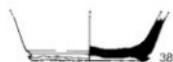
SX2 (第16図、図版2)

1区北西のB5区に位置し、北西部が調査区外、南東部を現代の耕作により削平されている。平面形態は不整形である。規模は長径1.68m、残存直径0.94m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐色粘質土である。遺物は須恵器・石器・窓壁片がある。

出土遺物 (第16・17図、図版4)

須恵器 (45~50) 45~46は壺である。45・46は口縁部~体部片である。47は端部は「コ」の字状を呈し、端面は平らでわずかに下方に拡張する。肩部には平行タタキ痕が顕著に残る。46は45と同様に口縁部が大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈し、端面はわずかにナデ凹む。47・48は口縁部~頸部片である。48は口縁部は大きく外反し、端面はナデ凹み、下方に尖り気味に拡張する。49は大型品で、器壁は厚く、端面は水平で下方に拡張し、端部外面に下垂する突帯が巡る。50は壺である。「ハ」の字状の短い高台がつく。50は皿の底部片である。

46



第15図 SX1 出土遺物実測図

石器（51～55）51～54は石鎚である。51・52は凹基無茎石鎚である。平面形態は二等辺三角形を呈する。サヌカイト製。53は平基無茎石鎚である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部と基部をわずかに欠損している。サヌカイト製。54は凹基無茎石鎚である。平面形態は二等辺三角形を呈する。基部がわずかに欠損している。緑色珪質岩製。55は敲石である。表面が滑らかで扁平な円盤の上下端に敲打痕を残す。

時期：埋土がSR1－1層と同じであることと、出土した須恵器の年代より、8世紀前半とする。

SX3（第18図）

3区中央のf20～h21区に位置する。平面形態は不整形である。南部を現代の耕作により削平されている。規模は残存長軸9.2m、短軸8.1m、幅2.2m、深さ15cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層黄色微砂質土、2層褐色シルト（やや粘質）である。遺物は須恵器がある。

出土遺物（第18図）

須恵器（56）56は蓋である。口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。端部外面に1条の沈線を施す。

時期：出土した須恵器の年代より、8世紀前半とする。

[2] 古代以降

遺構は、土坑1基、溝1条である。

(1) 土 坑

SK2（第19図）

1区中央のF4区に位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径1.36m、短径0.94m、深さ16cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層灰色微砂質土（橙色含む）、2層黄灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

時期：1層が後述するSD1と同じであることから、8世紀前半以降とする。

(2) 溝

SD1（第20図）

1区中央のB4～G7区に位置し、SR1を切る。規模は検出長13.1m、幅0.34～1.06m、深さ12cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

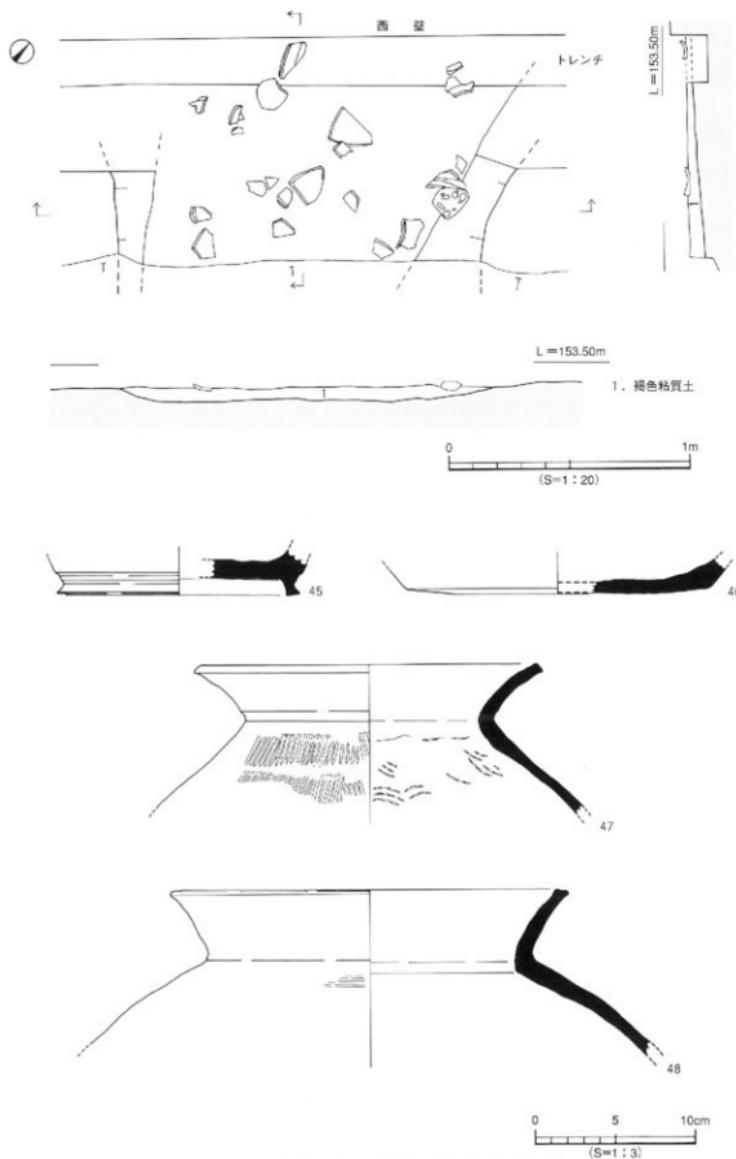
時期：SR1を切っていることから、8世紀前半以降とする。

[3] 近 現 代

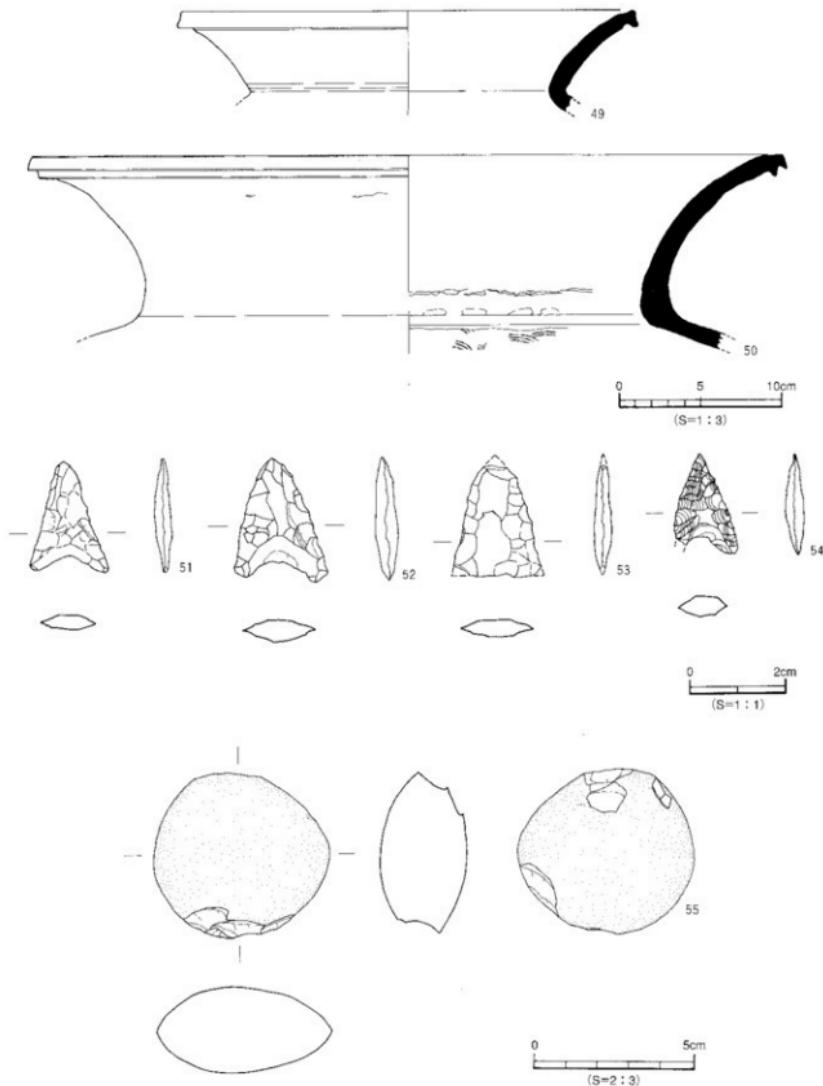
遺構は、土坑2基（SK1・3）と溝1条（SD3）がある。SD3からは近現代の陶磁器が出土したが、SK1・3から出土遺物はなかった。これらの遺構埋土は灰色粗砂（炭混じり）であることから、遺構の時期は近現代と考えられる。詳細は遺構一覧を参考にされたい。

[4] 地点不明の遺物

表探した遺物がある。（第21・22図）

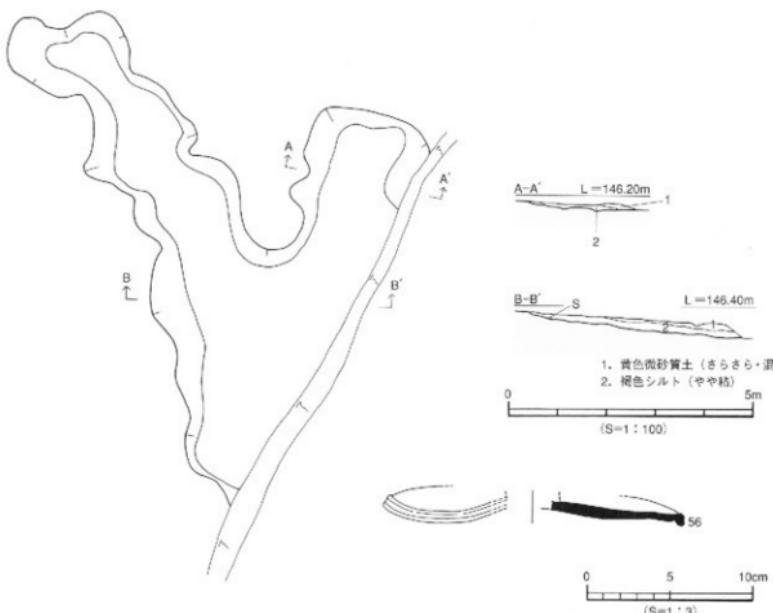


第16図 SX 2 測量図・出土遺物実測図(1)



第17図 SX 2 出土遺物実測図(2)

①



第18図 SX3測量図・出土遺物実測図

須恵器 (57~64) 57は蓋である。口縁部は短く屈曲し、端部は丸くおさめる。58は壺である。「ハ」の字状の短い高台がつく。59・60は壺である。59は口縁部片である。口縁端部はナデ凹み、上方へわずかに拡張する。60は短頸壺の底部片である。底部より内湾氣味に立ち上がる。61~63は甕である。61・62は口縁部片である。61は口縁部が大きく外反し、端部は「コ」の字状を呈し、端面はナデ凹む。62は器壁は厚く、「コ」の字状の端部に下垂する突帯が巡る。63は頸部片である。頸部にわずかな1条の凸線が巡る。64は壺の口縁部片と大型甕の胴部片が接着している。

石器 (65~77) 65・66は石鎚である。65は先端部の一部と基部を欠損しているが平基無茎石鎚と思われる。平面形態は二等辺三角形を呈する。サヌカイト製。66は凹基無茎石鎚である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部と基部を欠損している。サヌカイト製。⁶⁷は石核である。サヌカイト製。⁶⁸は磨石である。表面は滑らかで扁平な円錐。約半分を失する。69~70・76~77は剥片である。⁷¹~⁷²は碎片である。

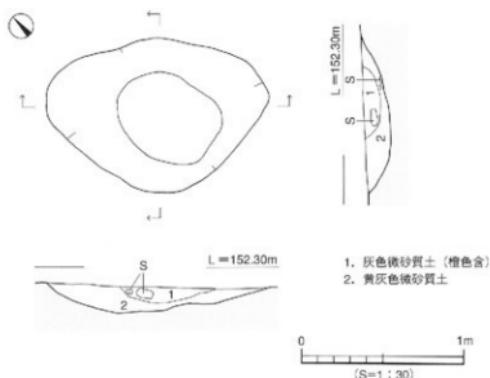
4. 小 結

本調査では、古代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路2条・土坑4基・溝3条・性格不明遺構3基を検出した。遺物は須恵器・土師器・陶磁器・石器・窯壁片・流木・有機物が出土した。ここでは時代ごとに遺構と遺物についてまとめを行う。

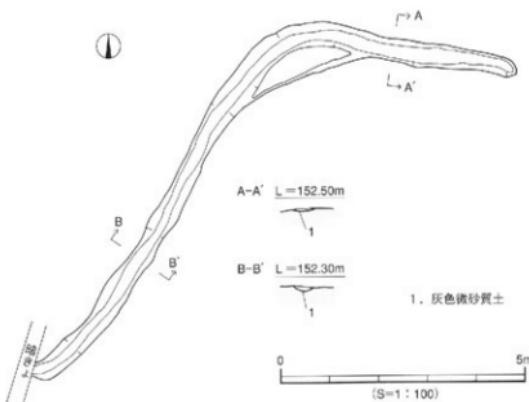
(1) 古代

古代の遺構は、流路 2 条・土坑 1 基・溝 1 条・性格不明遺構 3 基を検出した。すべて 8 世紀代の遺構である。これらのうち最も古い遺構は SK 4 である。性格については墓の可能性も考えられるが、現代の削平により埋土のほとんどが残っていなかったため確定することはできなかった。

SX 1 と 2 は須恵器生産に関連する遺構と考えられる。SX 2 は北西約 20m の位置に悪社谷 1 号窯が存在していることと須恵器と窯壁片の出土状況から、悪社谷 1 号窯の灰原である可能性が高い。SX 1 は悪社谷 1 号窯より時期的にやや後出する未確認の窯の関連遺構と推測される。

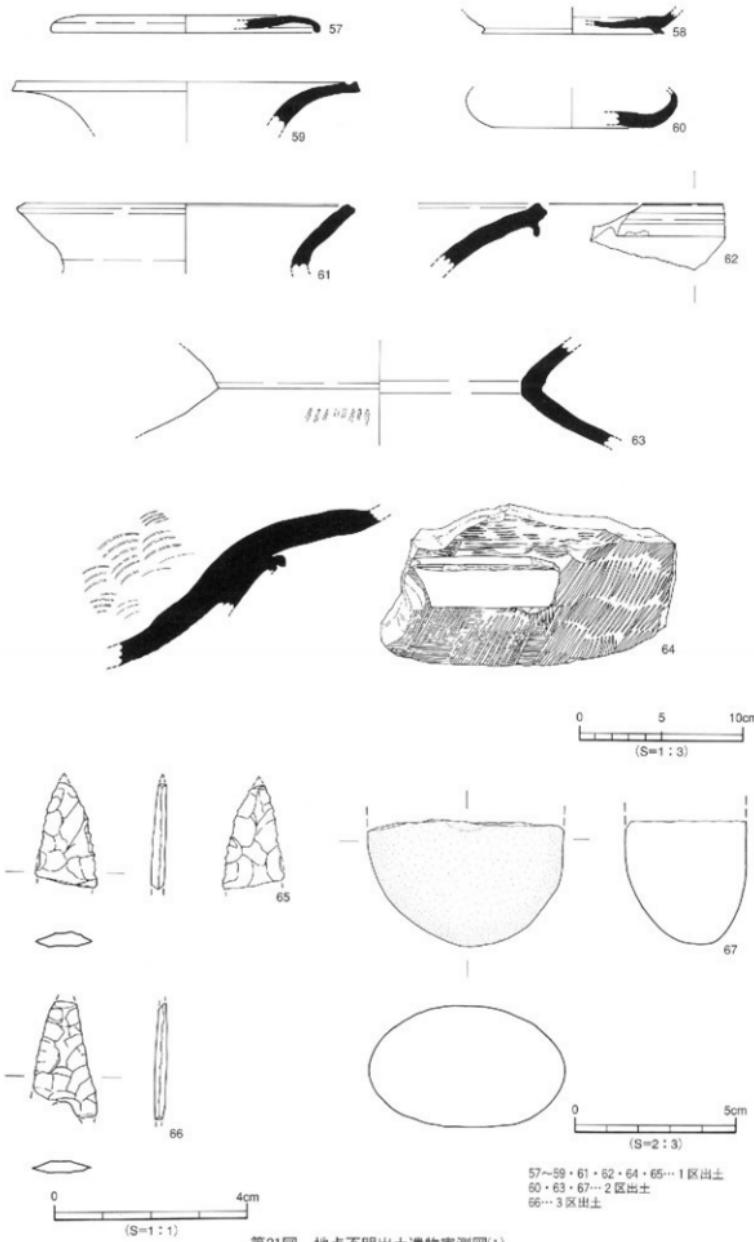


第19図 SK 2 測量図



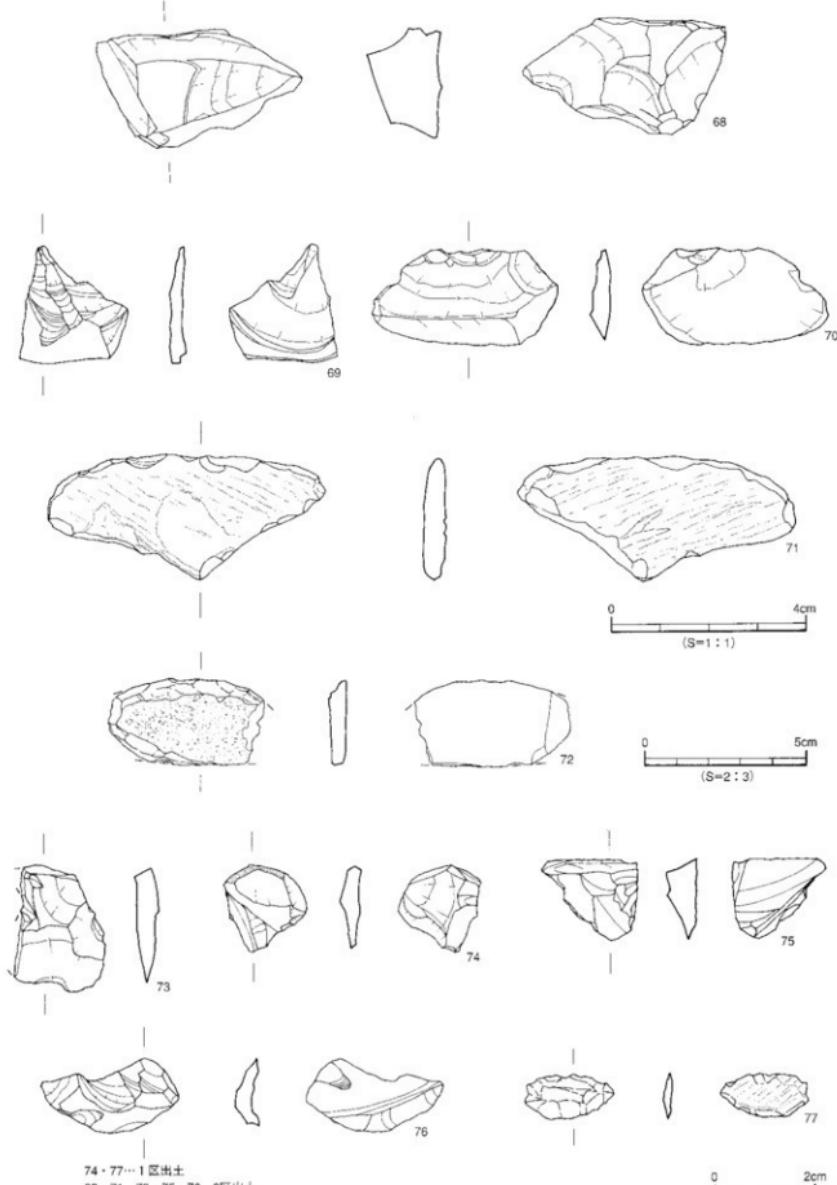
第20図 SD 1 測量図

北椙木原社谷遺跡 2 次調査地



第21図 地点不明出土遺物実測図(1)

小 結



74・77…1区出土
68・71・73・75・76…2区出土
69・70…3区出土

第22図 地点不明出土遺物実測図(2)

SR 1 と 2 は埋土下層に砂質土が堆積していることから、かつては水が流れていることがうかがえる。遺構の性格から、出土した須恵器や石器は流入品と考えられる。

遺物は、須恵器・土師器・石器・窯壁片・流木・有機物が出土した。SK 4 は遺構の残存状況が悪いにもかかわらず国化した 2 点の土師器（34・35）は比較的の残存状況が良く、当該地区における基礎資料のひとつとなるであろう。

SR 2 は多量の流木や有機物が出土したが、加工痕跡のある木製品などは出土しなかった。流木をランダムに抜粋し樹種同定した結果、マツ科の樹木が確認されている。このことは周辺地域においてマツが自生し、窯の燃料として利用していた可能性が指摘されている。（第 6 章参照）

（2）古代以降

古代以降の遺構は溝と土坑を検出し、集落の一角を確認することができた。しかし遺物が出土していないため正確な年代比定ができなかった。

（3）近現代

近現代の遺構は溝と土坑を検出し、集落の一角を確認することができた。遺物は陶磁器がある。

本調査では、当初目的として掲げていた生産関連遺構の解明については、灰原と考えられる遺構の検出によって少なからず目的を果たすことができた。しかし、窯本体の発掘調査はもとより、須恵器工人の居住区としていたであろう集落関連遺構の検出には至らなかった。

今後も周辺地域での窯跡の確認や資料収集の蓄積を行い、古代における生産地と消費地との物流を解明していく必要があろう。

遺構・遺物一覧 一丸 例一

（1）以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は仙波千秋・仙波ミリ子が、遺物観察表は山之内・高尾久子が作成した。

（2）遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）弥生→弥生上器、土師→土師器、須恵→須恵器、陶磁→陶器・磁器。

（3）遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）：復元推定値

形態・施文欄 上器の各部位名称を略記。

例）口縁→口縁部、口端→口縁端部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（ ）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（1～4）、多→「1～4 mm 大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

遺構一覧

表2 自然流路一覧

流路(SR)	地 区	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出 土 物	時 期	備 考
1	B 3 ~ G 6	凸形状	(26.4) × 0.7 ~ 5.7 × 0.25	北~南	褐色粘土 石器	褐色 石器	古代	SD 1 ~ SR 1 に切られる 調査区外に続く
2	u 15 ~ i 19	逆V形状	(65.0) × 2.31 ~ 8.18 × 0.92	北~南	灰色粘土 洗木・有機物	原生層・石器 洗木・有機物	古代	調査区外に続く

表3 土坑一覧

土坑(SK)	地 区	平面部	断面部	規 模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	出 土 物	時 期	備 考
1	H 5	円 形	盤状	1.31 × 1.17 × 0.11	灰色粘土質土(灰化)		現代	
2	F 4	椭円形	レンズ状	1.36 × 0.94 × 0.16	灰色粘土質土(灰化)		古代以降	
3	z 12	横円形	盤状	1.74 × 1.14 × 0.07	灰色粘土質土 (灰化)		現代	
4	V 12・13	円 形	シングル	(1.14) × 1.02 × 0.12 ~ 0.49	褐色シルト	十字型 頭骨	古代	

表4 溝一覧

溝(SD)	地 区	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出 土 物	時 期	備 考
1	Z 4 ~ G 7	レンズ状	(33.10) × 0.34 ~ 1.06 × 0.12	北東~東南	灰色粘土質土		古代以降	SR 1 を切る
2	E 6	レンズ状	(1.37) × 0.23 ~ 0.34 × 0.04	北~南	褐色粘土質土	原生層	古代	SD 1 に切られる
2	j 24 ~ m 25	U 字状	(33.98) × 0.22 ~ 1.52 × 0.32	北東~南西	粘土質土(灰化)	陶磁器	現代	調査区外へ続く

表5 性格不明遺構一覧

性格 遺構 (SK)	地 区	平面部	断面部	規 模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	出 土 物	時 期	備 考
1	C 5 ~ D 6	不整形	直状	(4.88) × 3.85 × 0.18	褐色粘土質土	原生層	古代	SR 1 を切る 調査区外に続く
2	B 5	不整形	直状	1.68 × (0.94) × 0.07	褐色粘土質土	原生層 石器・焼瓦片	古代	調査区外に続く
3	(B 5 ~ L 11)	不整形	レンズ状	(9.2) × 8.1 × 0.15	褐色粘土質土	原生層	古代	

表6 SR1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形 塗・施 文	調 整		色調 (内面)	胎 土	土 成	備 考	因 版
				外 面	内 面					
1	手	口径 奥径 器高	15.0 9.4 3.1	口縁部は内面青灰色にのびる。口縁部は丸く、内外向外に各2枚の沈痕を残す。	④回転ヨコナゲ ⑤回転ヘラケメリ	回転ヨコナゲ	乳白色 乳青灰色	密 ○	抜け ひずみ	4
2	高台 付耳	口径 底径 器高	(14.6) (11.6) 3.8	口縁部は直線的に立ち上がり、始部は細く、丸みをもつ。低い高台。	③瓦紙ヨコナゲ ④マツツ	回転ヨコナゲ	白灰色 白灰白色	密 ○		
3	高台 付耳	口径 底径 器高	(15.4) (11.6) 3.1	口縁部は直線的に立ち上がり、始部は尖り気味となる。低い高台は水平に接地する。	⑤回転ヨコナゲ	回転ヨコナゲ	青灰色 (=灰白色) 灰色	密 ○		4
4	耳	残高	2.2	口縁部は尖り気味となる。	回転ヨコナゲ	回転ヨコナゲ	灰色 灰白色	密 ○		
5	高台 付耳	口径 底径 器高	(11.2) (11.6) 1.7	「ハ」の字状の低い高台。底地部は水平となる。	⑥回転ヨコナゲ ⑦回転ヘラケメリ	回転ヨコナゲ	淡色 灰白色	密 ○		
6	高台 付耳	底径 器高	12.6 1.5	「ハ」の字状の低い高台。底地部は水平となる。	⑧瓦紙ヨコナゲ ⑨回転ヘラケメリ	回転ヨコナゲ →ナゲ	青灰色 青灰白色	密 ○		

SR1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	因版
				外 面	内 面					
7	亞	残高 6.2	肩のはる体調。外面に1条の沈線を施す。	亜心不規 渦状目地ハラケズリ →ナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰白色	密 ○			
8	甕	口径 (21.0) 残高 7.0	口縁部は大きく外反し、縫部は平ら。	◎回転ヨコナデ 砂タキ タキ→ナデ	◎小明 砂利ヨコナデ 円底タキ→回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉 ヘラ毛等	4	
9	甕	口径 (24.0) 残高 3.6	口縁部は大きく外反し、縫部はややテテ凹む。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ○			
10	甕	残高 4.7	口縁部は大きく外反し、縫部は平ら。	不明	回転ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○			
11	甕	残高 3.6	口縁部は大きく外反し、縫部は平ら。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○			
12	甕	口径 (58.8) 残高 13.5	人型品。口縁部は大きく外反し、縫部は「コ」の字状を呈し、外面にト垂する突帯がつく。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	岩灰色 灰色	密 ○	自然釉	4	
13	甕	口径 (38.8) 残高 12.0	大型品。口縁部は大きく外反し、縫部は下方に肥厚し、外側にト垂する突帯がつく。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデナデ	青灰色 灰色	密 ○			4
14	甕	残高 2.5	口縁部は「コ」の字状を呈し、外側にト垂する突帯がつく。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰白色	密 ○			
15	甕	残高 5.5	口縁部は直線的に立ち上がり、縫部はナデナデ	ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 長(1) ○			
16	甕	残高 7.6	口縁部は腹部より外反しながら、立ち上がる。	◎タキ・回転ヨコナデ 砂利ヨコナデ 泥付タキ(55cm) 回転ヨコナデ	◎回転ヨコナデ ◎回転タキ→回 転ヨコナデ	灰色 青灰色	密 ○			

表7 SR1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	因版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
17	弱片	完形	サメカイト	2.6	2.8	0.2	2.05		

表8 SR2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	因版
				外 面	内 面					
18	环置	口径 (12.6) 残高 4.5	天井部は平ら。天井部と口縁部の間に断面三角形の棱をもつ。口縁端部は内側する。	◎回転ヘラケズリ ◎回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰白色	石英(1~3) ○			
19	环垂	口径 (11.8) 残高 2.2	口縁端部は内側する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰白色	密 ○			
20	环盖	ワヨムギ 3.8 残高 1.3	中央部がやや突出する扁平なつまみ。	回転ナデ		灰色	密 ○			
21	甕	口径 (15.7) 残高 1.9	口縁部はよく屈曲し、縫部は丸みをもつ。	◎回転ヘラケズリ ◎回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 石英(1) ○	自然釉		
22	甕	口径 (19.8) 残高 1.4	口縁部はよく屈曲し、縫部はやや尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○			

遺物観察表

SR 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外顔) 色調 (内顔)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
23	窓	口径(20.0) 残高 1.6	口縁部は僅く扇出し、底部は丸みをもつ。	圓弧ナゲ ナメツ	圓弧ナゲ ナメツ	灰色 灰褐色	密 ○			
24	窓	口径(18.0) 残高 2.0	口縁部は大きく外反し、底部は上方へ突出する。	圓弧ナゲ ナメツ	圓弧ナゲ ナメツ	暗青灰色 灰色	密 ○			
25	窓	窓径 10.2	肩にはるる作部。	直線ナゲ 直線ナメツヘラケズリ	圓弧ナゲ ナメツ	灰色 灰褐色	密 長(2) ○			
26	窓	底径(13.4) 残高 2.7	「ハ」の字状のやや長い高台。接縁部は水平となる。	圓弧ヨコナゲ ナメツ	圓弧タクキ	灰色・青灰色 灰色	密 ○			
27	裏	窓高 3.3	肩部と頭部の間に1条の沈縫をもつ。	圓弧ヨコナゲ ナメツ	圓弧ヨコナゲ ナメツ	灰色 灰褐色	密 ○		自然釉	

表9 SR 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
28	石 砕	完形	赤色綈質岩	2.8	1.6	0.3	1.51		
29	石 砕	完形	黒曜石	2.8	1.8	1.6	7.47	延島産	
30	刺 片	完形	赤色綈質岩	3.2	3.1	1.0	8.91		
31	刺 片	完形	サメカイト	6.0	4.1	0.9	24.39		
32	亂 石	片方の端部のみ残る	右壳粗面岩	5.6	5.7	2.35	64.04		
33	不 明	ほぼ完形	結晶片岩	14.7	5.6	1.6	143.51		

表10 SK 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外顔) 色調 (内顔)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
31	瓶	口径(18.4) 残高 2.6	口縁部は痕跡的に立ち上がり、端部は尖り氣味におきめる。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	長(1) ○			4
35	上鉢	外径(24.8) 内径(23.4) 残高 11.5	口縁部は内汚気味に立ち上がり、端部は水平をなす。	①マメツ ②ハケ(4本/cm) ハクリ	①ナデ ②ハケ(4本/cm) ハクリ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~5) 石粒多い ○			4

表11 SX 1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外顔) 色調 (内顔)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
36	窓	口径(14.6) 残高 1.1	口縁部は僅く扇出し、底部はやや尖る。	圓弧ナゲ ナメツ	互軸ナゲ ナメツ	灰色 灰褐色	密 長(1) ○		傾け ひずみ	
37	杯	口径(13.4) 底径 9.6 残高 3.0	口縁部は外反気味にのび、口縁部内面に1条の沈縫をもたらす。	①圓弧ナゲ ②ハケズリ→ナゲ	圓弧ナゲ ナメツ	灰色 灰褐色	密 ○			

SX1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
38	高台付环	底径 (6.9) 残高 2.7	体部は外気気泡に立ち上がる。径が小さく、切い高台。	④回転ナデ ⑤ナデ	回転ナデ	青灰色 古灰色	密 ○			
39	高台付环	口径 (14.7) 底径 (11.9) 残高 3.6	口縁部は直線部に立ち上がり、縁部はやや尖る。「ハ」の字状の深い窪み。接触部は水平となる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○			
40	耳	口径 (16.0) 残高 5.6	体部は内気気泡に立ち上がり、口縁部は外気気泡にのげる。縁部はわずかに外傾し、曲する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 古灰色	石・長(1~2) ○			
41	底	底径 (8.0) 残高 1.8	体部は内清氣泡に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 古灰白色	密 ○	自然 焼け ひびき		
42	底	口径 4.0	口縁部は大きく外反し、縁部は平ら。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○			
43	裏	底径 (18.2) 残高 7.5	口縁部は腹部より外気気泡に立ち上がる。	マメツ(タキ)	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○			
44	壳	口径 (23.4) 残高 3.8	口縁部は肩のはる肩部より直立気泡に立ち上がる。	回転ナデ(タキ)	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 長(1) ○			

表12 SX2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 琴		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
45	高台付环	底径 (15.0) 残高 2.4	「ハ」の字状の深い窪み。接触部は水平となる。	④回転ヨコナデ (黄土ナデ 零回転ナデ ナデ)	回転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然 焼		
46	底	底径 (18.8) 残高 2.1	平底の底部。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	青 ○			
47	裏	口径 (20.6) 残高 9.3	口縁部は大きく外反し、縁部は平らでわずかに下方に膨張する。	④回転ヨコナデ (中行タキ→口 コナデ)	④回転ヨコナデ 筋向心円文タキ ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○	自然 焼		
48	生	口径 (23.2) 残高 10.4	口縁部は大きく外反し、縁部は平らでわずかに下方に膨張する。	④回転ヨコナデ (回転ヨコナデ ナデ)	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○	自然 焼		
49	裏	口径 (27.9) 残高 6.3	口縁部は大きく外反し、縁部はナデ凹み、下方に大きく尖り突起を呈する。	回転ナデ	④回転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	密 ○			
50	裏	口径 (40.4) 残高 12.0	大型。口縁部は大きく外反し、縁部は「コ」の字状を呈し、外側に下垂する突起がつくる。	④回転ヨコナデ (筋向心円文タキ ナデ ナツ)	④回転ヨコナデ 筋向心円文タキ ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○			4

表13 SX2 出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
51	石 砧	完形	サヌカイト	2.3	1.6	0.3	0.90		4
52	石 砧	完形	サヌカイト	2.6	1.9	0.45	1.86		4
53	石 砧	ほぼ完形	サヌカイト	2.3	1.8	0.35	1.63		4

遺物観察表

SX2 出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
54	石 箕	ほぼ完形	緑色紺質岩	2.1	1.3	0.4	0.92		4
55	石 箕	光沢	不明	3.2	5.3	2.65	92.17		

表14 SX3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内)面	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
56	壺	口径(18.2) 残高 1.4	天井部は平ら。口縁部は弧く屈曲し、外面に1条の沈線を施す。縁部は丸くおさめる。 つまみの接合痕あり。	回転ヘラクスリナダ ノダ 回転ヘラクスリコナダ ノダ 回転ココナダ→ナダ ココナダ	回転ココナダ→ナダ ココナダ	青灰色 青灰色	青灰色 青灰色	青 ○	焼け ひずみ	

表15 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内)面	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
57	壺	口径(16.2) 残高 1.1	口縁部は弧く屈曲し、縁部は丸くおさめる。	回転ナダ	回転ナダ	青灰色 青灰色	青 ○	長(1)		
58	臺 台环	底径(11.2) 残高 1.4	「ハ」の字状の短い臺台。接地面は水平となる。	⑩回転ナダ ⑨ナダ	回転ナダ	灰色 灰色	青 ○			
59	壺	口径(20.9) 残高 2.7	口縁部は大きく外反し、縁部は丸くおさめる。上方へわずかに傾張する。	回転ナダ	回転ナダ	灰色 灰色	青 ○			
60	壺	底径(9.7) 残高 2.3	体部は内湾気味に立ち上がる。	回転ナダ	回転ナダ	青灰色 青灰色	青 ○	長(1)	焼け ひずみ	
61	壺	口径(19.9) 残高 3.9	口縁部は人さく外反し、縁部はややナガ四む。	⑪薄回転ナダ ⑩不利	不明	青灰色 青灰色	青 ○			
62	壺	残高 4.0	口縁部は大きく外反し、縁部は「コ」の字状を呈し、外側に下垂する突筋がつく。	回転ナダ タタキ	回転ナダ	青灰色 青灰色	青 ○			
63	壺	底径(20.0) 残高 6.4	口縁部は大きく外反する。	回転ナダ タタキ	回転ナダ	灰色 灰色	青 ○	長(1)	自然船 流込み ひずみ	
64	壺・臺	口径(16.0) 残高 3.2	壺と大型臺が接着している。	(発) 平行タタキ	(発) 同心円文タタキ→ ナダ	灰白色 灰白色	青 ○		焼け ひずみ	

表16 地点不明出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
65	石 箕	ほぼ完形	サヌカイト	2.1	1.3	0.25	0.93		
66	石 箕	ほぼ完形	サヌカイト	2.4	1.3	0.25	0.83		
67	石 箕	1/2	不明	3.9	6.0	3.8	124.68		
68	石 箕	光沢	サヌカイト	2.4	4.2	1.4	11.77		

地点不明出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
69	剝片	完形	頁岩	2.4	2.2	0.3	2.06		
70	剝片	完形	サスカイト	2.0	3.8	0.45	4.01		
71	剝片	完形	結晶片岩	2.5	5.6	0.45	9.26		
72	剝片	ほぼ完形	サスカイト	2.6	4.8	0.65	11.22		
73	剝片	ほぼ完形	单色砾質岩	2.6	1.8	0.45	2.47		
74	研片	完形	赤灰色質岩	1.8	1.7	0.4	1.29		
75	研片	完形	墨岩石	1.6	1.9	0.6	1.81	墨晶系	
76	研片	光形	黒輝石	1.5	2.8	0.6	1.86	鷲鳥塗	
77	研片	完形	結晶片岩	0.9	1.8	0.15	0.39		

第3章

きたうめもときたいけ
北梅本北池遺跡



第3章 北梅本北池遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

本調査は、1998（平成10）年10月～1999（平成11）年2月の間に行われたC・D区69,018m²内における、試掘調査の結果を受けて実施したものである。試掘調査では、溝・柱穴・列石などの遺構と遺物包含層及び弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器などの土器や石器が出土した。また、本調査地の北西約300mには周知の須恵器窯である潮見山南窯址があり、北部の丘陵部にはかつて古墳が存在していたとの周辺住民からの情報もある。そのため埋文センター及び文化教育課・申請者の三者は、遺跡の取り扱いについての協議を行い、土地改良総合整備事業に伴う工事により破壊される遺跡の記録保存を行うため、事前の発掘調査が必要と判断された。

調査は、古墳時代や古代における集落閑連遺構の広がりの確認を目的とし、1999（平成11）年10月7日より埋文センターが本格調査を開始した。

なお試掘調査の結果については第5章で詳述しているので参考にされたい。

(2) 調査の経緯（第23・25図）

1999（平成11）年10月7日に調査事務所を設置する。10月14日に調査区を設定した。調査区は中央部にある農道により東西2区に区分けし、西側を1区、東側を2区とした。更に水田の区画により1区はA～Fに、2区はA～Dに細分し、重機により表土はぎを1区から開始した。その後遺構検出作業を行い、11月11日に1区A～Eの遺構検出状況の写真撮影を行う。11月30日に1区A・B、12月17日に1区C・D、12月27日に1区Eの完掘状況の写真撮影を行う。

2000（平成12）年1月5日からは2区の調査を開始する。6日より調査区を設定し重機により表土はぎを行う。その後遺構検出作業を行い、2月1日に2区A・C・Dの遺構検出状況の写真撮影を行う。2月18日に2区Bの遺構検出状況の写真撮影を行う。3月10日に1区Fの遺構検出状況の写真撮影を行う。3月27日に全調査区の完掘状況の写真撮影を行う。3月31日に全ての測量が完了し屋外調査を完了する。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B…X・Yとし、西から東へ1・2…32・33と設定した。

(3) 調査組織

調査地 松山市北梅本町甲1,732外

遺跡名 北梅本北池遺跡

調査期間 1999（平成11）年10月7日～2000（平成12）年3月31日

対象面積 9,561m²

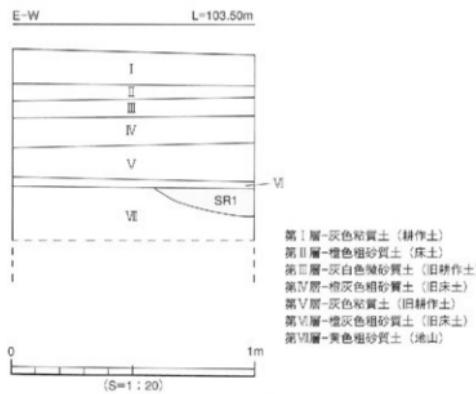
調査担当 高尾 和長・山之内志郎

調査作業員 阿部達也・石田丈史・池田一紀・上河淳浩・後藤公克・重松吉雄・田丸真裕・高松健太郎・仲神利卓・原山尚彦・松本正義・松田常義・山下 徹・山木啓太・横森淳・弓矢英明・大北隼人・藤本清志・松川栄治・金子育代・仙波千秋・仙波ミリ子・東山里美

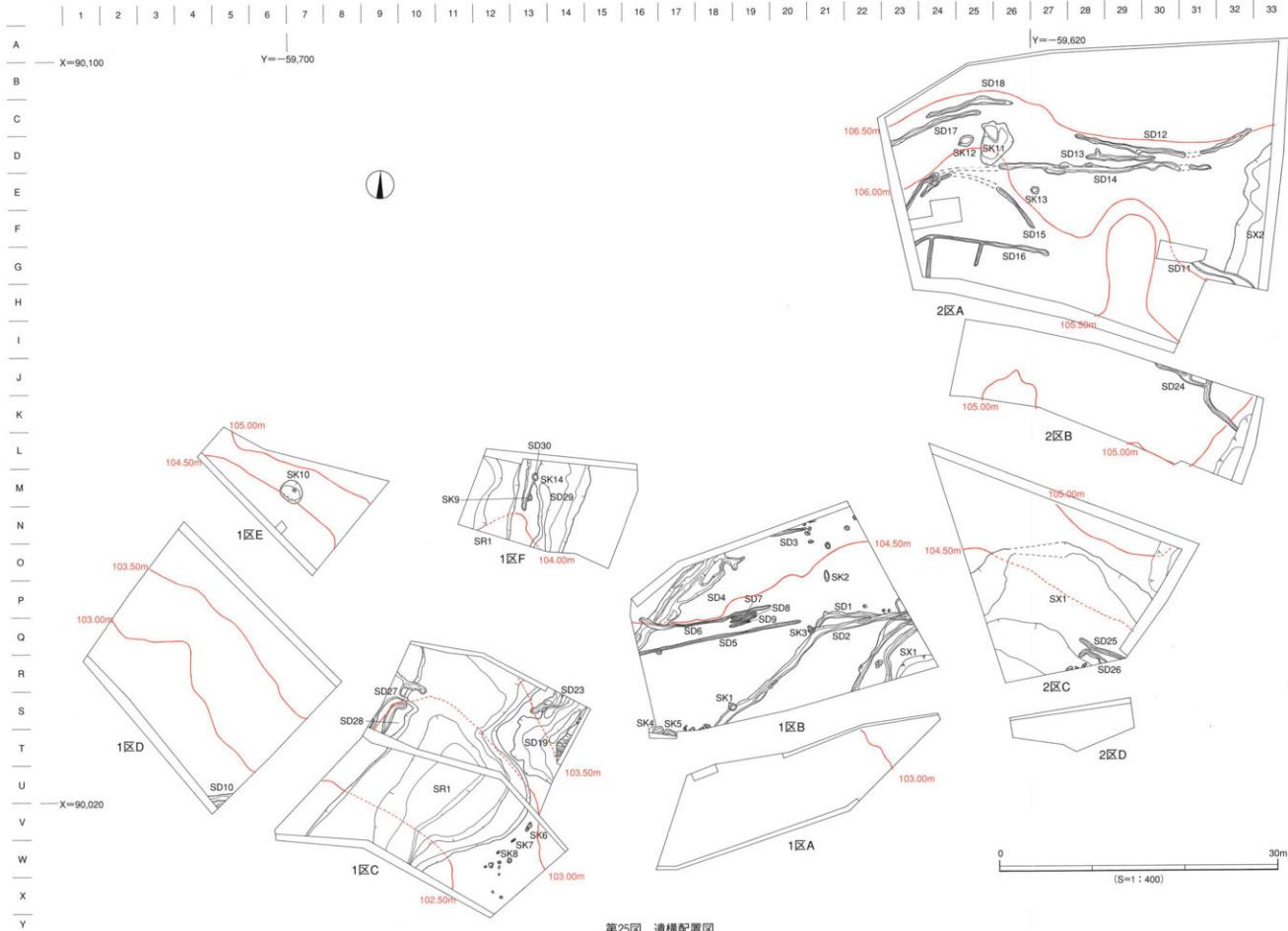
北梅本北池遺跡



第23図 調査地位位置図



第24図 基本土層図



第25図 遺構配置図

2. 層位 (第24図)

基本層位は第Ⅰ層灰色粘質土、第Ⅱ層橙色粗砂質土、第Ⅲ層灰白色微砂質土、第Ⅳ層橙灰色粗砂質土、第Ⅴ層灰色粘質土、第Ⅵ層橙灰色粗砂質土、第Ⅶ層黄色粗砂質土（地山）である。調査区の旧地形は北から南へ傾斜しているが、部分的に近現代の耕作に伴う削平によって旧地形が段カットされている。

第Ⅰ層：耕作土である。調査区全域に厚さ4～30cmで堆積する。

第Ⅱ層：耕作に伴う床土である。調査区全域に厚さ2～26cmで堆積する。

第Ⅲ層：旧耕作土である。2区B北東部を除く調査区全域に厚さ4～35cmで堆積する。

第Ⅳ層：旧耕作に伴う旧床土である。1区B東部を除く調査区全域に厚さ4～33cmで堆積する。

第Ⅴ層：旧耕作土である。1区A～D・2区Aに厚さ6～55cmで堆積する。

第Ⅵ層：旧耕作に伴う旧床土である。1区A・C・D・2区Aに厚さ3～8cmで堆積する。

第Ⅶ層：基盤面とした黄色粗砂質土である。後述するすべての遺構はこの層を切り込んでいる。

3. 遺構と遺物 (第25図)

本調査では弥生時代・古墳時代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路1条・土坑14基・溝30条・柱穴32基・石列2条・性格不明遺構2基である。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・石器・石塚・石庵丁・敲石・砲石・石核・スクレイバー・剝片・碎片がある。

ここでは主な遺構と遺物について時代別に概説する。

[1] 弥生時代

遺構は、土坑2基・溝1条・柱穴5基・性格不明遺構2基である。

(1) 土坑

SK10（第26図、図版6）

1区E中央のM6・7区に位置する。平面形態は埋土の上層が削平されていたため明確な掘り方を確認できなかったが、土器の出土範囲から楕円形と推定される。規模は長径2.50m、短径2.25m、深さ29cmを測る。断面形態は皿状を呈し、中央部が摺鉢状に凹む。埋土は茶褐色土（炭混じり）である。出土遺物は弥生土器と石器がある。

出土遺物（第26図）

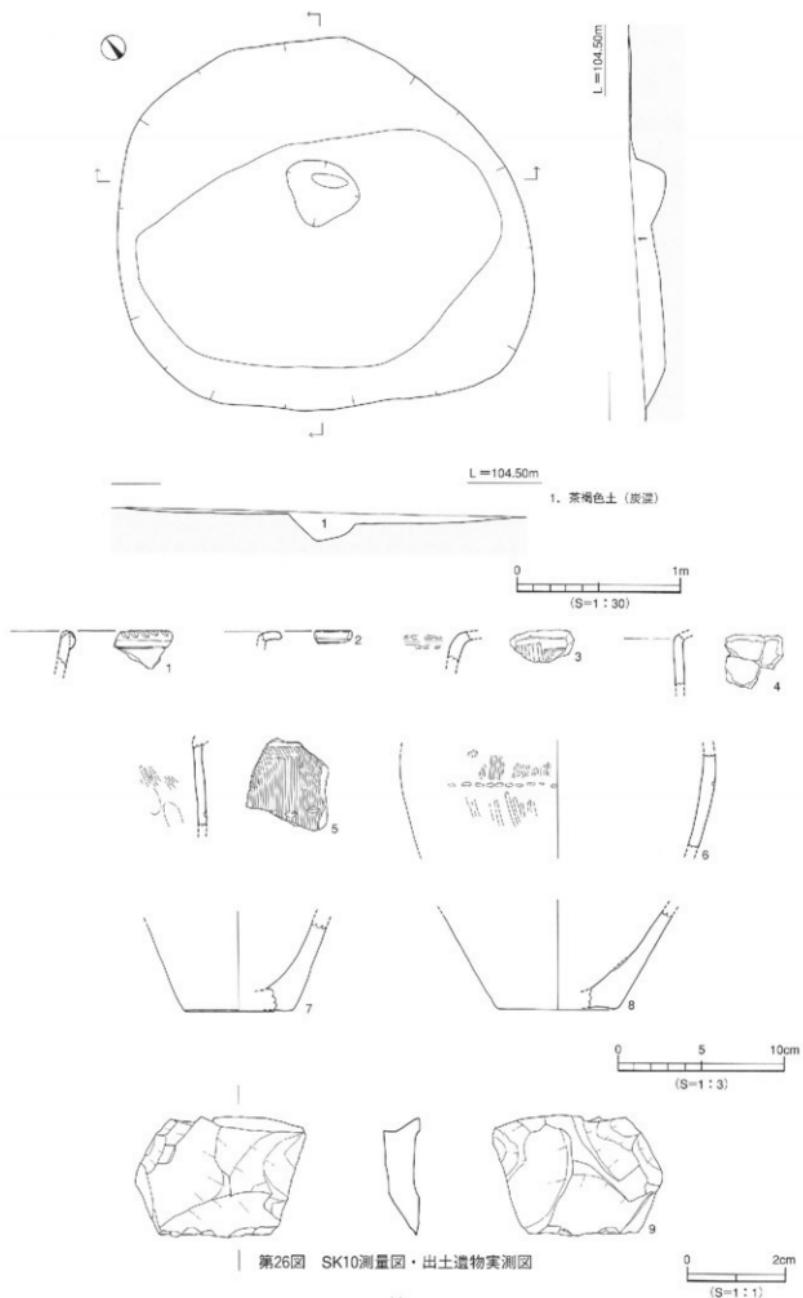
弥生土器（1～8）1～8は壺形土器である。1は貼り付け凸帯の口縁部片で、口唇上端に刻み目を施す。2～4は折り曲げ口縁部片である。5・6は胴部片であり、横方向に1条の刺突文を施す。7・8は底部であり、7は平底、8はやや上げ底の底部である。

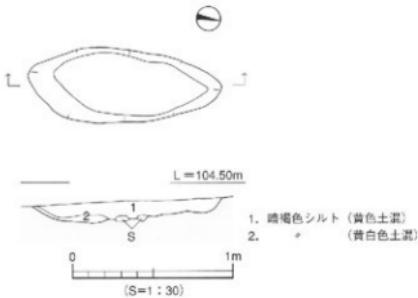
石器（9）スクレイバーである。一部に自然面が残る。サヌカイト製。

時期：出土した弥生土器の年代より、弥生時代前期と考えられる。

SK2（第27図）

1区B北東部のO21～P21区に位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径1.20m、短径0.46





第27図 SK 2 測量図

m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層暗褐色シルト（黄色土混じり）、2層暗褐色シルト（黄白色土混じり）である。遺物は出土しなかった。

時期：遺物が出土していないため不明であるが、後述するSD 1 と同様の埋土であるため弥生時代と考えられる。

(2) 溝

SD 1 (第28図)

1区B東部のP21～Q23区に位置し、SX 1 を切りSD 2 に切られる。東側は調査区外に続く。規模は検出長10.60m、上場幅40～60cm、深さ10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は暗褐色シルト（灰色混じり）である。出土遺物は弥生土器があるが、図化するに至らなかった。

時期：出土した土器の年代より弥生時代とする。

(3) 性格不明造構

SX 1 (第29図)

1区B南東隅及び2区C南部のP25～S22区に位置し、SD 1・2・25・26、SP30・31・32に切られる。平面形態は南側が調査区外に続くため全容が不明であるが、検出した形状から円形と考えられる。東側（2区C）は南方向へならかに傾斜するのに対して、西側（1区B）は造構内に2条の小溝が外周に沿った方向で巡っている。規模は長径31.3m、短径11.0m、深さ27cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層褐色シルト、2層灰褐色シルトである。出土遺物は弥生土器と石器がある。

出土遺物 (第29図)

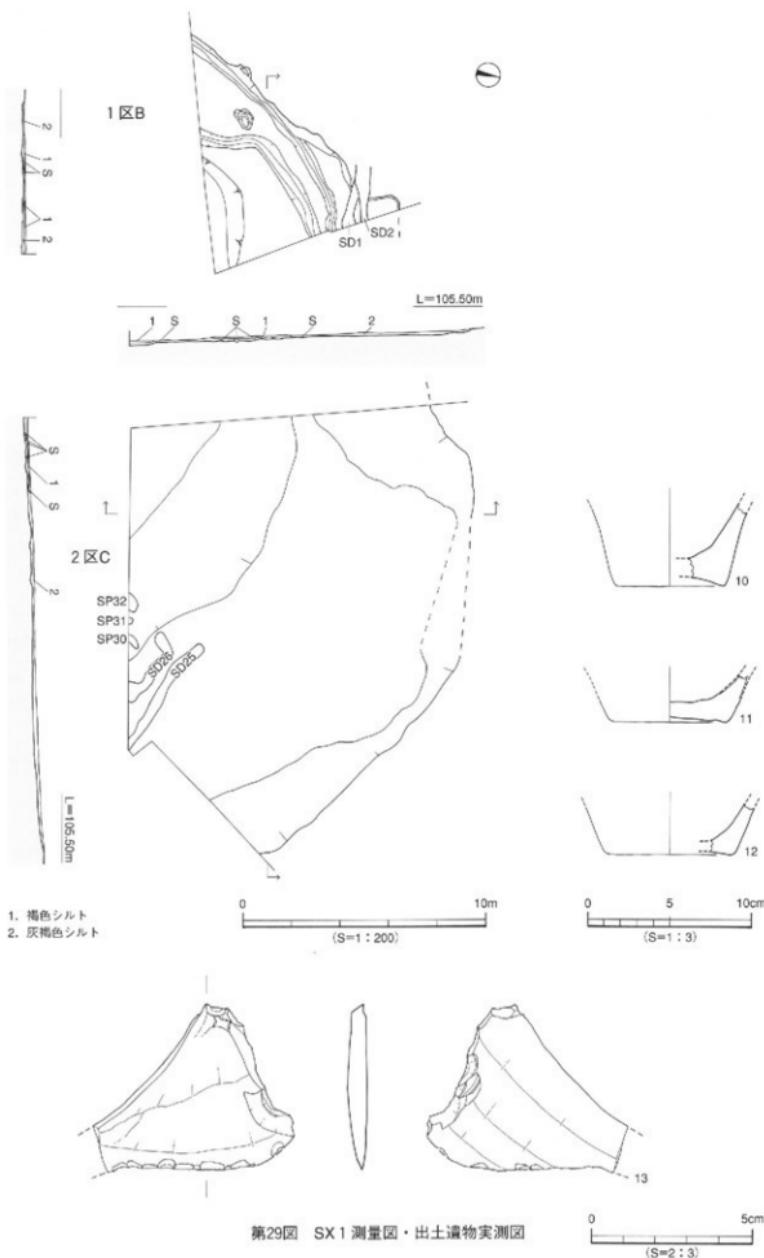
弥生土器（10～12）10～12は甕形土器の底部片である。いずれもやや上げ底を呈する。摩滅のため内外面ともに調整が不明である。

石器（13）スクレイバーである。刃部はやや弧状となる。一部に自然面が残る。サヌカイト製。

時期：出土した弥生土器の年代より、弥生時代中期とする。



第28図 SD 1 測量図



第29図 SX1測量図・出土遺物実測図

SX2 (第30図)

2区A東部のD32～H33区に位置し、SD11に切られる。東方向へなだらかに傾斜し、調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は長径15.60m、短径3.80m、深さ34cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐色シルトである。出土遺物は弥生土器と石器がある。図化できたのは石器のみである。

出土遺物 (第30図)

石器 (15) 剥片である。一部に自然面が残る。赤色珪質岩製。

時期：埋土がSX1と同様であるため、弥生時代中期とする。

〔2〕古墳時代

遺構は、流路1条と溝2条である。

(1) 流 路

SR1 (第31図、図版5)

1区F西部および1区C中央のL12～W12区に位置し、SD27に切られる。北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長45.0m、上場幅10.4～16.2m、深さ80cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。北から南方向へ蛇行している。埋土は6層に分かれ、1層暗灰色シルト（褐色混じり）、2層黄褐色微砂質土、3層灰白色シルト、4層橙色微砂質土、5層灰白色微砂質土、6層黄灰色粗砂質土（黄色礫混じり）である。出土遺物は弥生土器・須恵器・石器がある。

出土遺物 (第32図)

須恵器（15～21）15～18は壺蓋である。15は天井部と口縁部との間に断面三角形の棱をもつ。16は天井部がやや丸みをもち、天井部と口縁部との間の棱は不明瞭である。17・18は口縁部片である。19は壺身の受部片である。20は壺の口縁部である。口縁部はやや肥厚させ、端部は丸くおさめる。21は球形の壺の肩部～胴部である。肩部に2条の沈線を施す。

石器（22～24）22は石庖丁である。刃部の鏃は鈍い。結晶片岩製。23はスクレイバーである。刃部はやや弧状となる。赤色珪質岩製。24は剥片である。表面は風化が著しい。サヌカイト製。

時期：流路の性格を考え、上記遺物のうち最も新しい須恵器の年代より、6世紀後半とする。

(2) 溝

SD4 (第33図)

1区B北西隅のO17～Q17区に位置し、SD6に切られる。北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長13.5m、上場幅1.26m～2.9m、深さ69cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は6層に分かれ、1層灰色微砂質土（やや硬い、粒状の褐色土混じり）、2層灰色粘質土、3層黄灰色微砂質土、4層灰色粘質土、5層黄色粗砂質土、6層黄色微砂質土である。出土遺物は須恵器・土師器・石器があるが、土師器は胴部片のため図化するに至らなかった。

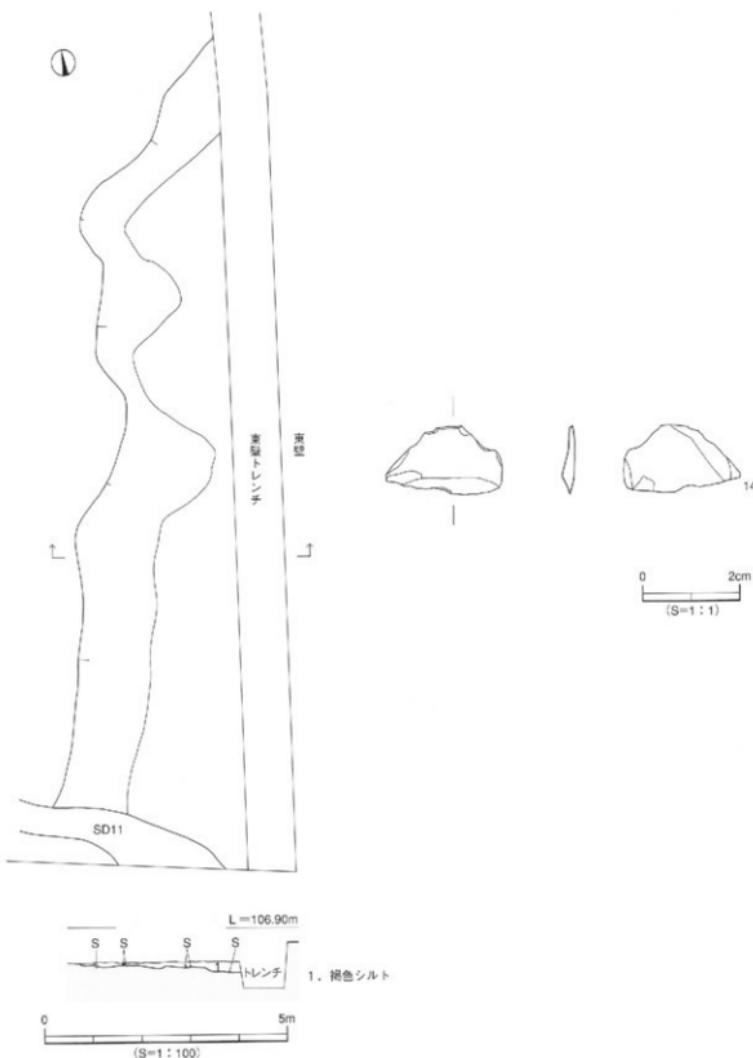
出土遺物 (第34図)

須恵器（25）壺である。頸部に段をもつ。外面は平行タタキの後、カキ目を施す。

石器（26～28）26は凹基無毫石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部を欠損している。姫島産黒曜石製。27は敲石である。表面は滑らかで楕円形の円礫。完形品。28は剥片である。表

面は風化が著しい。サスカイト製。

時期：出土した須恵器の年代より、6世紀以降とする。



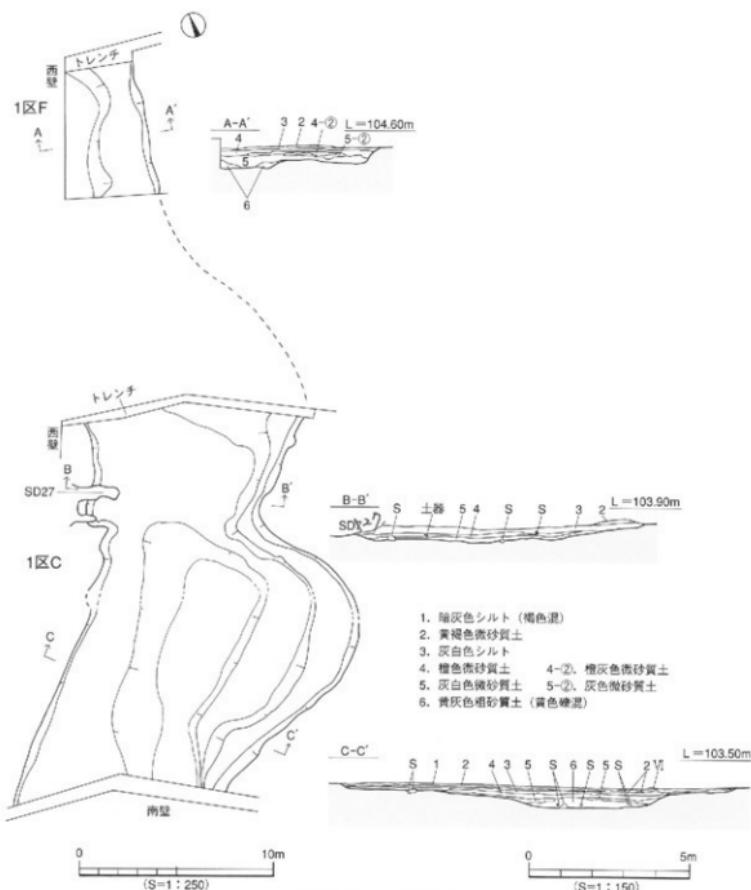
第30図 SX 2 測量図・出土遺物実測図

SD 2 (第35図、図版 6)

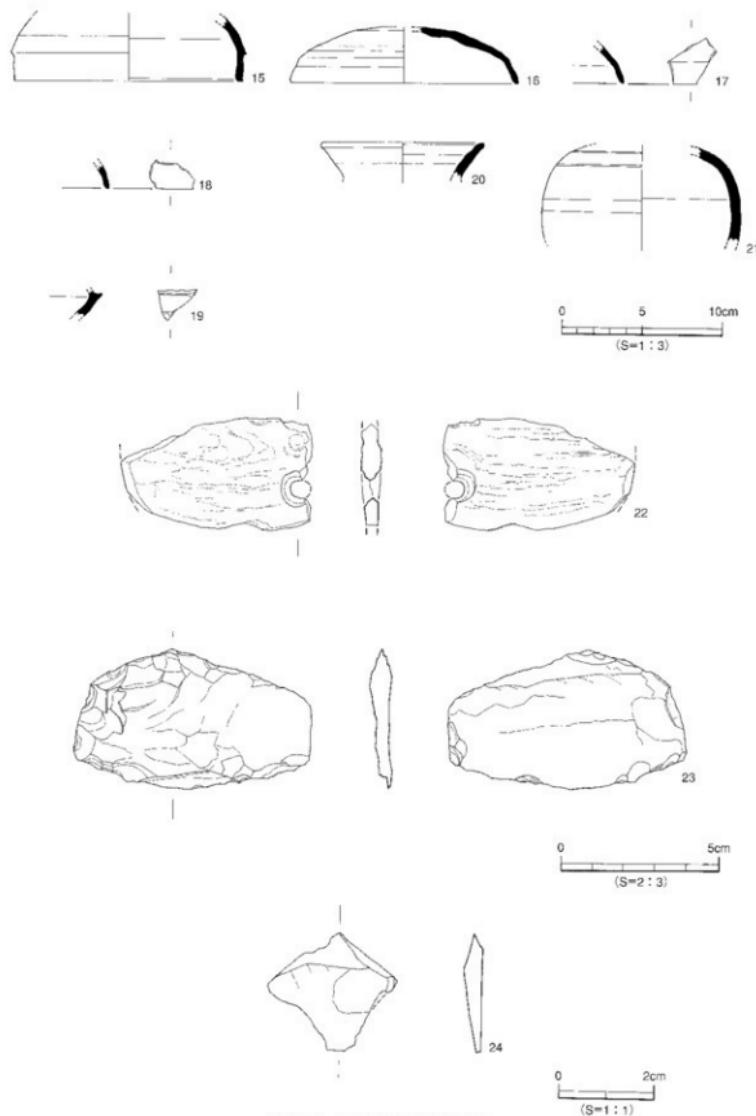
1区B南東部のP21~T19区に位置し、SD 1とSX 1を切り、SK 1とSK 3に切られる。東側と南側は調査区外に続く。規模は検出長24.0m、上場幅0.24m~1.46m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は4層に分かれ、1層暗灰色粘質土、2層黄灰色微砂質土、3層暗灰色粘質土(黄色混じり)、4層黄灰色粗砂質土である。出土遺物は土師器と石鏃があるが、土師器は脇部片のため図化するに至らなかった。

出土遺物 (第35図)

石器 (29) 四基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈する。先端部を欠損している。姫島



第31図 SR 1測量図



第32図 SR 1 出土遺物実測図

産黒曜石製。

時期：SD 4 と埋土がほぼ同様で、かつ同一方向であるため、6世紀以降とする。

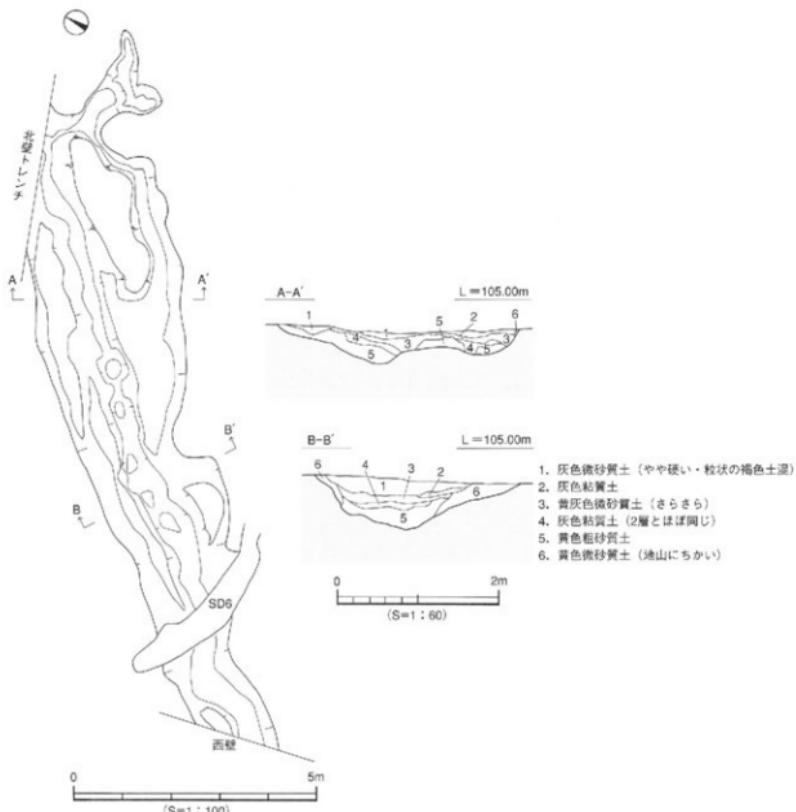
〔3〕古代以降

遺構は、土坑7基である。

(1) 土 坑

SK1 (第36図)

1区B中央南部のS18区に位置し、SD 2を切る。平面形態は突出部をもった円形である。規模は長径0.98m、短径0.81m、深さ13cmを測り、突出部は東西0.18m、南北0.18m、深さ5cmを測る。断



第33図 SD 4 測量図

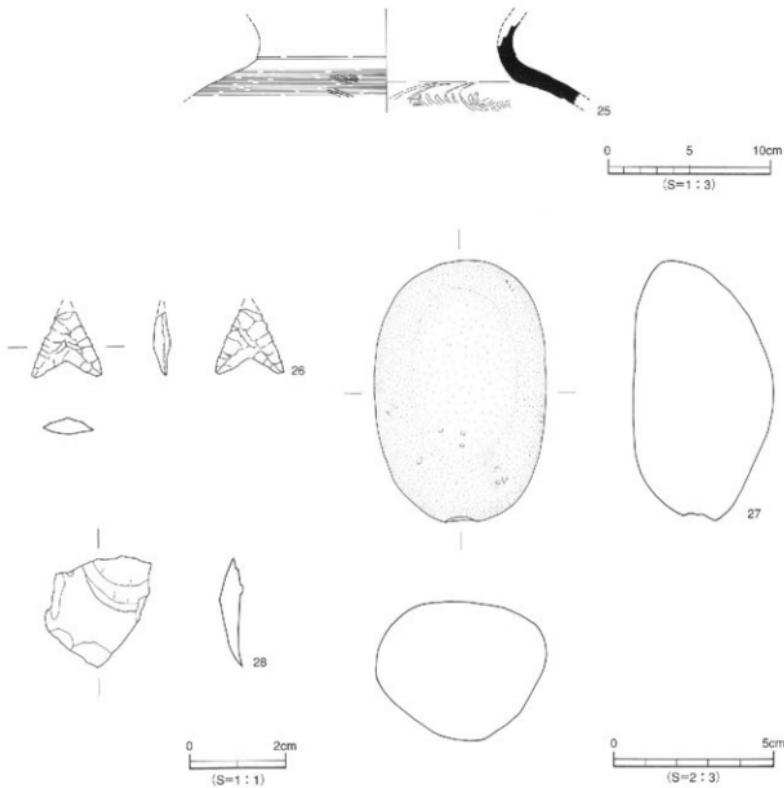
面形態はレンズ状を呈する。埋土は黄色混じりの暗灰褐色土である。出土遺物は人頭大の砂岩礫が中央部で出土した。

時期：SD 2 を切っていることから、古代以降と考えられる。

SK 3 (第36図)

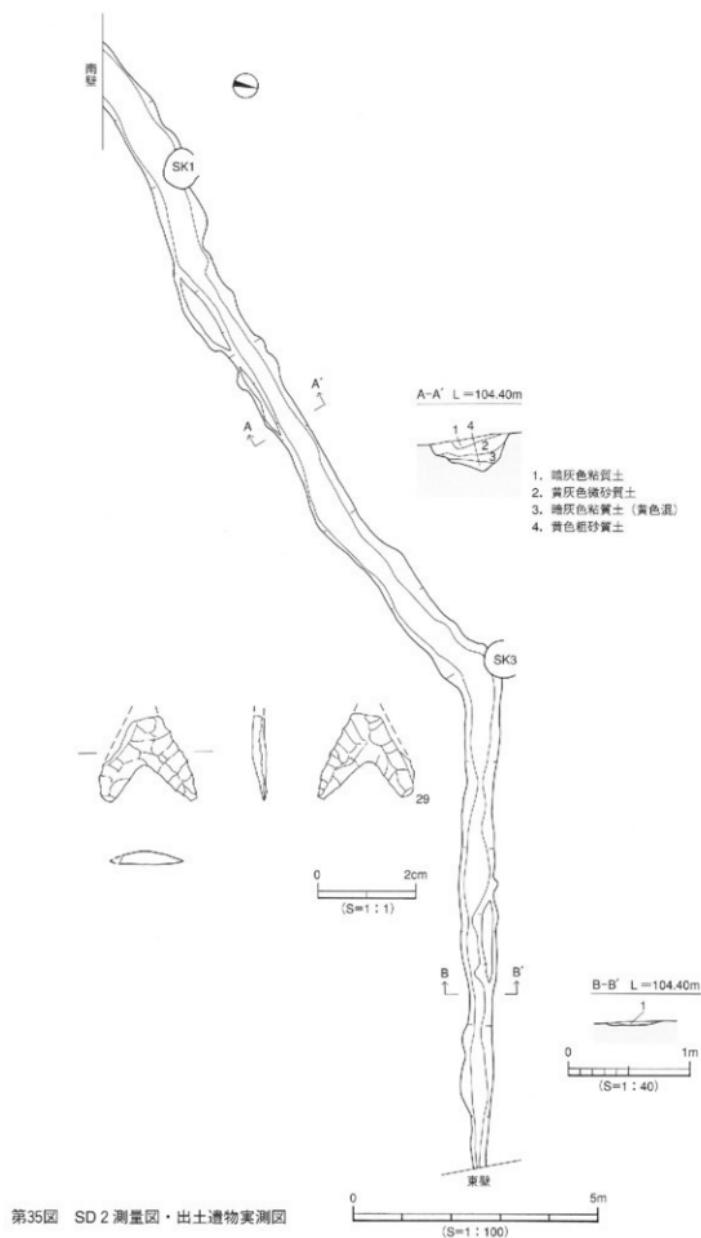
1区B中央のQ20・21区に位置し、SD 2 を切る。平面形態は突出部をもった梢円形である。規模は長径0.97m、短径0.78m、深さ18cmを測り、突出部は長径0.40m、短径0.33m、深さ5cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黄色混じりの暗灰褐色土である。遺物は出土しなかった。

時期：SD 2 を切っていることと、SK 1 と形態・埋土がほぼ同様であるため、古代以降と考えられる。



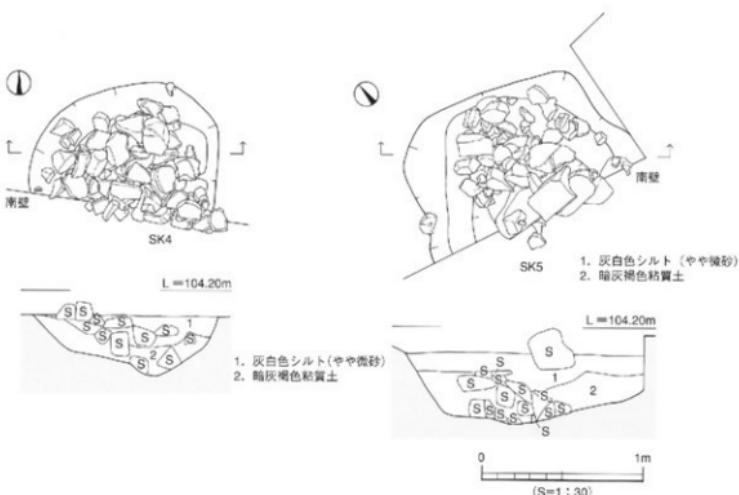
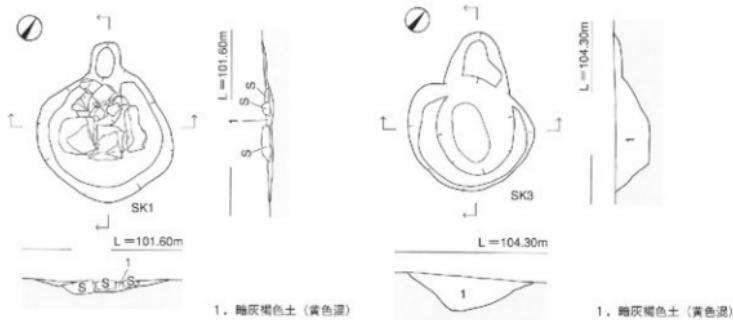
第34図 SD 4 出土遺物実測図

北梅本北池遺跡



SK 4 (第36図)

1区B南西隅のT16~17区に位置する。SK5と並列の状態にあり、範囲を確認するため南部に拡張を行ったが、現代の石垣により南半部を削平されていた。平面形態は北半部の形状から円形と推定される。規模は残存長径1.13m、残存短径0.78m、深さ38cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層灰白色シルト（やや微砂）、2層暗灰褐色粘質土である。出土遺物は須恵



第36図 SK 1・3・4・5 测量図

器と人頭大の礫石がある。須恵器は胴部片のため同化するに至らなかった。礫石はほぼ同程度の大きさで、1・2層から出土した。

時期：2層の埋土がSK1・3に似ていることから、古代以降とする。

SK5（第36図）

1区B南西隅のT17区に位置する。SK4と同様に調査区を拡張して造構の規模を確認したが、現代の石垣により南北半部を削平されていた。平面形態は検出した北半部の形状から隅丸方形と推定される。規模は残存長径1.46m、残存短径0.82m、深さ46cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層灰白色シルト（やや微砂）、2層暗灰褐色粘質土である。出土遺物は人頭大の礫石がある。礫石は1層から大型の石が数点、2層からやや小振りの石が集中して出土した。

時期：造構の形態・規模・埋土がSK4にはほぼ同一であるため、古代以降とする。

SK11（第37図）

2区A西部のC25~26区に位置する。平面形態は不整形である。規模は長径4.86m、短径3.30m、深さ24cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層灰色微砂質土、2層暗灰褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

時期：埋土がSK4・5に似ていることから、古代以降と考えられる。

SK12（第37図）

2区A西部のD25区に位置する。平面形態は突出部をもった橢円形である。規模は長径1.74m、短径1.06m、深さ5cmを測り、突出部は長径0.40m、短径0.20m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。遺物は出土しなかった。

時期：造構の形態がSK1・3に、埋土がSK4・5の埋土1層に似ているため、古代以降と考えられる。

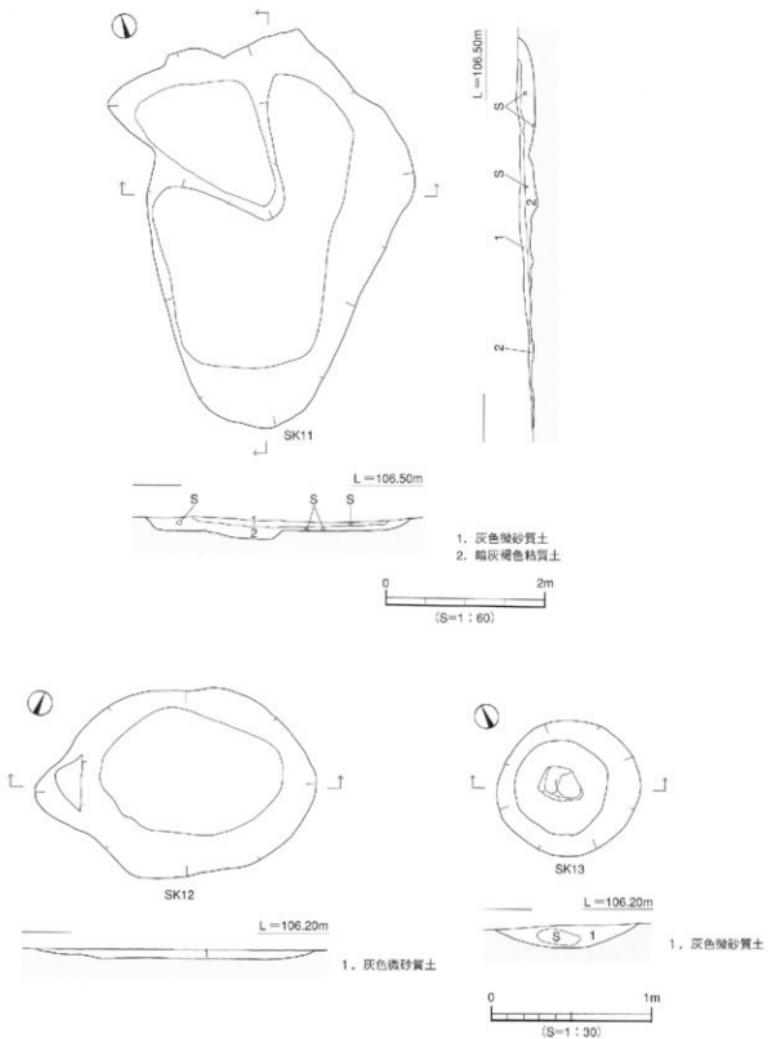
SK13（第37図）

2区A中央部のE26・27区に位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.89m、短径0.85m、深さ17cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。出土遺物は人頭大の砂岩礫石1点がある。

時期：土坑内から人頭大の礫石が出土する点がSK1・4・5に、埋土がSK12に似ているため、古代以降と考えられる。

[4] 近 現 代

造構は、土坑5基・溝27条・柱穴27基・石列2条である。そのうち土坑と溝については章末の造構一覧表を参考にされたい。石列については下記のとおりである。



第37図 SK11・12・13測量図

(1) 石列

石列1

2区D中央部のS27～T28区に位置し、石列2を切る。構築方法は、第Ⅲ層上面に約25cm×15cmの円礫を3段に構築している。規模は南北方向への検出長3.60m、幅0.25m、基底石からの高さ35cmを測る。東側は5～10cm大の角礫を含む黒色粘質土で裏込めしている。石列内から遺物は出土しなかった。

時期：第Ⅲ層上面へ構築していることから、現代とする。

石列2

2区D中央部のS29～T27区に位置し、石列1に切られる。構築方法は、第Ⅲ層上面に約15cm×10cmの円礫を4段に構築している。規模は東西検出長8.40m、幅1.50m、基底石からの高さ50cmを測る。北側は5～10cm大の角礫を含む黒色粘質土で裏込めしている。石列内から遺物は出土しなかった。

時期：第Ⅲ層上面へ構築していることから、現代とする。

〔5〕 地点不明の遺物

表探した遺物がある。(第38・39図)

須恵器（30～34）30～33は壺蓋である。30は丸みをもつ天井部である。天井部と口縁部の境に鈍い断面三角形の稜をもつ。31はやや丸みをもつ天井部である。厚手のつくり。32は口縁部片である。33は蓋の口縁部片と器種不明の破片が接着している。34は甕である。口縁端部は上方に肥厚し、尖り気味におさめる。

土師器（35）壺の口縁部片である。端部は尖り気味におさめる。

弥生土器（36）壺形土器の平底の底部である。

石器（37～45）37は石核である。赤色珪質岩製。38～40はスクレイバーである。サスカイト製。41～43は剝片である。44・45は碎片である。

4. 小結

本調査では弥生時代・古墳時代・古代以降・近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は流路1条・土坑14基・溝30条・柱穴32基・石列2条・性格不明遺構2基を検出した。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・石器・石庖丁・敲石・磨石・石核・スクレイバー・剝片・碎片が出土した。ここでは遺構と遺物について時代ごとにまとめを行う。

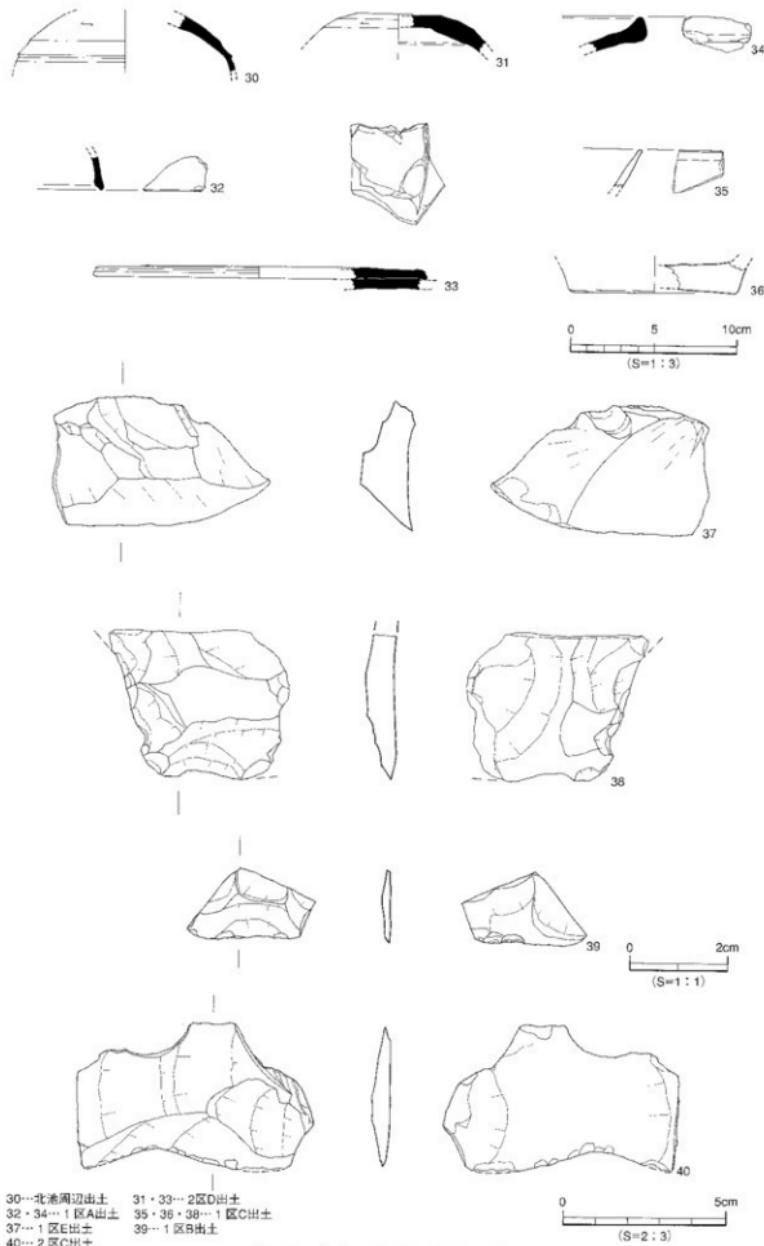
(1) 弥生時代

弥生時代の遺構は土坑2基・溝1条・柱穴5基・性格不明遺構2基である。特筆すべきものは、前期のSK10と中期のSX1・2である。SK10は本調査において最も古い遺構である。SX1・2は埋土の状況から判断して人為的な遺構ではなく、遺物包含層と考えられる。SK2とSD1は明確な時期決定はできなかった。

遺物は弥生土器・スクレイバー・剝片がある。このうちSK10出土の弥生時代前期の土器は小片ではあるが、周辺地域において集落の存在を考える上で数少ない貴重な・括資料である。

このように本調査地において弥生時代前期から中期の生活関連遺構と遺物が確認できたことは、こ

遺構と遺物



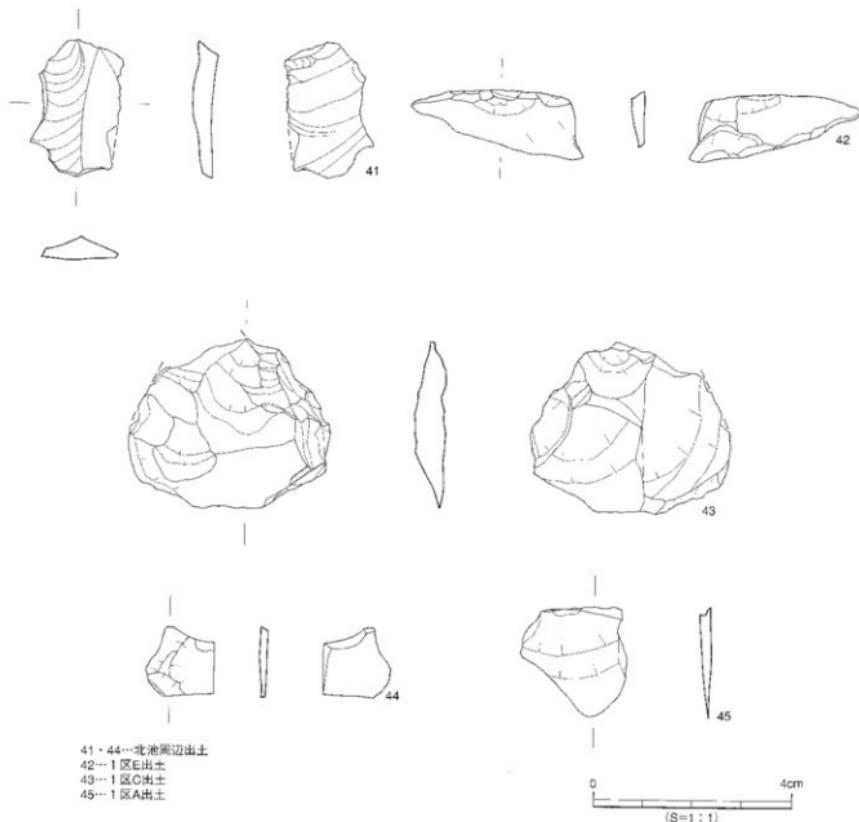
第38図 地点不明出土遺物実測図(1)

これまでに確認されていなかった北梅本町における弥生時代の集落のあり方を考える上で貴重な資料となるものである。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は流路1条と溝2条がある。SR1は土層の堆積状況から判断して、北から南方向へ徐々に川幅を広げながら絶えず水が流れていたと推定される。SR1が最終的に埋没した時期は6世紀後半と考えられるが、埋土中から弥生土器や石庖丁が出土していることから、上流地域に弥生時代の集落がかつて存在していたことを示すものであり、その遺物が後の時代に流入したものと考えられる。

SD4・2は埋土がほぼ同じで、かつ同一方向を流れているため、同時期に存在し集落を区画する



第39図 地点不明出土遺物実測図(2)

ような目的で使用された可能性が考えられる。

(3) 古代以降

古代以降の遺構は土坑7基がある。平面形態が突出部をもつ円形または橢円形の土坑であるSK1と3は、その性格の解明をすすめるとともに今後留意しておく必要がある。これらの遺構は遺物が少ないので明確な時期決定はできないが、周辺地域での集落が存在していたことを裏付けることができる。

(4) 近 現 代

近現代の遺構のうち石列1及び2は、水田の区画のために礫石を土堤状に積み上げ構築したものと考えられる。これらは切り合い関係があるが同時期に存在していたものと推定される。

本調査では、当初目的として掲げていた古墳時代や古代における須恵器工人の集落関連遺構の検出には至らなかった。しかし弥生時代前期の土坑を検出したことで、当該地域における集落は当時まさかのほることを確認できたことの意義は大きい。今後はその範囲や規模などのデータの収集と蓄積を行い、未解明部分の解明をすすめていくことが肝要であろう。

遺構・遺物一覧 一凡 例一

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は仙波千秋・仙波ミリ子が、遺物観察表は山之内・高尾久子が作成した。

- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 弥生→弥生土器、土箭→土箭器、須恵→須恵器、陶磁→陶器・磁器。

- (3) 遺物観察表の各記載について。

法 量 横 () :復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口縁→口縁部、口端→口縁端部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記。

例) 砂→砂粒、長・長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1～4)、多→「1～4mmの大砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

表17 自然流路一覧

流路(SR)	地 区	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	1.12～W12	レンズ状	45.00×10.40～16.20×0.80	東～北	褐色色シート	赤土・灰窯器 石器	古墳後期	SD27に切られる

表18 土坑一覧

土坑(SK)	地 区	平面形	断面形	規 模(m) 長さ(短径)×幅(短径)×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	S18	突出部をもつ円形	レンズ状	0.98×0.81×0.13	暗灰褐色土 (黄色混)	人頭大の礫石	古代～中世	SD2を切る 突出部(18cm×18cm×5cm)
2	O21～P21	椭円形	皿状	1.20×0.46×0.14	暗褐色シート		弥生	
3	Q20・21	突出部をもつ椭円形	レンズ状	0.97×0.76×0.18	暗灰褐色土 (黄色混)		古代～中世	SD2を切る 突出部(40cm×30cm×5cm)
4	T16・17	円形	レンズ状	(1.13)×(0.78)×0.38	灰白色シート (やや酸性)	人頭大的礫石	古代～中世	石塁に切られる
5	T17	楕円形	混合形状	(1.46)×(0.82)×0.96	灰白色シート (やや酸性)	人頭大的礫石	古代～中世	石塁に切られる
6	V13	椭円形	V字状	0.71×0.39×0.24	灰色微砂		現代	SP06を切る
7	W12・13	椭円形	皿状	0.62×0.15×0.04	灰色微砂		現代	
8	W12	椭円形	皿状	0.47×0.26×0.04	灰色微砂 (黄色微含)		現代	
9	M13	不整形	皿状	0.67×0.50×0.09	灰色微砂		現代	SD30を切る
10	M6・7	椭円形	皿状	2.50×2.25×0.29	茶褐色土 (黄まきり)	弥生・石器	弥生前期	
11	C25～D26	不整形	皿状	4.86×3.30×0.24	灰色微砂質土		古代～中世	
12	D25	突出部をもつ椭円形	皿状	1.74×1.06×0.05	灰色微砂質土		古代～中世	突出部(40cm×20cm×4cm)
13	E26・27	円形	レンズ状	0.89×0.85×0.17	灰褐色微砂土	人頭大的礫石	古代～中世	
14	M13	椭円形	皿状	0.78×0.63×0.09	灰色微砂質土		現代	SD30を切る

表19 溝一覧

(1)

溝(SD)	地 区	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	P21～Q23	レンズ状	16.60×0.40～0.60×0.10	東～西	褐色色シート (灰色混)	生土 十輪器	弥生	溝区外へ繋ぐ SK1を切る SD1に切られる
2	P21～T19	逆台形状	24.00×0.24～1.46×0.20	東～西	灰褐色軟質土	上脚器 石器	古墳後期	溝区外へ繋ぐ SD1, SK1, 3を安ら SK1, 3に切られる
3	N19～20	逆台形状	4.00×0.38×0.11	東～西	褐色微砂	人頭大的礫石	現代	溝区外へ続く
4	O17～Q17	レンズ状	(13.50)×1.26～2.90×0.69	北東～北西	灰色微砂質土 石器	上脚器 淡紫色 石器	調査区外へ繋ぐ SD6に切られる	
5	Q16～Q20	逆台形状	17.50×0.36×0.20	東～西	黄色微砂 (鐵成土)		現代	溝区外へ続く SP1を切る
6	P18～Q19	皿状	14.80×0.36×0.05	東～西	灰色微砂		現代	SD4を切る
7	P19～Q19	皿状	2.86×0.26×0.02	東～西	灰褐色微砂		現代	
8	Q18・19	皿状	3.00×0.20×0.03	東～西	灰色微砂		現代	
9	Q18・19	皿状	2.30×0.26×0.05	東～西	灰色微砂		現代	
10	U4～V5	皿状	(2.56)×(1.38)×0.21	東～西	貴白魚微砂		現代	鉢型器外へ続く
11	G31～H32	皿状	(5.60)×0.82×0.16	東～西	顏色不明 灰色多		現代	鉢型器外へ続く
12	D28～D32	皿状	20.00×0.36×0.13	東～西	灰褐色土		現代	一部遡れる

造構一覧

満一覧

(2)

満(SR)	地 区	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
13	D28~D30	直状	8.50×0.60×0.05	東~西	灰色粘土		現代	
14	D26~F23	U字状	34.80×1.26×0.30	東~西	灰色粘土		現代	
15	F24~F27	直状	15.0×0.95×0.08	東南~西南	灰色粗砂		現代	
16	F23~G24	逆V形状	14.50×0.33×0.22	東~北 東~西	灰色粗砂	砾石	現代	調査区外へ続く母系
17	C23~D23	シソ状	(10.00)×0.85×0.16	東~西	灰色粗砂		現代	調査区外へ続く
18	C24~C26	レンズ状	5.50×0.54×0.08	東~西	灰色粗砂		現代	
19	S13~U14	レンズ状	(26.80)×4.80×0.80	東~北	灰色粗砂		現代	調査区外へ続く SD20~23を切る
20	T14	直状	(2.00)×1.60×0.10	東~西	黃灰色土		現代	調査区外へ続く SD19に切られる
21	T14	直状	(0.70)×1.20×0.19	東~西	灰色土 (黄色土)		現代	調査区外へ続く SD19, 20に切られる
22	T14	レンズ状	(1.00)×0.82×0.16	東~西	黄色粗砂		現代	SD19に切られる
23	S13~S14	レンズ状	(3.90)×(1.12)×0.25	東~北	黄色粗砂		現代	調査区外へ続く SD19に切られる
24	J30~L32	逆V形状	(12.20)×0.70×0.33	東~西	なし (瓦積み)		現代	調査区外へ続く
25	Q28~R29	レンズ状	(5.10)×0.45×0.06	東東~西南	灰色粗砂		現代	調査区外へ続く SX1を切る
26	R28	レンズ状	(3.20)×0.35×0.08	南東~西南	灰色粗砂		現代	調査区外へ続く SX1を切る
27	R9~T9	シソ状	(6.00)×(1.16)×0.22	南~北	灰色粘土		現代	斜面区外へ続く SR1を切る
28	S9~T9	レンズ状	(4.60)×0.71×0.11	南~北	灰色粘土		現代	調査区外へ続く
29	L13~O14	肩底状	(9.96)×5.70×1.90	南~北	灰色粗砂		別代	斜面区外へ続く SD30を切る
30	L13~M13	直状	(5.54)×1.00×0.06	南~北	灰色粗砂		現代	斜面区外へ続く SD29に切られる

表20 性格不明造構一覧

満(SR)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模(m) 長さ(最長)×幅(最径)×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	P25~S22	円形	レンズ状	(31.30)×(11.00)×0.27	褐色シルト	赤茶・石器	弥生中期	斜面区外へ続く SD1, 2~25~26, SP90, SL~22に切られる
2	D32~H33	不整形	レンズ状	(15.60)×(3.80)×0.34	褐色シルト	赤茶・石器	弥生中期	調査区外へ続く SD1に切られる

表21 SK10 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形 種・施 文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 成	備 考	回数
				外 面	内 面				
1	壳	残高 2.3	貼り付け凸面。口唇上端に刻目を施す。	マメツ	マメツ	暗灰茶色 暗灰茶色	石・長(1~3) ◎		6
2	壳	残高 0.7	折り曲げ口縫。	①マメツ ②ヨコナデ	マメツ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~2) ◎		6
3	壳	残高 2.0	折り曲げ口縫。	ヨコナデ ハケ(5~7本/口)	ナデ ハケ(8本/口)	乳茶色 乳茶色	石・長(1~2) ◎		6
4	壳	残高 3.2	折り曲げ口縫。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~2) ◎		6

SK10 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
5	先	残高 5.1	削部片。横方向に1条の剥突文を施す。	ハケ(6本/cm)	ヨコナデ→ミガキ(マツツ)	暗茶色 暗茶色	石・長(1~2) ○			6
6	裏	残高 6.7	削部片。横方向に1条の剥突文を施す。	ハケ(7~8本/cm) ミガキ(マツツ)	マツツ	黑色 乳黃茶色	石・長(1~3) ○			6
7	裏	底径(6.6) 残高 5.5	平底の底部。	マツツ	マツツ	暗茶色 暗茶色	石・長(1~7) ○			6
8	裏	底径(7.0) 残高 6.0	わずかに上げ底の底部。	マツツ	マツツ	黑色 乳黃茶色	石・長(1~4) ○			6

表22 SK10 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
9	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.4	2.4	0.65	7.30		6

表23 SX1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
10	裏	底径(6.6) 残高 5.1	上げ底の底部。	マツツ	マツツ	茶色 乳黃色	石・長(1~5) ○			
11	裏	底径(6.8) 残高 2.9	上げ底の底部。	マツツ	マツツ	茶褐色 黃茶色	石・長(1~2) ○			
12	裏	底径(7.8) 残高 3.2	上げ底の底部。	マツツ	マツツ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~3) ○			

表24 SX1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
13	スクレイパー	ほぼ完形	サヌカイト	6.1	5.2	0.6	19.92		

表25 SX2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
14	削 片	完形	赤色珠質岩	1.3	2.4	0.25	0.88		

表26 SR1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
15	身蓋	口径(14.2) 残高 4.0	天井部と口縁部の間に断面に凸角の梗をもつ。口縁部は内側する。	自然粒付岩の為不規則	可転ナゲ	灰色 青灰色	青 長(1)石粒 ○	自然粘		
16	坪蓋	口径(14.1) 残高 3.5	ややえみをもつ大坪蓋。口縁部は丸くおさめる。	②凹輪ヘラケツリ ③凹輪ナゲ	凹輪ナゲ	灰色・暗灰色 灰色	青 ○			

遺物観察表

SR1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	横整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
17	耳垂	残高 2.4	口縁部は尖り気味におさめる。	ハクリ	①黒豆粒ナデ ②ナデ	乳白色 青灰色	青 ○			
18	环置	残高 1.8	口縁端部は丸くおさめる。	ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	青 ○			
19	耳身	残高 1.7	受部に水平に鋸び、端部は尖り気味におさめる。 立ち上がりは内側する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	青 ○			
20	壺	口径(10.0) 残高 2.2	口縁部は外し、端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	青 長(1) ○			
21	壺	残高 5.7	球形の肩部～腹部、肩部に2条の沈線を残す。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 灰色	青長(1) ○			

表27 SR1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
22	石盾丁	1/2	結晶片岩	6.0	3.5	0.7	22.74		
23	スクリンバー	完形	赤色珪質岩	7.4	4.4	0.65	21.40		
24	剝片	ほぼ完形	サヌカイト	2.5	2.7	0.4	1.95		

表28 SD 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	横整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
25	壺	残高 5.2	口縁部は墨色より外反気味に立ち上がる。 斜平行クタキ→カ 牛目(5穴/cm)	①回転リコナデ ②斜平行クタキ→カ ③牛目(5穴/cm)	④回転ロコナデ ⑤弓心(5穴クタキ→カ 牛目(5穴/cm))	青灰色 青灰色	石・長(1~3) ○			

表29 SD 4 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
26	石壺	ほぼ完形	墨縞石	1.3	1.5	0.35	0.52	手彫刻	
27	敲石	完形	不削	8.1	5.3	4.3	263.45		
28	剥片	完形	サヌカイト	2.3	2.2	0.4	2.10		

表30 SD 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
29	石壺	ほぼ完形	墨縞石	1.7	2.0	0.3	0.70	手彫刻	

表31 地点不明出土遺物観察表 土製品

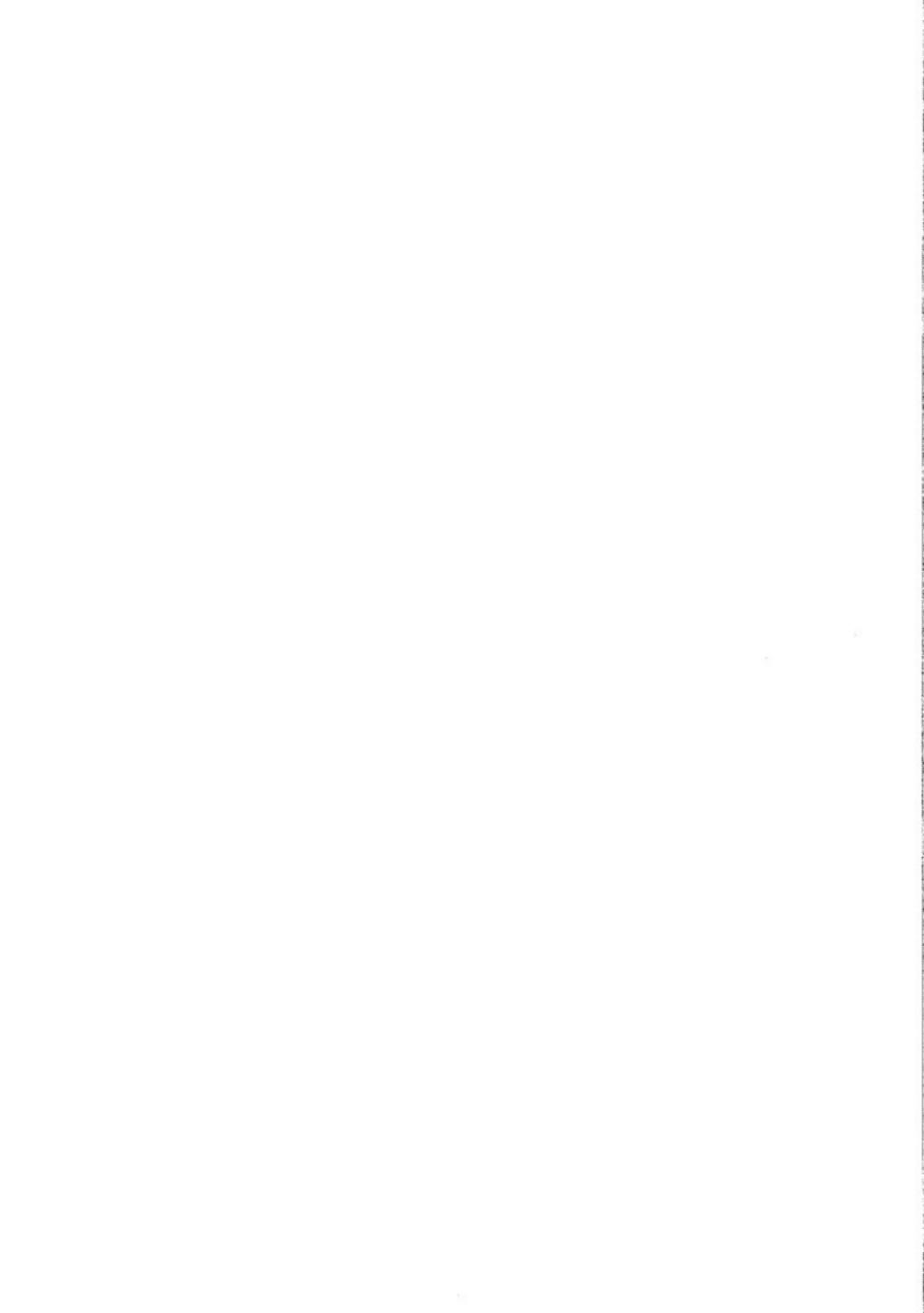
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
30	坏壊	残高 3.5	丸みをもつえ部。天井部と口縁部の側に鋸い断面で角形の板をもつ。	⑤凹軸ハラケズリ 凹軸ヨコナダ	凹軸ヨコナダ	褐色 灰色 暗灰色	密 ○			
31	坏壊	残高 2.3	やや先みをもつ天井部。	⑥凹軸ハラケズリ 凹軸ヨコナダ	凹軸ヨコナダ	青灰色 灰色	秀 ○			
32	坏壊	残高 2.1	口縁部片。端部は内傾する。	凹軸ヨコナダ	凹軸ヨコナダ	乳白色 灰色	及(1)-黑色粒 ○			
33	蓋	口径(20.0) 残高 0.7	蓋の山根部片と器底小明の破片が接合した状態。	底軸ヨコナダ	底軸ヨコナダ・ナデ	青灰色 青褐色	密 ○			
34	裏	残高 2.2	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は上方に記厚される。	⑦壁ハカリ ⑧凹軸ヨコナダ	凹軸ヨコナダ	灰色 灰色	密 ○		自然釉	
35	坏	残高 2.4	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味におきめる。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石-長(1) ○			
36	裏	底径(9.8) 残高 2.0	半高の突起。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	セ-長(1~4) ○			

表32 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
37	石核	完形	赤色珪質岩	2.7	4.4	1.0	12.75		
38	スクレイパー	周溝の半以上欠損	サスカイト	3.6	3.1	0.55	8.08		
39	スクレイパー	完形	サスカイト	2.6	1.4	0.15	0.89		
40	スクレイパー	ほぼ完形	サスカイト	7.2	4.5	0.55	21.08		
41	剥片	ほぼ完形	チャート	2.8	1.8	0.5	2.69		
42	剥片	完形	赤色珪質岩	1.4	3.4	0.25	1.56		
43	剥片	完形	安山岩?	3.5	4.0	0.65	9.59		
44	剥片	完形	赤色珪質岩	1.4	1.3	0.2	0.53		
45	剥片	完形	サスカイト	2.2	2.2	0.2	1.22		

第4章

きたうめもとたいしゃくじ
北梅本太尺寺遺跡



第4章 北梅本太尺寺遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

本調査は、1997（平成9）年9～10月の間に行われたF区30,077m²内における、試掘調査の結果を受けて実施したものである。試掘調査では、土坑・溝・柱穴などの遺構と弥生土器・須恵器・土師器などの土器や石器が出上した。また本調査地の南西部の小高い丘陵部には、円墳や方墳を主体とする播磨塚古墳群が存在している。そのため埋文センター及び文化教育課・申請者の三者は遺跡の取り扱いについての協議を行い、土地改良総合整備事業に伴う工事により破壊される遺跡の記録保存を行うため、事前の発掘調査が必要と判断された。

調査は、古墳時代の集落関連遺構の広がりの確認を目的とし、1998（平成10）年4月7日より埋文センターが本格調査を開始した。

なお試掘調査の結果については第5章で詳述しているので参考にされたい。

(2) 調査の経緯（第40図）

調査対象地は南北2か所に分かれ、南側を1区、北側を2区とし、1区から調査を開始した。

1998（平成10）年4月7日に1区の調査区を設定し、重機により表土はぎを行う。4月21日に遺構検出状況の写真撮影を行い、その後遺構の掘削を開始する。5月15日に完掘状況の写真撮影を行う。5月19日に全ての測量を完了し、1区の屋外調査を完了する。

6月17日に2区の調査区を設定した。2区は水田の区画によりA～Dに細分し、2区Aから重機により表土はぎを行う。7月22日に遺構検出状況の写真撮影を行い、その後遺構の掘削を開始する。9月2日に完掘状況の写真撮影をする。9月10日に全ての測量を完了し、2区の屋外調査を完了する。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。グリッドは、北から南へ1・2…34・35とし、東から西へA・B…Z・a・bと設定した。

(3) 調査組織

調査地 松山市北梅本町甲3,489-1外

遺跡名 北梅本太尺寺遺跡

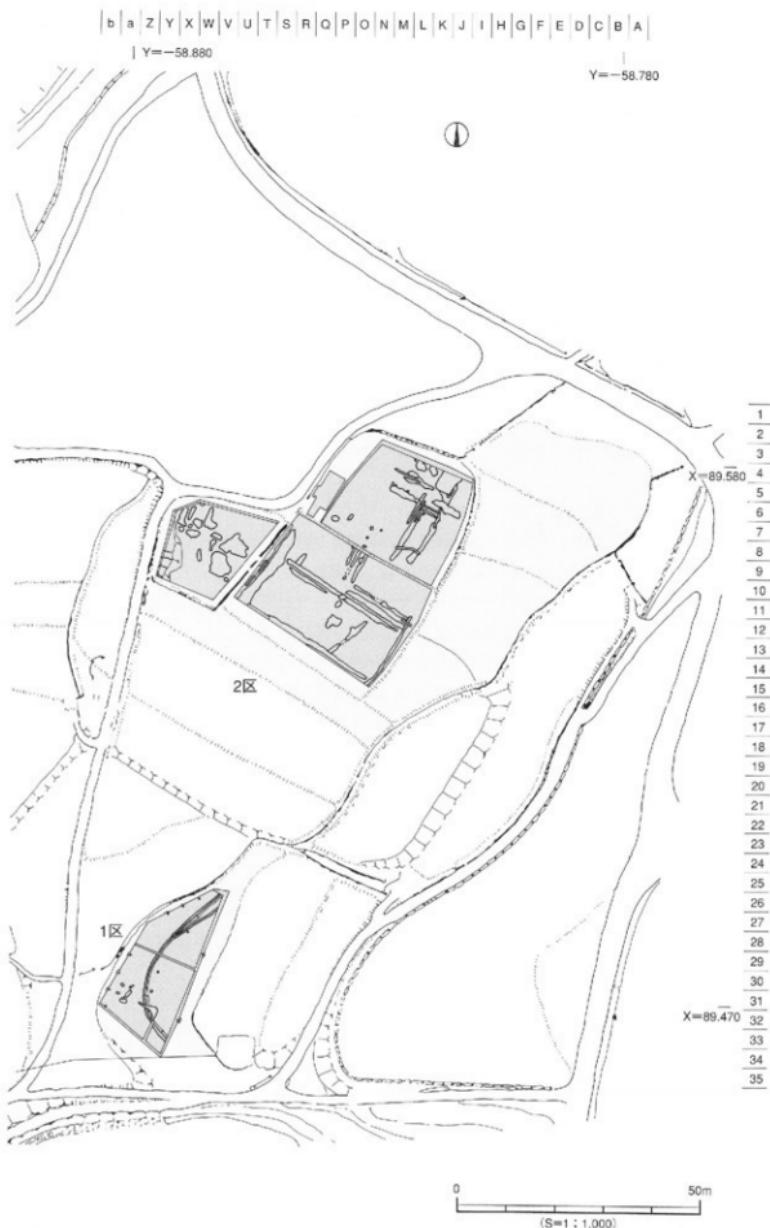
調査期間 1998（平成10）年4月7日～同年9月30日

対象面積 4,575m²（1区710m², 2区3,865m²）

調査担当 相原 浩二・山之内志郎

調査作業員 後藤公克・久保浩二・重松吉雄・酒井直哉・坪内寛美・松田常義・山下 徹・好川昇三郎・横森淳一・尾崎 正・藤本数夫・松本幸正・山崎満喜子・藤本清志・白右石子・野間弘子・山崎文子・多知川正人・金子育代・仙波千秋・仙波ミリ子・高尾久子

北梅本太尺寺遺跡



第40図 調査地位置図

2. 1区の調査

[1] 層位 (第41図)

基本層位は第I層灰色シルト、第II層橙色シルト、第III層灰褐色シルト、第IV層灰色砂質土、第V層黄灰色砂質土、第VI層黄色微砂質土（地山）の下記のとおりである。

第I層：耕作土である。調査地全域に厚さ8~33cmで堆積する。第II層との間に造成土が厚く堆積する部分がある。

第II層：床土である。東壁に厚さ8cm前後で堆積する。

第III層：粒状の褐色を含む灰褐色シルトである。調査区東半部の高地部分に厚さ8~16cmで広く堆積する。

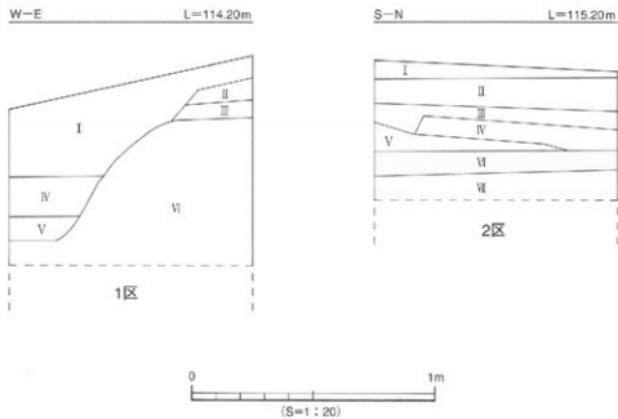
第IV層：旧耕作土である。水田利用により低くなった部分に厚さ10~20cmで広く堆積する。

第V層：旧床土である。黄色と灰色の濃淡により分層できる。厚さ6~16cmで広く堆積する。

第VI層：基盤面とした黄色微砂質土である。

[2] 遺構と遺物 (第42図、図版7)

1区は東から西へ傾斜する尾根上に位置し、傾斜地の上段と平坦地の下段に分かれる。本調査では、近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は土坑6基・溝3条・柱穴13基・石列1条である。そのうち土



第I層—灰色シルト（耕作土）
第II層—橙色シルト（床土）
第III層—灰褐色シルト（粒状の褐色土を含む）
第IV層—灰色砂質土（旧耕作土）
第V層—黄灰色砂質土（旧床土）
第VI層—黄色微砂質土（地山）

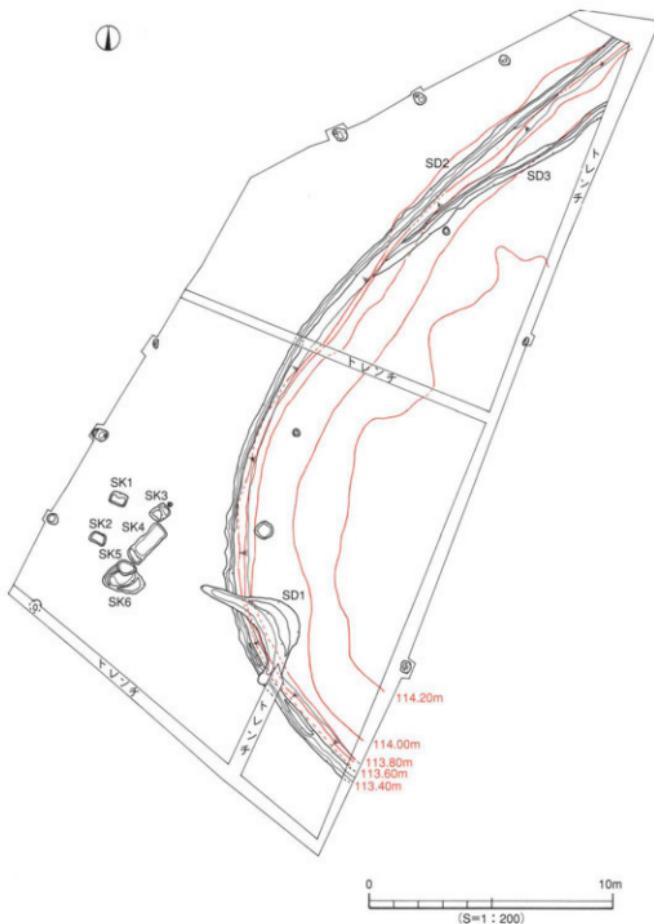
第I層—喰灰色シルト（耕作土）
第II層—喰灰色微砂質土（床土）
第III層—黄灰色粗砂質土（造成土①）
第IV層—喰灰色砂質土（旧耕作土）
第V層—黄白色粗砂質土（造成土②）
第VI層—喰褐色シルト（遺物包含層）
第VII層—喰褐色粘質土（地山）

第41図 基本土層図

坑と溝については章末の遺構一覧表を参考にされたい。遺物は陶磁器と瓦がある。

ここでは近現代の遺構と遺物について概説する。

遺構は上段では溝2条(SD1・3)と柱穴5基を、下段では土坑6基(SK1～6)・溝1条(SD2)・柱穴8基を検出した。SD2は弧状に張り出した段落ち部に沿って床面で検出し、全長約36.9m、幅



第42図 1区遺構配置図

約20~54cm、深さ約3~13cmを測る。石列は段落ち部で検出した。石列の規模は、南北約4.5m、東西約20~30cm、高さ約30cmを測り、角礫を多い部分で4段に積み上げている。調査区中央付近に局部的に残存している。

遺物はSK5で陶磁器、SD2で陶磁器と瓦が出土した。

3. 2区の調査

[1] 層位 (第41図)

基本層位は第I層暗灰色シルト、第II層橙灰色微砂質土、第III層黄灰色粗砂質土、第IV層暗灰色砂質土、第V層黄白色粗砂質土、第VI層暗褐色シルト、第VII層暗褐色粘質土(地山)の下記のとおりである。

第I層：耕作土である。調査区全域に厚さ5~36cmで堆積する。

第II層：床土である。厚さ5~14cmで部分的に堆積する。

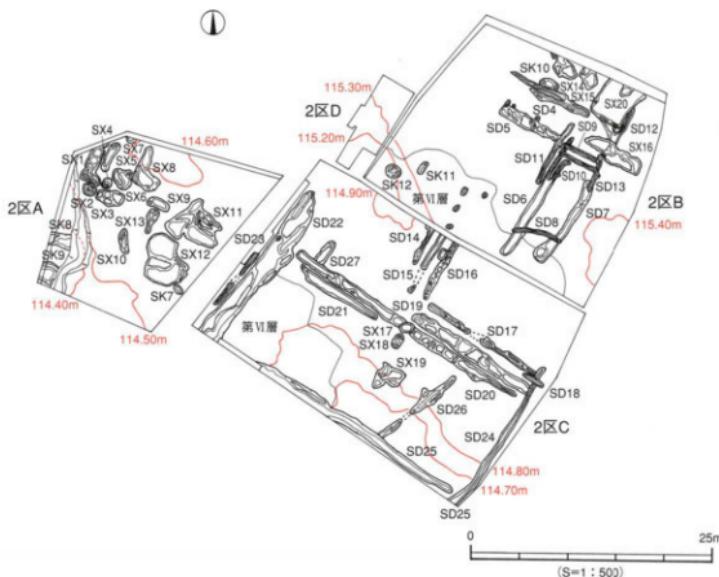
第III層：造成土①である。2区B・Cのほぼ全域に厚さ3~14cmで堆積する。

第IV層：旧耕作土である。2区Cのほぼ全域と、2区Bの一部に厚さ6~14cmで堆積する。

第V層：造成土②である。第III層と同様に2区B・Cのほぼ全域に厚さ3~14cmで堆積する。

第VI層：遺物包含層で2区B・Cに厚さ6~10cmで堆積する。

第VII層：基盤面とした暗褐色粘質土(部分的に黄色粘質土)である。



第43図 2区遺構配置図

[2] 遺構と遺物（第43図、図版8）

2区は北から南へ緩やかに傾斜した谷状地形上に立地している。本調査では、弥生時代の遺物と、近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は土坑7基・溝24条・柱穴6基・塚1基・石列1条・性格不明遺構20基である。そのうち土坑・溝・性格不明遺構については章末の遺構一覧表を参考にされたい。遺物は弥生土器・須恵器・陶磁器・瓦・石鐵・砥石・石器素材・石核・スクレイパー・剝片・出刃包丁・硬貨がある。

ここでは主な遺構と遺物について時代別に概説する。

(1) 弥生時代

2区B南東部と2区C南東部で遺物包含層を検出した。

遺物包含層（第VI層）（第43図）

2区B南東部と2区C南東部で検出した。2区Bでの範囲は東西24m×南北7mを測り、SK11・12、SD6・7・柱穴に切られる。2区Cでの範囲は東西16.5m×10mを測り、SD22・23・25に切られる。遺物は2区Bで砥石、2区Cで弥生土器と石鐵が出土した。弥生土器は胴部片のため同化できなかった。

出土遺物（第45図、図版8）

石器（1～3）1は凹基無茎石鎌である。平面形態は二等辺三角形を呈する。サヌカイト製。2是有茎石鐵である。表面の風化が著しい。サヌカイト製。3は砥石である。片面に金属製品を研いだような鈍い凹面が認められる。下端は欠損する。結晶片岩製。

時期：時期決定に有効な遺物が少ないため正確には不明であるが、弥生土器が出土していることと石鐵の形態や法量などから弥生時代と推定される。

(2) 近現代

遺構は土坑7基・溝24条・柱穴6基・塚1基・石列1条・性格不明遺構20基である。

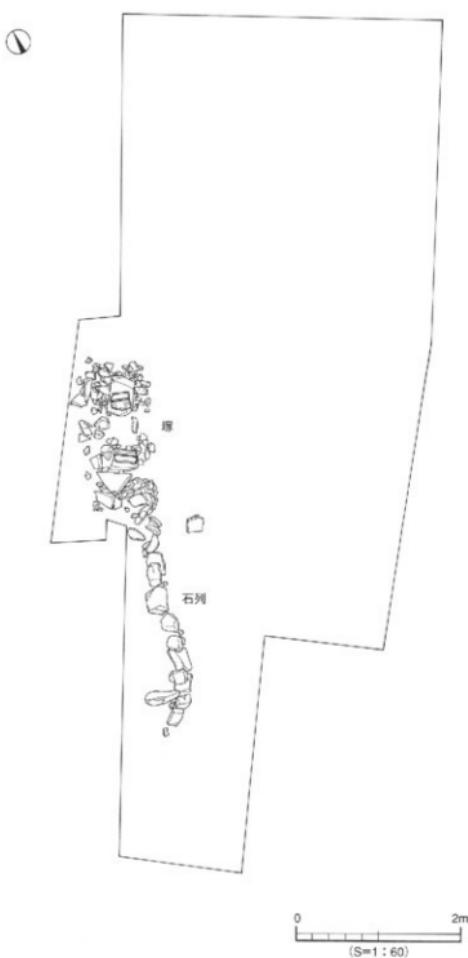
2区Aでは、土坑3基（SK7～9）と性格不明遺構13基（SX1～13）を検出した。本調査区西部では畔岸築造の際の削平と考えられる落ち込みがみられた。遺物はSX1～3・5・6・10・11で陶磁器が、SX8・12で陶磁器と瓦が出土した。

2区Bでは、土坑3基（SK10～12）・溝10条（SD4～13）・柱穴8基・性格不明遺構5基（SX14～16・20）を検出した。溝の方向は水田の区画にあわせて掘削されており、SD6・7・11・12・13はほぼ南北方向、SD4・5・8・9・10はほぼ東西方向である。そのうち暗渠と考えられる遺構はSD8・11・13があり、特にSD8は扁平な砾石を組み合わせて構築されていた。SX20は、検出時は規模や形態から住居跡と考えていたが、柱穴などの内部施設が確認されなかつたため、性格不明遺構とした。遺物はSK12、SD4～6・13、SX16・20で陶磁器、SK11、SD7で瓦、SK10で出刃包丁1点、SD6で二銭銅貨1点が出土した。

2区Cでは、土坑1基（SK13）、溝14条（SD14～27）、性格不明遺構4基（SX17～19）を検出した。溝の方向は水田の区画にあわせて掘削されており、SD14～16・22～24・26・27はほぼ南北方向、17～21・25はほぼ東西方向である。遺物はSD16・17・22～24で陶磁器が出土した。

2区Dの調査区中央部には長さ約1.8×1.0m、高さ0.3mの土盛りがあり、祠2点が各々の台石上

2区の調査



第44図 2区D遺構配置図

に掘え置かれていた。そのため塚の可能性があるとして、内部構造の解明を主目的にトレーナーを設定した。遺物は台石の直下に掌大の礫石と陶磁器、その下層には10cm前後の礫石が出土した。

さらに土盛りの南方向には、南北方向に直線的に伸びる石列を検出した。切り合い関係から石列は上盛りの構築以前に築かれていたことを確認した。遺物は出土しなかった。

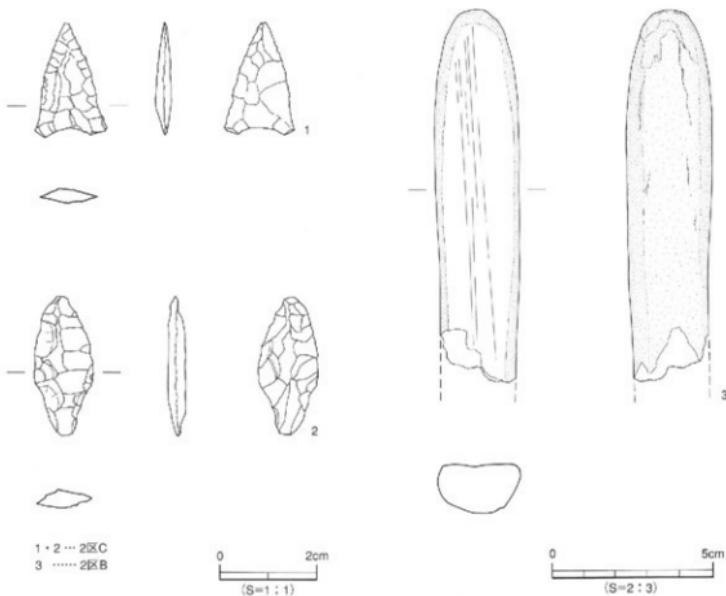
(3) 地点不明の遺物

表探した遺物には弥生土器・須恵器・石器があるが、弥生土器と須恵器は小片のため図化できなかった。(第46・47図、図版8)

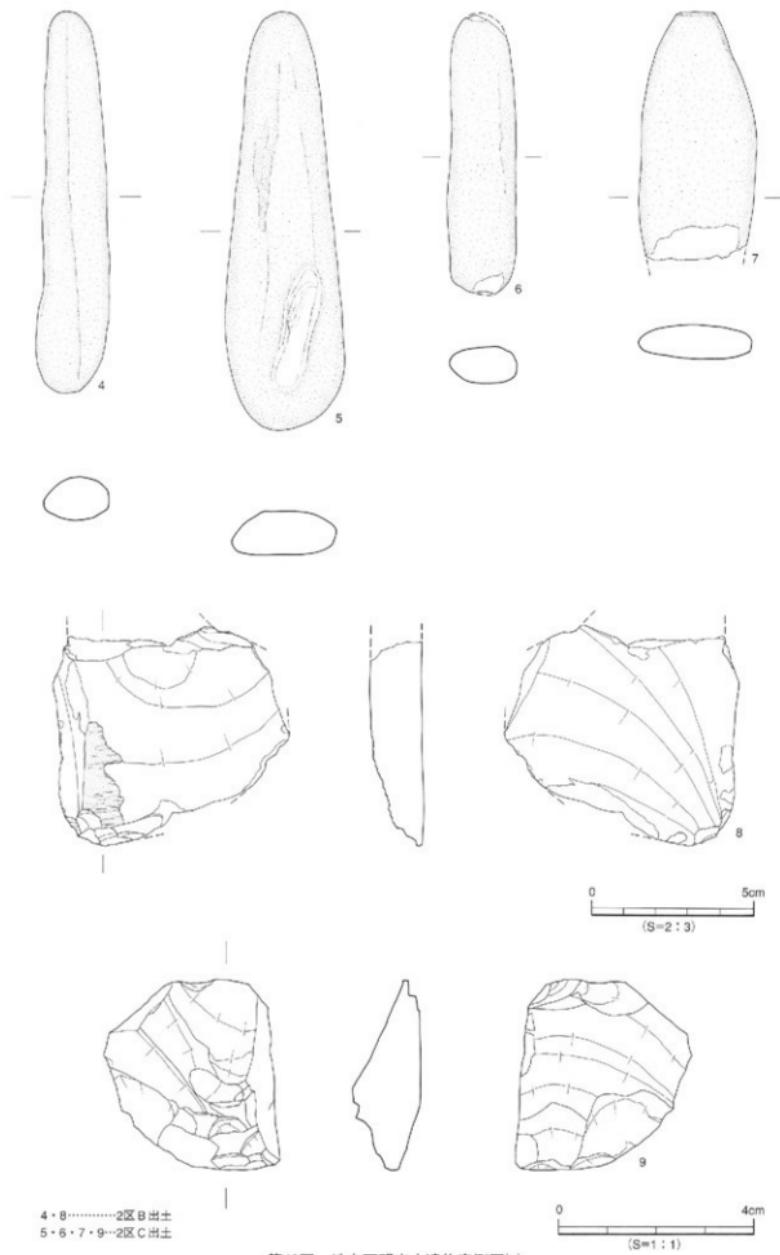
石器(4~12)4~7は石器素材である。いずれも自然の礫石であり、加工痕はみられない。結晶片岩製。4~7は2区B第VI層出土の砥石(3)と同様の形態と材質であるため、砥石未製品の可能性がある。8は石核である。両面に初期剝離が残る。サヌカイト製。9はスクレイバーである。一部に自然面が残る。サヌカイト製。10~12は剥片である。11は一部に自然面が残る。12は石匙の未製品の可能性もある。いずれもサヌカイト製。

4. 小 結

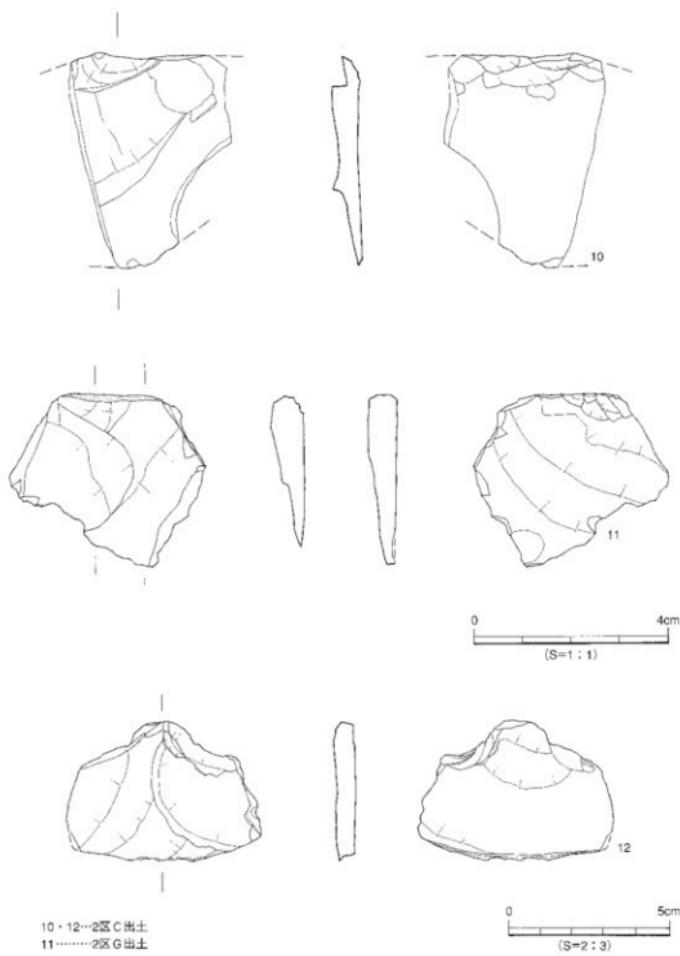
本調査では弥生時代の遺物と、近現代の遺構と遺物を検出した。遺構は土坑13基・溝27条・柱穴19基・塚1基・石列2条・性格不明遺構20基を検出した。遺物は弥生土器・須恵器・陶磁器・瓦・石



2区の調査



第46図 地点不明出土遺物実測図(1)



第47図 地点不明出土遺物実測図(2)

鐵・砥石・石器素材・石核・スクレイパー・剝片・出刃包丁・硬貨がある。ここでは遺構と遺物について時代ごとにまとめを行う。

(1) 弥生時代

2区B・Cで遺物包含層（第VI層）を確認し、弥生土器・石錐・紙石が出土した。地点不明の遺物のなかにも弥生土器や須恵器が含まれていることから、かつては周辺に弥生時代や古墳時代の遺構が存在した可能性が考えられる。

(2) 近現代

本調査で検出したすべての遺構は、出土した陶磁器・出刃包丁・硬貨から近現代のものと考えられる。1区では右列1条を検出した。検出時は一部のみ残存していたが、本米は傾斜地の段落ち部すべてに土留めまたは土地区画のために構築されていたものと推定される。またSD2は段落ち部に沿って掘られているため、排水施設と考えられる。2区B・Cで検出した東西・南北方向にのびるSD4～27についても、水田の境界に設置された排水施設と考えられる。

2区A～Cで検出した性格不明遺構は平面形態が不定形であり、掘り方が明確ではないため、人工的に掘削されたものではなく、自然の凹地である可能性が考えられる。

2区Dで検出した塚は、出土遺物から近現代のものと考えられる。周辺地域での聞き取り調査によると、昭和初期に開墾などの土地改良などの際に古墳を削平した場合、その跡に瓦製の祠を置いて祀るという風習があることから、この近辺に古墳がかつて存在し、消滅した可能性が考えられる。なお、この塚の下層で検出した列石が古墳の名残りであるかどうかは確認できなかった。

本調査では、当初目的として掲げていた古墳時代の集落関連遺構の検出には至らなかった。しかし今回の調査によって、周辺地域に弥生時代や古墳時代の遺構や古墳が存在する可能性ができた。それは、2区で弥生時代の遺物を包含した遺物包含層（第VI層）を確認したこと、地点不明遺物のなかに弥生土器や須恵器などが含まれていたこと、2区Dで古墳削平後に祠が祀られていたことなどから考えられる。

この地域は、これまで発掘のメスが入ることが少なく未解明の部分が多かったが、今後は試掘調査の結果などをもとに遺構の性格や範囲の確認を進めていく必要がある。

遺構・遺物一覧 一丸 例一

(1) 以下の表は、本測量復元の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は仙波千秋・伊藤ミリ子が、遺物観察表は山之内・高尾久子が作成した。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 弥生→弥生土器・十節→十節器・須恵→須恵器・陶器→陶器・磁器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法 葉 標 () : 備考推定値

形態・施文欄 十冊の各部位名称を略記。

例) 口様→口様部、口端→口端端部、胴中→胴部半位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・絶痕欄 胎土標では既和剖を略記。

例) 紗→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和割合の大きさを示す。

例) 紗・長(1～4)、多→「1～4mmの大粒砂、長石を多く含む」である。

焼成標の略記。◎・良好、○・良、△・不良。

表33 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 (m) 長さ(奥様)×幅(短径)×深さ	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	a 31	方形	直状	0.69×0.5×0.06	灰褐色シルト		近現代	
2	a 31	扇丸形	浅い直状	0.66×0.41×0.04	灰褐色シルト		近現代	
3	a 31	方形	直状	0.71×0.58×0.10	灰白色砂質土 褐灰色砂質土		近現代	
4	a 31	扇丸形	レンズ状	1.81×0.61×0.07	黄白色砂質土		近現代	
5	a 31	不整形	直状	0.76×0.54×0.06	灰白色砂質土	陶器器	近現代	
6	a 31	不整形	直状	1.41×1.25×0.09	灰白色砂質土		近現代	
7	v 10	不整形	レンズ状	1.35×0.74×0.09	灰褐色シルト		近現代	
8	Y 8 ~ Y 9	不整形	U字状	(2.31)×1.16×0.29	灰褐色シルト		近現代	調査区外に近く
9	Y 9 ~ Y 10	不整形	U字状	(1.92)×1.69×0.33	黄褐色シルト		近現代	調査区外に近く
10	L 4 ~ M 4	椭円形	直状	2.25×0.98×0.16	灰褐色砂質土 灰褐色砂質土	山刀子	近現代	
11	06 ~ P 7	椭円形	レンズ状	1.46×0.53×0.16	灰褐色砂質土	瓦	近現代	
12	P 6 ~ P 7	円形	レンズ状	1.52×1.27×0.17	灰褐色砂質土	陶器器	近現代	
13	O 9	扇丸形	直状	1.08×0.77×0.05	灰褐色砂質土		近現代	

表34 溝一覧

(1)

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1	Y 32 ~ Z 32	逆台形状	(5.3)×0.35~1.72×0.2	東南~西北	灰褐色土		近現代	トレンチに切られる
2	V 26 ~ Y 33	U字型	(36.9)×0.20~0.54×0.03~0.13	北~南	灰褐色シルト	陶器器 瓦	近現代	SD 1・トレンチに 切られる
3	V 27 ~ X 28	逆台形状	(11.75)×0.4×0.09	南西~北東	灰白色シルト		近現代	SD 2に切られる
4	M 4 ~ K 3	直状	9.25×1.02×0.09	北西~東東	灰褐色砂質土	陶器器	近現代	
5	M ~ N 5 ~ L 6	直状	6.56×1.40×0.08	南東~北西 (やや左)	棕色シルト	陶器器	近現代	S I' 12・13・15に 切られる
6	L 6 ~ M 9	直状	13.97×0.96×0.07	北~南	灰褐色砂質土	陶器器 破片	近現代	SD 8・9・10に 切られる
7	K 7 ~ M 9	直状	9.80×0.70×0.09	北~南	灰褐色砂質土	瓦	近現代	SD 8・13に切られる
8	L 8 ~ M 8	U字状	3.10×0.26×0.10	東~西	灰白色シルト		近現代	暫定
9	K 6 ~ L 6	直状	4.16×0.30×0.08	西~東	灰褐色砂質土		近現代	
10	K 6 ~ L 6	U字状	4.32×0.36×0.09	西~東	灰褐色砂質土		近現代	
11	L 5 ~ M 7	走査形状	7.20×0.32×0.08	東~北	灰白色シルト		近現代	SD 5に切られる 結果
12	J 5 ~ K 6	直状	5.75×0.86×0.04	東~北	灰白色シルト		近現代	S X 16~20に切られる
13	K 6 ~ K 7	逆台形状	4.12×0.39×0.10	南~北	灰白色シルト	陶器器	近現代	SD 9~10に切られる 結果
14	O 8 ~ O 9	直状	(4.0)×0.36×0.06	北東~南西 (桂山黄色泥)	灰褐色砂質土 (桂山黄色泥)		近現代	調査区外へ続く
15	O 8 ~ P 10	直状	(6.78)×0.64×0.06	北東~南西 (桂山黄色泥)	灰褐色砂質土 (桂山黄色泥)		近現代	調査区外へ続く
16	O 8 ~ O 10	逆台形状	(6.58)×0.81×0.11	北東~南西 (桂山黄色泥)	灰褐色砂質土 (桂山黄色泥)	陶器器	近現代	S K 13に切られる 調査区外へ続く

遺構一覧

満一覧

(2)

満 (S)	地 区	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
17	O 10～M12	皿状	12.90×0.50～0.83×0.06	東東～北西	灰褐色砂質土 (赤色の斑点)	陶器器	近現代	S D24に切られる
18	L 12～M12	皿状	2.57×0.63×0.03	南東～北西	灰褐色砂質土 (赤色の斑点)		近現代	
19	P 10～M12	皿状	14.05×1.03～1.38×0.08	南東～北西	灰褐色砂質土 (赤色の斑点)		近現代	S D24に切られる
20	S 9～M12	皿状	27.2×0.92～1.22×0.15	北西～南東	灰褐色砂質土		近現代	S X17に切られる
21	S 9～Q10	皿状	9.56×0.96×0.13	北西～南東	灰褐色砂質土		近現代	
22	R 7～U11	皿状	(18.34)×1.88～2.26×0.25	北東～南西	灰色砂質土	陶器器	近現代	調査区外へ傾く
23	T 9～U10	レンズ状	(7.0)×0.3×0.08	北東～南西	灰褐色砂質土 (耕作土)	陶器器	近現代	トレンチに傾く
24	L 12～O 15	U字状	(17.15)×0.54～0.60×0.11	北東～南西	黄色砂質土	陶器器	近現代	S D18に切られる 調査区外へ傾く
25	T 11～O 15	不規形状	(23.42)×1.15～1.25×0.35	北西～南東	灰褐色砂質土		近現代	トレンチに傾く
26	O 12～Q 13	レンズ状	(9.9)×0.61～1.76×0.12	北東～南西	褐色シルト		近現代	S D25に切られる
27	R 8～R 9	U字状	(2.72)×1.06×0.06	北東～南西	灰褐色砂質土 (赤色の斑点)		近現代	S D20に切られる

表35 性格不明遺構一覧

(1)

地 区	平 面 形	断 面 形	規 模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	出 土 遺 物	時 期	備 考
1 X 6～X 7	不整形	皿状	(4.08)×1.4×0.12	灰白色砂質土	陶器器	近現代	調査区外へ傾く
2 X 7	不整形	皿状	1.42×9.5×0.06	灰白色砂質土	陶器器	近現代	
3 W 7～X 8	不整形	レンズ状	2.84×0.99×0.11	灰白色砂質土	陶器器	近現代	
4 X 7	不整形	皿状	1.1×0.95×0.12	灰白色砂質土 (赤色ブロッケ)		近現代	
5 W 6～X 7	不整形	皿状	3.09×0.64×0.10	灰白色砂質土 (黄土ブロッケ)	陶器器	近現代	
6 W 7	不整形	皿状	2.26×1.43×0.11	灰白色砂質土 (赤色ブロッケ)	陶器器	近現代	
7 W 6	不整形	皿状	(0.72)×1.04×0.08	灰白色砂質土 (黄土)		近現代	調査区外へ傾く
8 V 6～W 7	不整形	皿状	4.96×1.05×0.07	灰白色砂質土 (黄土)	陶器器 瓦	近現代	
9 V 7～W 8	隅丸方型	皿状	2.24×1.11×0.07	灰白色砂質土 (黄土)		近現代	
10 W 8～W 9	不整形	皿状	2.04×0.80×0.16	褐色シルト (黄土ブロッケ)	陶器器	近現代	
11 U 7～U 9	不整形	皿状	3.25×2.81×0.06	灰白色砂質土	陶器器	近現代	
12 V 8～V 10	不整形	皿状	3.59×2.17×0.15	灰白色砂質土	陶器器 瓦	近現代	
13 V 8～W 8	不整形	皿状	2.53×0.42×0.07	灰白色砂質土 (黄土)		近現代	
14 L 3～L 4	不整形	皿状	(2.38)×1.8×0.08	灰褐色砂質土 (赤色ブロッケ)		近現代	調査区外へ傾く
15 K 4～L 4	不整形	皿状	(2.05)×1.52×0.10	灰褐色砂質土 (赤色)		近現代	調査区外へ傾く
16 J 6～K 6	不整形	レンズ状	3.27×0.70×0.13	灰褐色砂質土	陶器器	近現代	
17 P 10～P 11	不整形	皿状	1.52×0.63×0.05	褐色シルト		近現代	
18 P 11	不整形	レンズ状	1.57×0.97×0.05	灰褐色砂質土		近現代	

性格不明遺構一覧

(2)

遺構 番号	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	出 土 物	時 期	備 考
19	P11～K12	不整形	直状	2.82×2.42×0.06	褐色微砂質土		近現代	
20	J4～K5	隅九方形	直状	(2.13)×1.89×0.07	明灰色微砂質土	両縁部	近現代	発堀区外へ傾く

表36 2区 第VI層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	因数
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1	石 瓶	完形	サスカイト	2.3	1.5	0.3	0.81		8
2	石 瓶	完形	サスカイト	2.8	1.2	0.35	1.41		8
3	砥 石	ほぼ完形	結晶片岩	11.5	2.6	1.5	92.21		8

表37 地点不明 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	因数
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
4	石器素材	完形	結晶片岩	11.7	2.2	1.4	59.75		
5	石器素材	完形	結晶片岩	12.8	3.6	1.3	118.06		
6	石器素材	ほぼ完形	結晶片岩	8.6	2.0	1.1	38.86		
7	石器素材	ほぼ完形	結晶片岩	7.6	3.5	1.1	32.94		
8	石 棒	周囲をかなり欠損	サスカイト	6.2	7.2	1.6	81.72		8
9	スクレイパー	完形	サスカイト	3.9	3.6	1.3	18.13	石棒を削削したもの	8
10	剥 片	周囲をかなり欠損	サスカイト	4.4	3.3	0.55	8.79		8
11	剥 片	完形	サスカイト	3.5	4.0	0.6	8.99		8
12	剥 片	ほぼ完形	サスカイト	4.4	6.0	0.6	21.67	右端の朱鉛品?	8

第5章

A～H区の試掘調査



第5章 A～H区の試掘調査

1. 試掘調査の経過

1996（平成8）年10月に松山市長田中誠一氏より松山市北梅本町における土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財の確認願いが提出された。文化教育課は平成9～11年の間、約168,000m²の面積において試掘調査を実施した。調査は調査地が広域にわたることと現況農道や用水路の保全を前提としたため、8区（A～H区）に区分し実施した。（第1章－「1. 調査に至る経過」を参照）調査地の現況は、水田耕作地・畑地・果樹園・宅地などであり、そのほとんどが水田耕作地であった。そのため調査は縦の収穫後から山植えまでの間に実施した。

調査着手前には草刈りを実施し、調査地を踏査し表面採集を行った。試掘トレンチは周辺の地形などを考慮して合計498本を設定した。トレンチは基本的に長さ8m、幅1mの長方形とし、地形によって長さは前後させ、柑橘類などの果樹園については樹木の保全のため樹木の根元から離れた場所で1m四方程度の壠堀りとし、遺構や遺物が確認された場所では、一部拡張を行った。またトレンチ両端の各1mは、地山（基盤面）確認のため、10cm程度掘り下げた。トレンチは第Ⅰ層と第Ⅱ層を重機で掘削し、以下は一層ずつ手掘りで進めた。埋め戻しは、耕作土が整備工事の際に必要となるため、他の上層と混じらないよう配慮し行った。

トレンチ番号の表記は、「T-A 1」のように「T-」に続けて区名と番号を付し、各区を通し番

表38 試掘調査一覧

区名	所 在 地	面積(m ²)	期 間	調 査 担 当
A区	松山市北梅本町甲1,101外	22,956	1998（平成10）年5月19日 ～同年6月16日	相原 浩二 山之内志郎
B区	松山市北梅本町甲1,089-1外	26,346	1998（平成10）年9月21日 ～同年10月29日	相原 浩二 山之内志郎
C区	松山市北梅本町甲1,563外	32,757	1998（平成10）年10月29日 ～1999（平成11）年2月25日	相原 浩二 山之内志郎
D区	松山市北梅本町甲1,324外	36,261	1998（平成10）年11月27日 ～1999（平成11）年2月16日	相原 浩二 山之内志郎
E区	松山市北梅本町乙697-1外	6,265	1998（平成10）年11月2日 ～1999（平成11）年2月19日	相原 浩二 山之内志郎
F区	松山市北梅本町甲3,427外	27,388	1997（平成9）年9月9日 ～同年10月31日	相原 浩二 小玉圭紀子
G区	松山市北梅本町甲3,381外	13,037	1997（平成9）年12月1日 ～同年12月16日	田城 武志 栗田 正芳
H区	松山市北梅本町甲3,416-1外	2,689	1998（平成10）年1月16日 ～同年1月28日	相原 浩二 小玉圭紀子

号とした。なおA～H区の所在地・面積・調査期間・調査担当者は表38のとおりである。

2. 層位・遺構と遺物

(1) A区（第48～51図）

調査地は小野川の支流である悪社川や竹ヶ谷川によって形成された扇状地の扇端付近に位置し、周辺には切池や大池などの溜め池が点在する。調査地は、すべてが水田耕作地であり、そのうち休耕田が数枚あったため、調査着手前に草刈りを実施した。地形は東から西への緩傾斜地で、最大高低差は約7.8mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレチは一区画の水田に1～2本の長方形トレチを合計58本設定した。T-A52・53については、激しい湧水により壁面が崩壊する危険性があったため、1m四方のトレチとし、測量と写真撮影を行い早急に埋め戻しを行った。

基本層位は、第1層暗灰色粘質土（耕作土）、第2層褐色シルト（やや粘質）、第3層黄灰色シルト（やや砂質・床上）、第4層灰橙色砂質土（旧耕作土）、第5層黄灰色微砂質土（旧床土）、第6層灰白色微砂質土、第7層灰褐色シルト（粒状の褐色土混じり）、第8層明黄灰色微砂質土（黄色強・地山）、第9層明橙色砂礫（灰色粘質土含む・地山）、第10層黄白色砂礫（地山）、第11層暗灰色砂質土（地山）である。

調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(2) B区（第52～54図）

調査地はA区の西に位置し、西側には人池がある。調査地は、すべてが水田耕作地である。地形は東から西への緩傾斜地で、最大高低差は約3.7mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレチは一区画の水田に1～2本の長方形トレチを合計51本設定した。T-B29は配水管の埋設部分だけの1m四方の盃掘りを2か所で実施した。T-B12は周囲を用水路で囲まれていたため激しい湧水があり、壁面が一部崩壊したため拡張を行った。

基本層位は、第1層暗灰色粘質土（耕作土）、第2層灰白色シルト（床土①）、第3層橙色シルト（床土②）、第4層暗灰色シルト（旧耕作土）、第5層黄灰色シルト（旧床土）、第6層暗灰色粘質土（黒色に近い・地山）、第7層青灰色微砂質土（地山）、第8層明橙色微砂質土（地山）、第9層灰色砂礫（5cm大の砾含む・地山）、第10層橙色砂礫（地山）である。

調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

(3) C区（第55～62図）

調査地は2つの狹小な谷状地形が合流する谷部に位置し、中央部はなだらかな尾根が広がり、西側は枝条下池から流れ出る悪社川により浸食を受けている。

調査地は、ほとんどが水田耕作地で、一部に果樹園と建物がある。地形は東から西に傾斜し、最大高低差は約13.4mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレチは一区画の水田または果樹園に1～3本の長方形トレチを合計118本設定した。

基本層位は、第1層灰色粘質土（耕作土）、第2層橙色シルト（微砂含む・床上）、第3層黄灰色微

砂質土（疊含む）、第4層明灰色シルト（疊含む・砂っぽい）、第5層灰白色砂礫、第6層暗灰色粘質土、第7層黃白色微砂質土（疊含む・地山）、第8層橙色砂礫（疊石多い・地山）、第9層青灰色粘質土（やや微砂・地山）、第10層青灰色砂礫（地山）である。

遺構は溝1条（T-C80・81）、柱穴5基（T-C30・65）のほか遺物包含層を2か所（T-C47・92）で確認した。溝と柱穴は遺物がないため時期決定は難しいが、埋土から中世以降と考えられる。遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。

遺物は弥生土器（T-C39・45・59・63・74・84・108）、須恵器（T-C5・7・12・14・17・25・31・32・33・34・35・40・42・47・53・54・74・91・104・106・108・112）、土師器（T-C6・19・21・30・33・45・59・65・66・74・77・79・81・106・112）、陶磁器（T-C63・101・118）、石器片（T-C19・31・38・58・68・69）がある。

以上のことから本調査地内には弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。これらの遺構と遺物を検出した地点については、盛り土を施して遺構が保存されることとなった。

（4）D区（第63～70図）

調査地はC区の南西側に隣接し、中央部と西部の間を悪社川が流れ、北池に注ぐ。調査地は東西に長い。東部は畑地と果樹園、中央部は水田耕作地、西部は水田耕作地と果樹園である。悪社川の両岸は護岸工事のため調査区外である。最大高低差は約18.1mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレチは一区画の水田または果樹園に1～3本の長方形トレチを合計129本設定した。T-D38については一部拡張を行った。T-D48～50は遺物包含層が確認されたため「コ」の字形にトレチを設定した。T-D70は柱穴が確認されたため柱間隔から推測して拡張を行った。なお、T-D1～7・D77～80の畑作地は昭和40年代に耕作整理が行われ、地山が段カットされていた。

基本層位は、第1層灰色粘質土（耕作土）、第2層橙色シルト（微砂含む・床土）、第3層黄灰色微砂質土（疊含む）、第4層明灰色シルト（疊含む・砂っぽい）、第5層灰白色砂礫、第6層暗灰色粘質土、第7層黃白色微砂質土（疊含む・地山）、第8層橙色砂礫（人頭人の疊石含む・地山）、第9層青灰色粘質土、第10層青灰色微砂質土、第11層黒色粘質土、第12層灰色砂礫（地山）、第13層青灰色砂礫（地山）、第14層青灰色砂礫（黄色混じり・地山）である。

遺構は柱穴10基（T-D55・70・91）や石列（T-D8）のほか遺物包含層（T-D48・49）がある。柱穴は遺物がないため時期決定は難しいが、埋土から中世以降と考えられる。遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。

遺物は、弥生土器（T-D14・20・55）、須恵器（T-D10・12・19・23・26・33・37・38・42・44・46・50・53・58・96・100・104・111・122）、土師器（T-D11・13・21・24・25・28・29・30・31・33・41・42・43・45・46・48・51・53・54・59・104・105・108・111）、陶磁器（T-D107）、石器片（T-D1・70・78・89・99・103）がある。

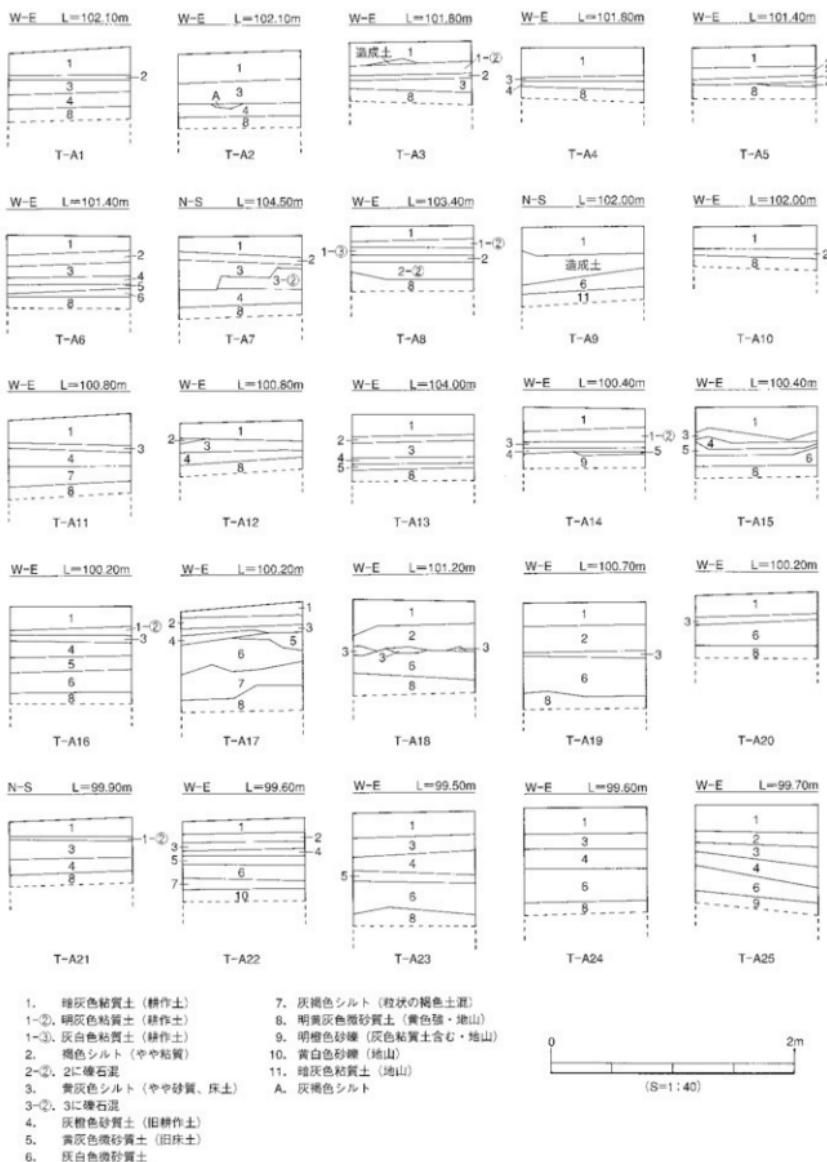
以上のことから本調査地内には弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。調査は、遺構と遺物を検出した地点のうち、悪社川より東部は盛り土を施して遺構が保存される。西部（T-D8～31・D38～59・D127～129）は地山を切除することにより遺構が消滅するため、事前の本格調査を実施した。本書の「第3章 北梅本北池遺跡」として報告する。

A～H区の試掘調査



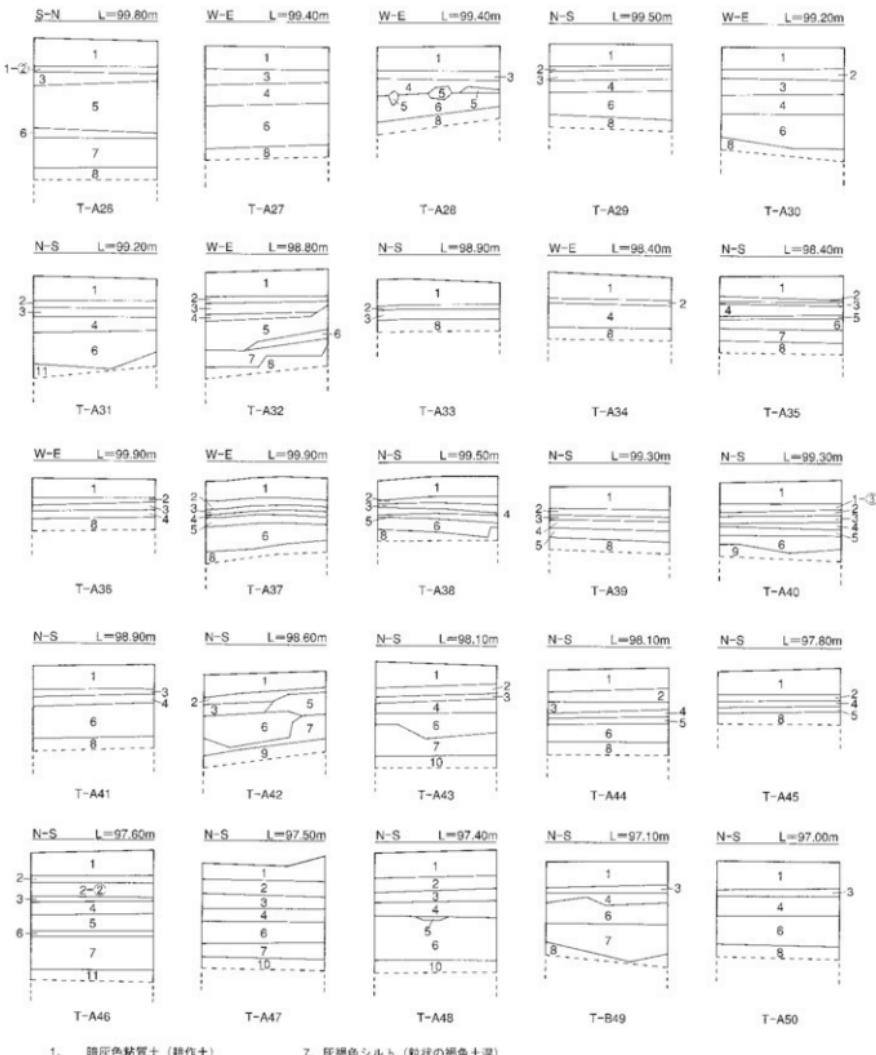
第48図 A区トレンチ配置図

層位・造構と遺物



第49図 A区柱状土層図(1)

A～H区の試掘調査

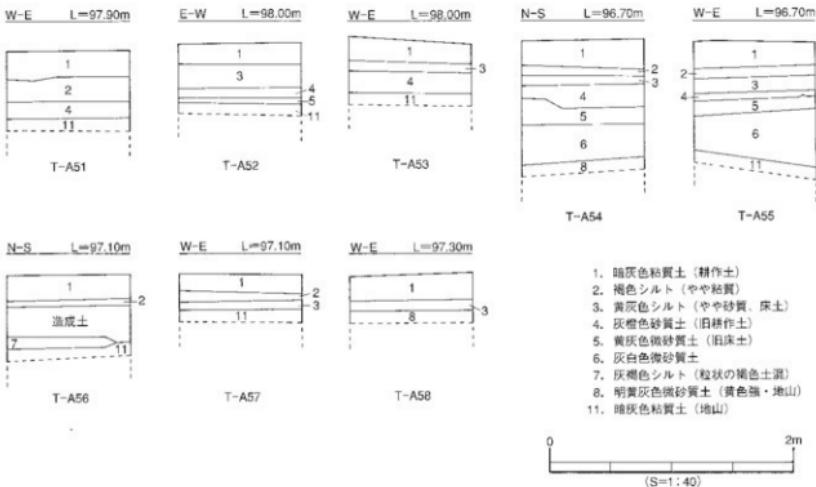


1. 暗灰色粘質土（耕作土）
- 1-②. 明灰色粘質土（耕作土）
- 1-③. 底灰色粘質土（耕作土）
2. 褐色シルト（やや粘質）
- 2-②. 2に礫石混入
3. 黄灰色シルト（やや粘質、床土）
4. 底棕色砂質土（旧耕作土）
5. 黄灰色微砂質土（旧床土）
6. 灰白色微砂質土

7. 灰褐色シルト（粒状の褐色土混）
8. 明黄色灰微砂質土（黄色強・地山）
9. 明褐色砂礫（灰色粘質土含む・地山）
10. 黄白色砂礫（地山）
11. 雜灰色粘質土（地山）

0 2m
(S=1:40)

第50図 A区柱状土層図(2)



第51図 A区柱状土層図(3)

(5) E区 (第71~73図)

調査地は東西を丘陵に挟まれた谷部に位置する。調査地の現況は畑地または果樹園である。東側には農道と水田耕作地を挟んで悪社川が流れ枝渠下池に注ぐ。この農道は平成6年度に農道拡幅工事に伴い発掘調査が行われ「北梅本悪社谷遺跡」として既に報告されている。(梅木謙一他1998『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター) また調査地の北西斜面には「悪社谷1号窯」がある。地形は北から南への緩傾斜地で、最大高低差は約8.0mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレングを合計29本設定した。T-E 9は西側斜面に悪社谷1号窯と同様の窯址があることが推測されたため、丘陵に沿って長さ50m、幅1mの長いトレングを設定した。T-E 6・8・13・29は畑地であり樹木の保全を考え、1m四方の竪掘りとした。

基本層位は、第1層暗灰色土(耕作土)、第2層黄色土、第3層明灰色土、第4層明黄色土、第5層青灰色粘質土(遺構埋土)、第6層灰色土(遺構埋土)、第7層黒褐色土(遺構埋土)、第8層黄色土(地山)である。

遺構は、須恵器窯の灰原1か所(T-E 9)、土坑3基(T-E 9)、溝12条(T-E 1・5・7・9・12・14・19・20・21・22・25・26)である。これらのうちT-E 12・14・19・20・21・22・25・26については理土や方向性から同一の溝と考えられる。

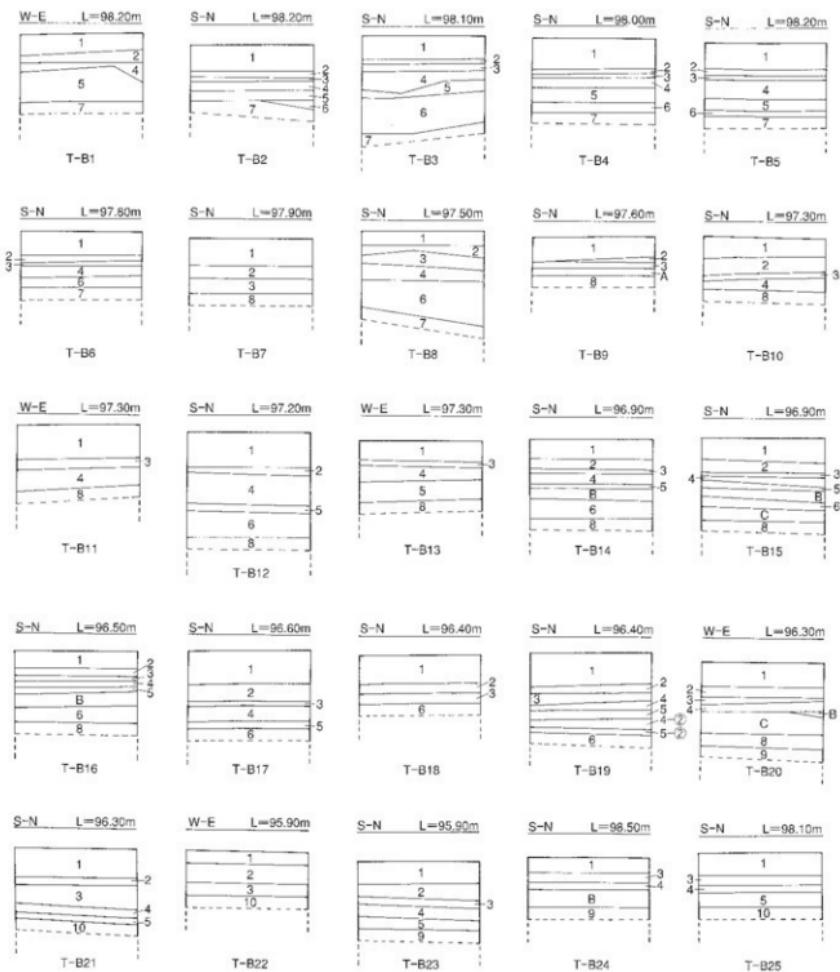
遺物は、須恵器(T-E 1・2・3・4・5・7・9・12・16・21)、土師器(T-E 9)、陶磁器(T-E 9・12)のほか、窓壁片(T-E 9)や石器片(T-E 9)が出土している。

以上のことから、本調査地内には古墳時代から中・近世に至る、生産関連遺構や集落関連遺構が遺存しているものと思われる。

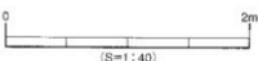


第52図 B区トレンチ配置図

層位・透構と遺物

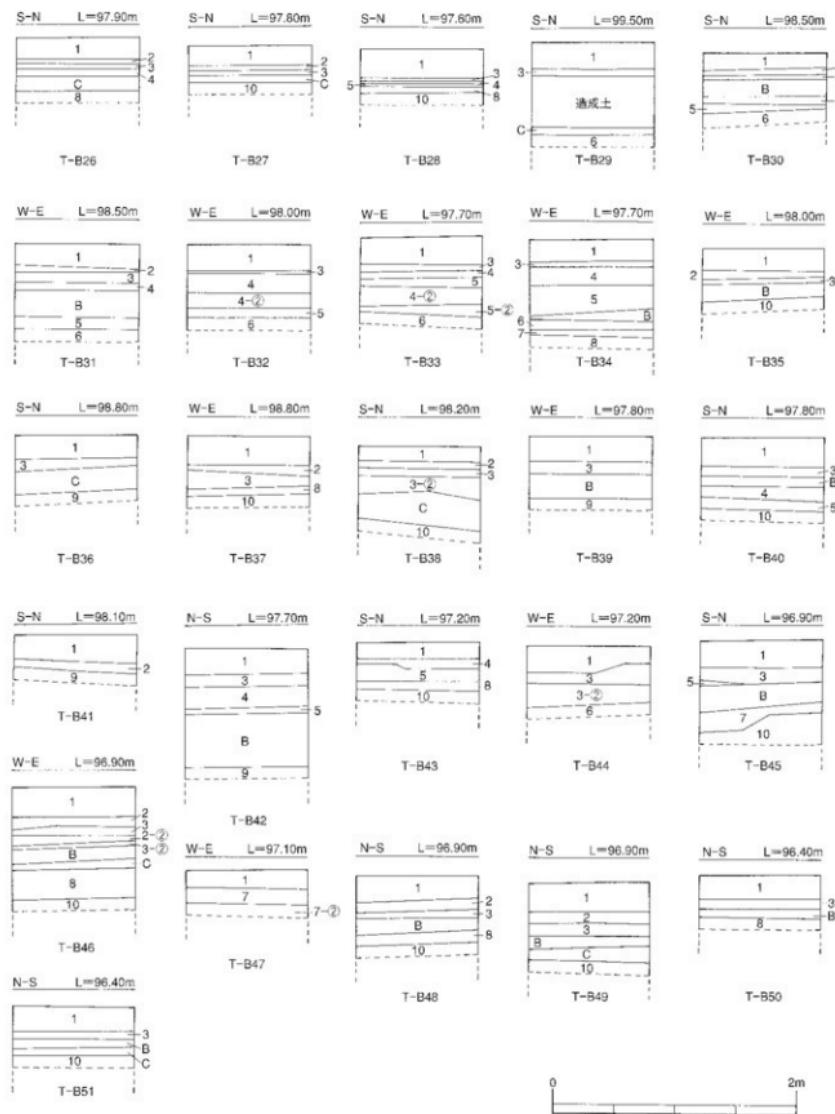


1. 暗灰色粘質土（耕作土）
2. 灰白色シルト（床土①）
3. 橙色シルト（床土②）
4. 暗灰色シルト（旧耕作土）
- 4-②. 暗灰色シルト（旧耕作土、やや砂質）
5. 黄灰色シルト（旧床土）
- 5-②. 黄灰色シルト（旧床土、やや砂質）
6. 暗灰色粘質土（黒色に近い・地山）
7. 青灰色微砂質土（地山）
8. 明褐色微砂質土（地山）
9. 灰色砂礫（5cm大の粒含む・地山）
10. 橙色砂礫（地山）
- A. 灰褐色粗砂質土（粒状の褐色土を含む）
- B. 灰白色シルト
- C. 灰白色粘質土



第53図 B区柱状土層図(1)

A～H区の試掘調査



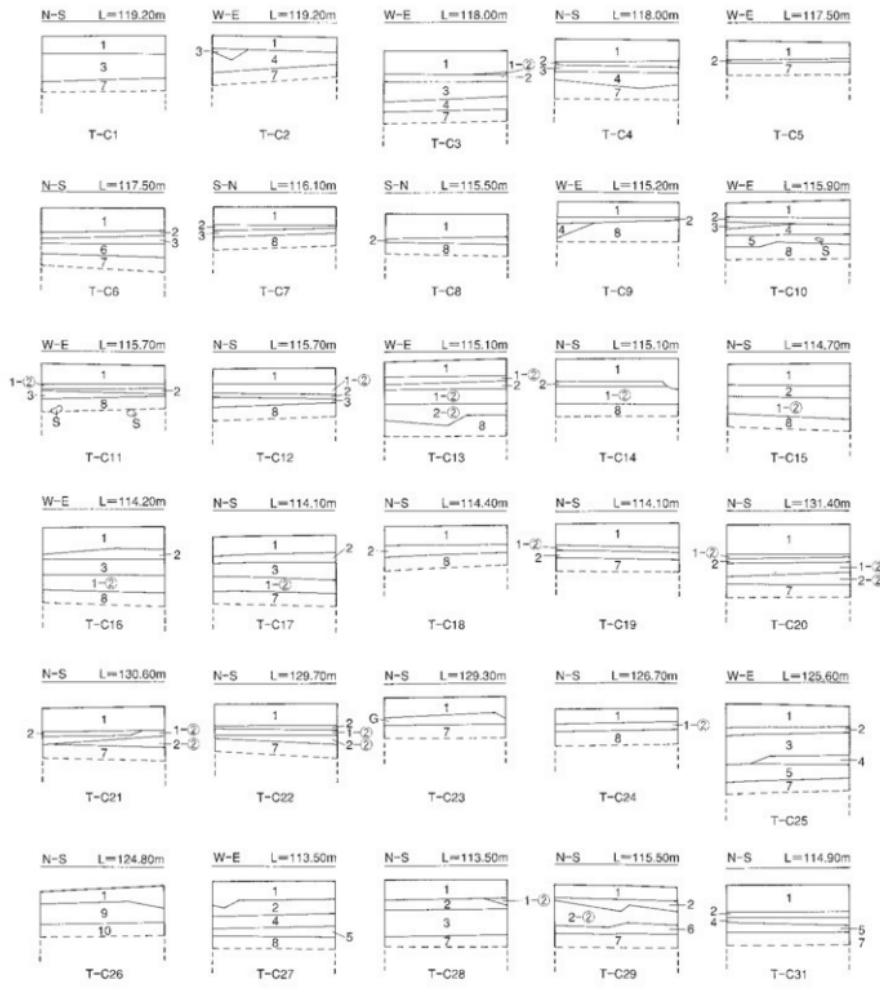
1. 鳥灰色粘質土 (耕作土)
2. 灰白色シルト (底土①)
- 2-②. 底白色シルト (底土①・2よりやや淡い)
3. 橙色シルト (底土②)
- 3-②. 橙色シルト (底土②・3よりやや淡い)
4. 灰白色シルト (旧耕作土)
- 4-②. 鳞灰色シルト (旧耕作土、やや砂質)
5. 黄灰色シルト (旧底土)
- 5-②. 黄灰色シルト (旧底土、やや砂質)
6. 鳞灰色粘質土 (黒色に近い・地山)
7. 青灰色微粒質土 (地山)
- 7-②. 青灰色微粒質土 (薄混じり・地山)
8. 明橙色微粒質土 (地山)
9. 灰色砂礫 (5cm大の礫含む・地山)
10. 橙色砂礫 (地山)
- B. 灰白色シルト
- C. 灰白色粘質土

第54図 B区柱状土層図(2)



第55図 C区トレンチ配置図

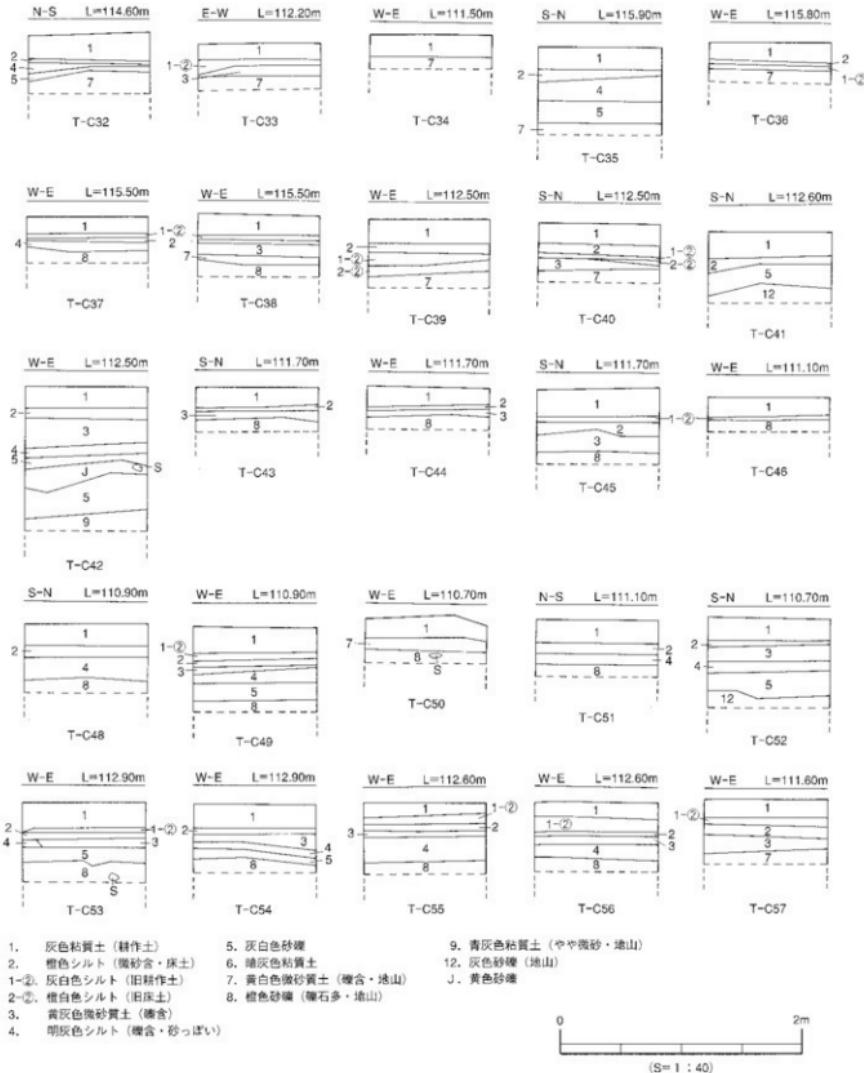
A～II区の試掘調査



1. 灰色粘質土（耕作土）
2. 橙白色シルト（微砂含・床土）
- 1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
- 2-②. 橙白色シルト（旧床土）
3. 黄灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
5. 底色砂礫
6. 珠灰色粘質土
7. 黄白色微砂質土（礫含・地山）
8. 橙色砂礫（礫石多・地山）
9. 青灰色粘質土（やや微砂・地山）
10. 青灰色砂礫（地山）
- G. 褐色粗砂

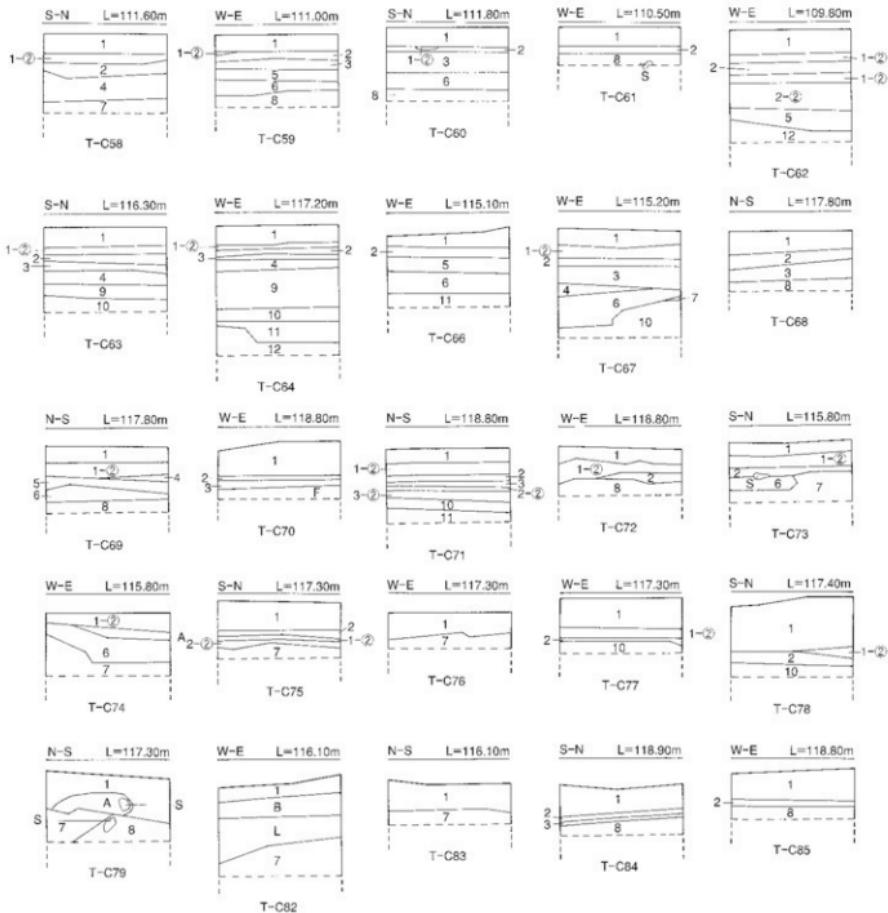
0 2m
(S=1:40)

第56図 C区柱状土層図(1)



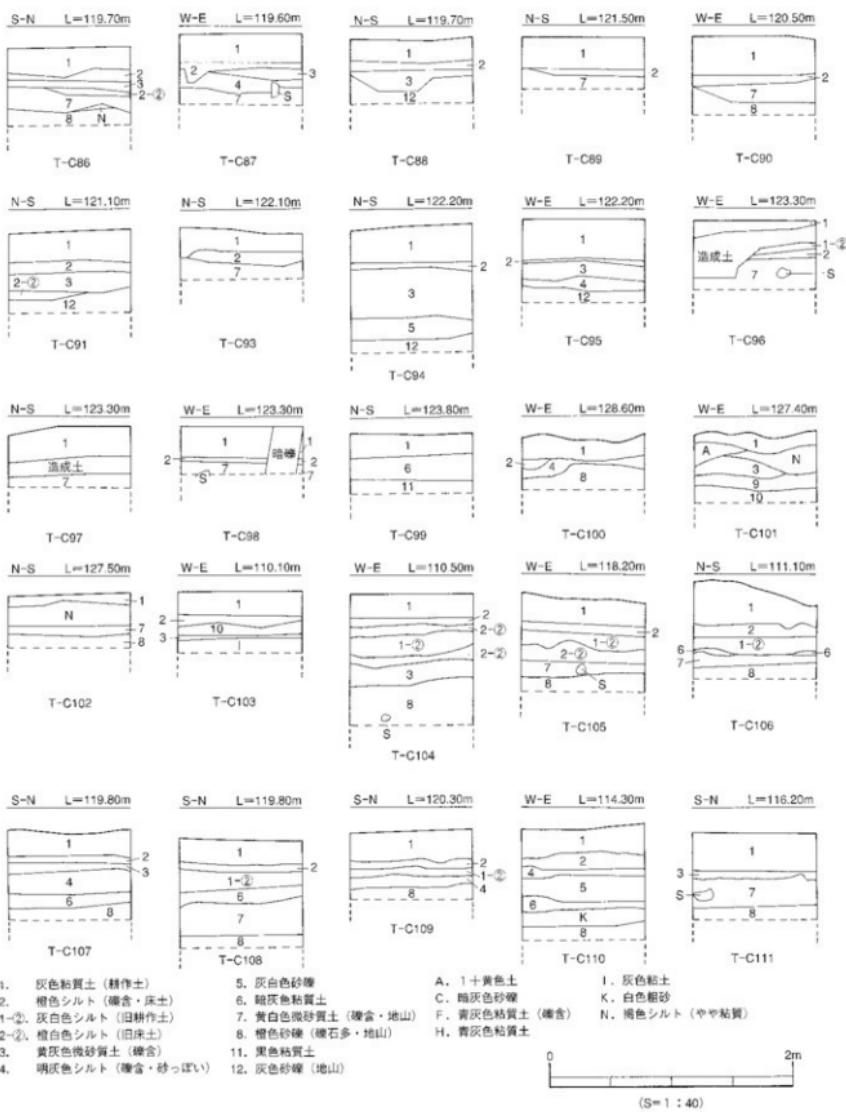
第57図 C区柱状土層図(2)

A～II区の試掘調査



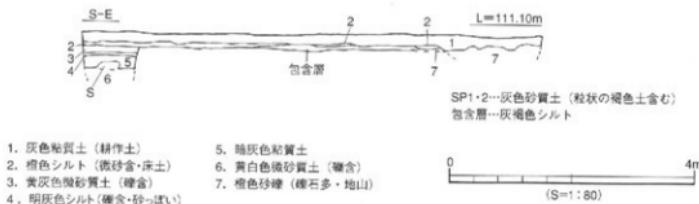
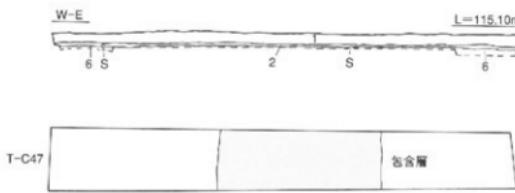
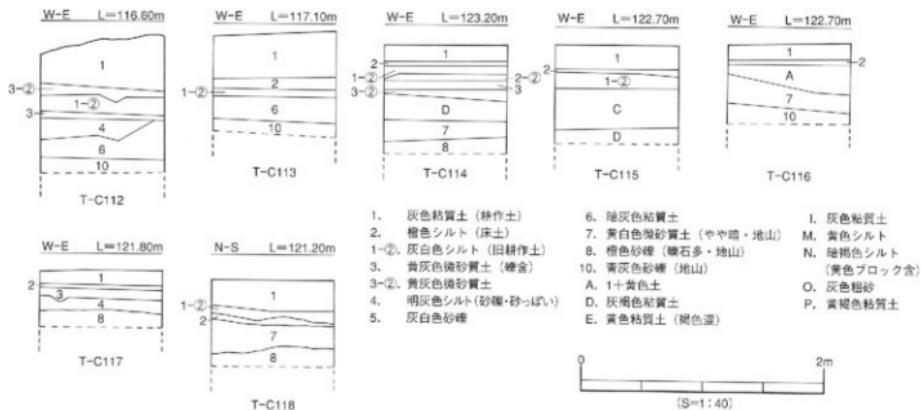
0
2m
(S=1:40)

第58図 C区柱状土層図(3)

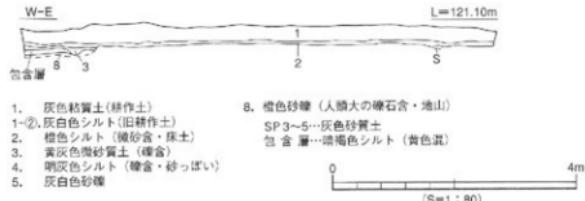


第59図 C区柱状土層図(4)

A～H区の試掘調査



第60図 C区柱状土層図(5)・トレンチ測量図・土層図(1)



第61図 C区トレーンチ測量図・土層図(2)

本調査地は地山を切除して工事が行われることから遺構が消滅するため、事前の本格調査を実施した。本書の「第2章 北梅本悪社谷遺跡2次調査地」として報告する。

(6) F区 (第74~80図)

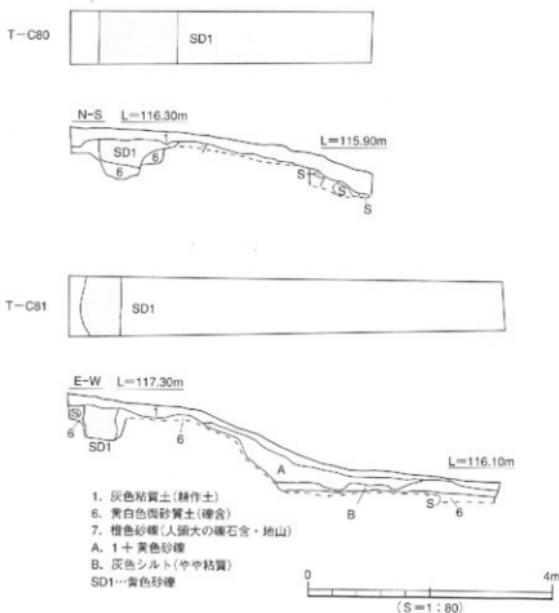
調査地は北部と南東部を丘陵に挟まれ、北部には竹ヶ谷川が西流する扇状地帯に開けた水田耕作地である。地形は北東から南西への緩傾斜地で、最大高低差は約8.3mを測る。

調査は立会人のもとに申請地を確認後、一区画に1~5本のトレーンチで合計88本設定した。トレーンチは長さ4~59m、幅1mを測る。

基層位は、第1層灰茶褐色粘質土（耕作土）、第2層明黄褐色粘質土（床土）、第3層黄褐色粘質土、第4層黄灰色粘質土、第5層灰褐色粘質土、第6層灰褐色粘質土、第7層黄褐色粘質土（地山）、第8層茶褐色粘質土（地山）、第9層暗灰褐色粘質土（地山）、第10層灰黃褐色粘質土（地山）である。

遺構は、弥生時代から近現代の遺構で、土坑11基（T-F59・65・69・75・78・79・81・82）、溝14条（T-F21・24・63・64・65・68・70・71・80）、柱穴4基（T-F11・13）、性格不明遺構6基（T-F43・49・50・64・73）を検出し、遺物包含層を5か所（T-F67・68・72・77・82）で確認した。またT-F69付近には塚1基がある。

遺物は弥生土器（T-F7・10・12・29・49・55・56・66・83・85・86）、須恵器（T-F10・12・



第62図 C区トレーンチ測量図・土層図(3)

32・55・56・66・84)、土師器 (T-F 8・55・56・66・83)、陶磁器 (T-F 12・20・24・31・32・33・34・56・66・69・84)、瓦 (T-F 69)、石器片 (T-F 28・68) が出土している。

以上のことから、本調査地内には弥生時代から近現代に至る遺構や遺物が遺存し、集落関連遺構が存在していたことが判明した。

本調査地はT-F 56～58の東部及びT-F 66～79付近が地山を切除されることから遺構が破壊されるため、事前の本格調査を実施した。本書の「第4章 北梅本太尺寺遺跡」として報告する。

(7) G区（第81・82図）

調査地は北部をF区とH区に接し、東部には新池があり、北部には竹ヶ谷川が西流する。調査地の現況は水田耕作地及び畑地である。地形は東から西への緩傾斜地で、最大高低差は約3.3mを測る。

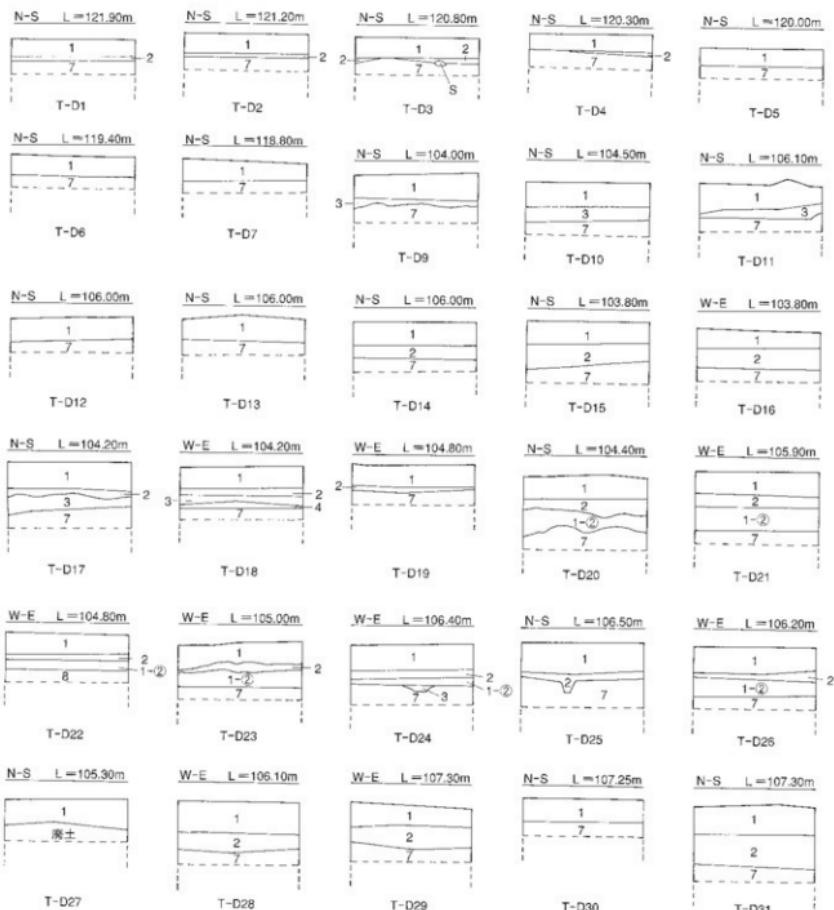
調査は立会人のもとに申請地を確認後、トレーンチは一区画に1本長さ11～25m、幅1mの長方形トレーンチを合計12本設定した。

基本層位は、第1層明灰色粘質土（耕作土）、第2層黄色粘質土（床土）、第3層灰色粘質土、第4



第63図 D区 トレンチ配置図

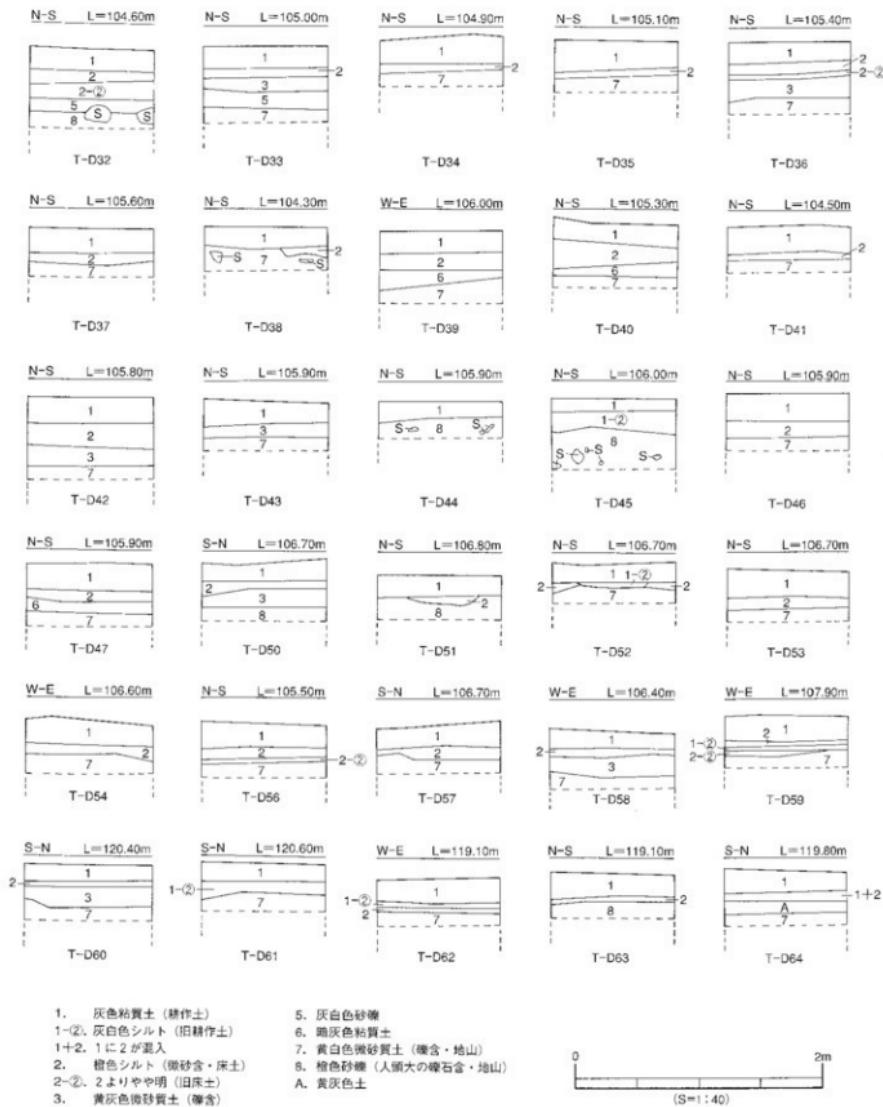
A～H区の試掘調査



1. 灰色粘質土(耕作土)
- 1-②.灰白色シルト(旧耕作土)
2. 暗褐色シルト(微砂含・底土)
3. 黄灰色微砂質土(穂含)
4. 黄白色微砂質土(穂含・地山)
8. 橙色砂礫(人頭大の礫石含・地山)

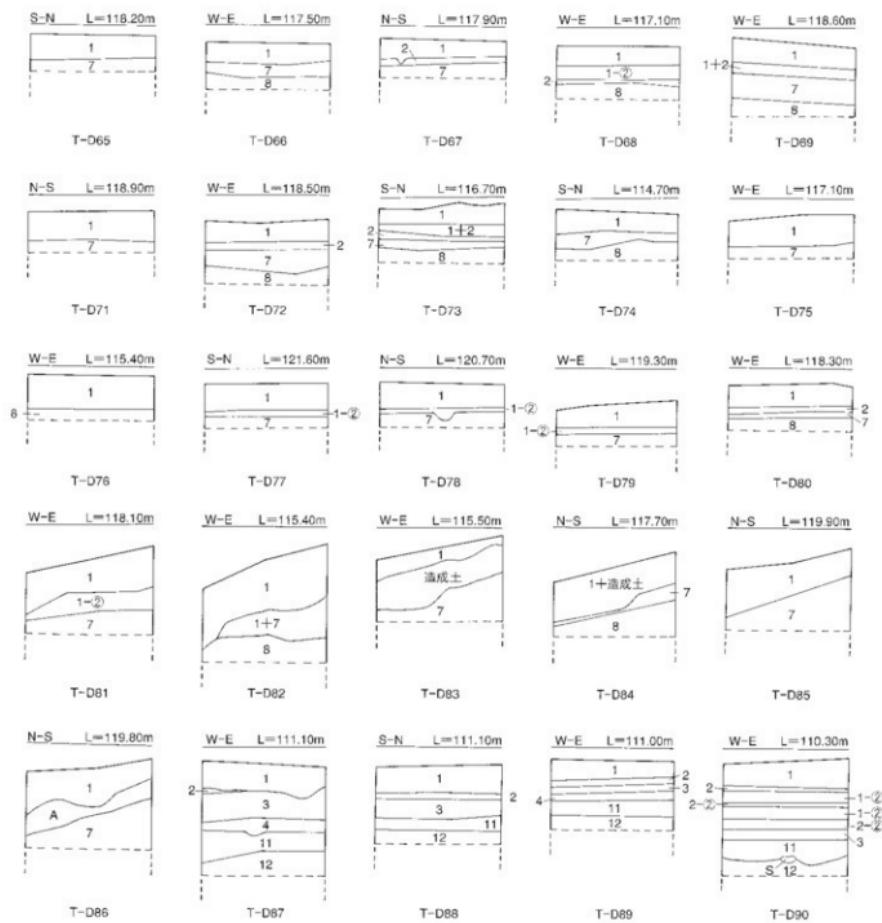


第64図 D区柱状土層図(1)



第65図 D区柱状土層図(2)

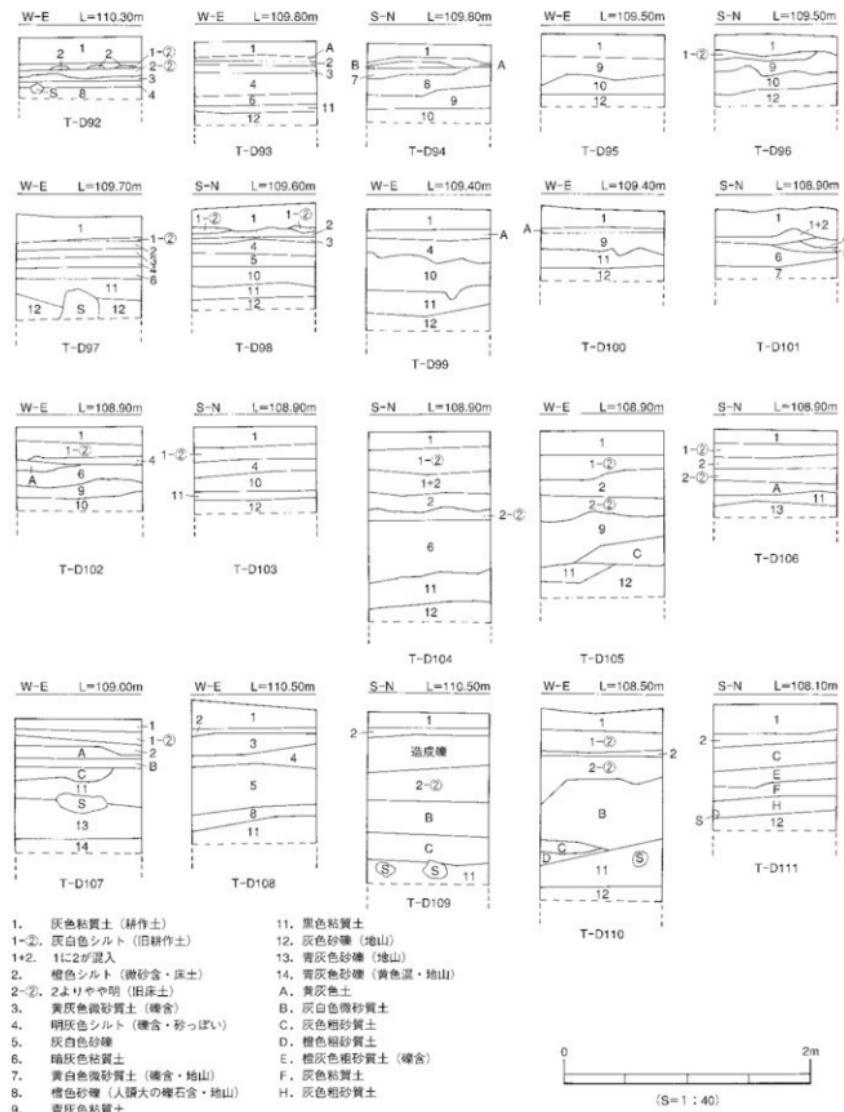
A～H区の試掘調査



1. 灰色粘質土(耕作土)
- 1-2. 灰白色シルト(旧耕作土)
- 1+造成土. 1に造成土が混入
- 1+2. 1に2が混入
- 1+7. 1に7が混入
2. 橙色シルト(鐵砂土・床土)
- 2よりやや明(旧底土)
3. 黄灰色微砂質土(礫含)
4. 明灰色シルト(礫含・砂っぽい)
7. 黄白色微砂質土(礫含・地山)
8. 棕色砂礫(人頭大的礫石含・地山)
11. 黑色粘質土
12. 黄色砂礫(地山)
- A. 黄灰色土

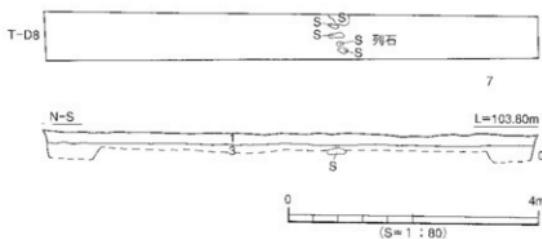
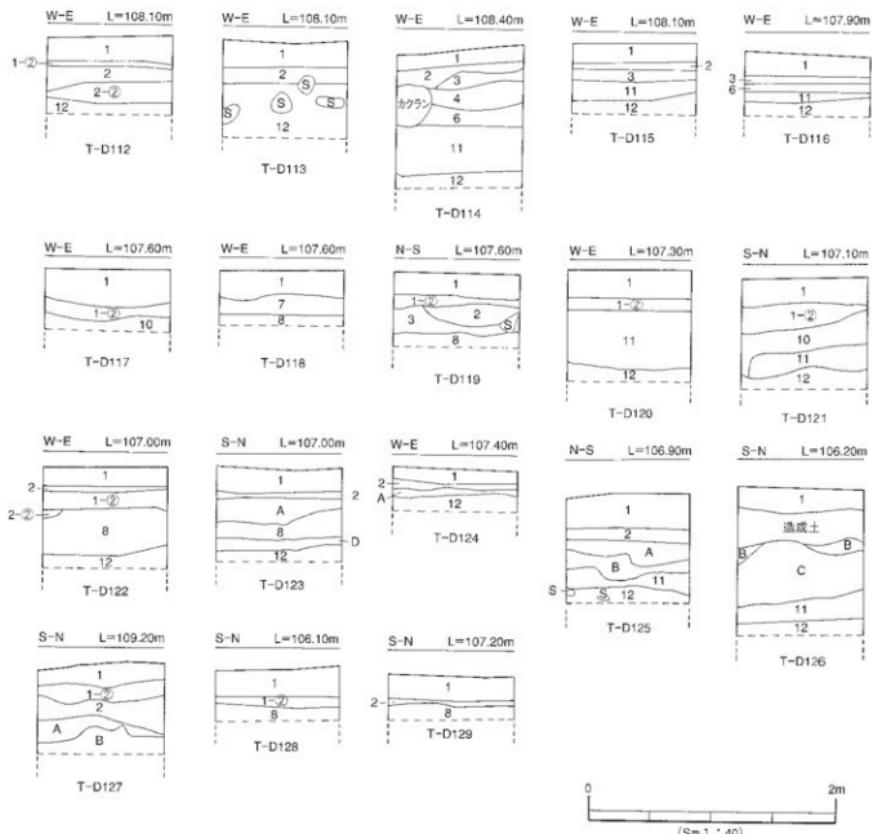
0 2m
(S=1:40)

第66図 D区柱状土層図(3)



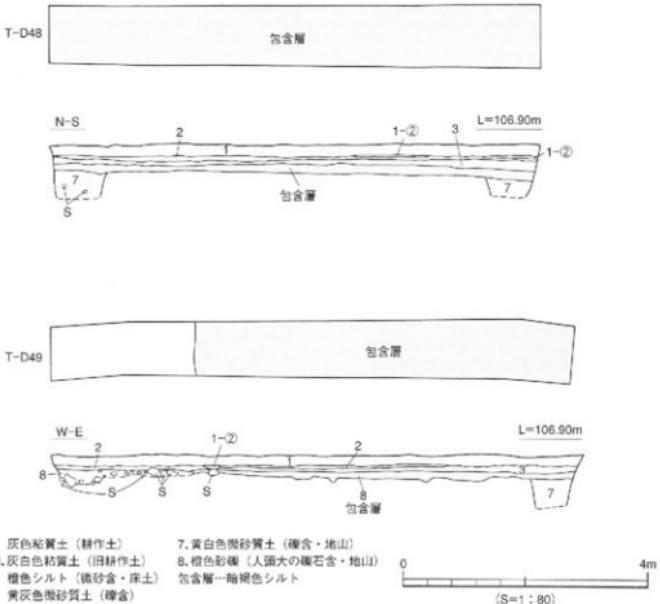
第67圖 D区柱状土層圖(4)

A～H区の試掘調査



1. 灰色粘質土（耕作土）
- 1-②. 灰白色シルト（旧耕作土）
2. 棕色シルト（砂質土・堆土）
- 2-②. 2よりやや明（旧堆土）
3. 灰色微砂質土（礫含）
4. 明灰色シルト（礫含・砂っぽい）
6. 雪灰色粘質土
7. 雪白色微砂質土（礫含・地山）
8. 棕色砂礫（人頭大の礫石含・地山）
10. 青灰色微砂質土
11. 黑色粘質土
12. 灰色砂礫（地山）
- A. 黄灰色土
- B. 褐白色微砂質土
- C. 灰色粗砂質土
- D. 棕色粗砂質土

第68図 D区柱状土層図(5)・トレンチ測量図・土層図(1)



第69図 D区トレンチ測量図・土層図(2)

層灰黄色粘質土、第5層浅黄色粘質土、第6層褐灰色粘質土、第7層暗灰色粘質土、第8層黄灰色粘質土、第9層灰褐色粘質土、第10層黄白色粘質土（地山）である。

調査の結果、造構・遺物ともに検出されなかった。

(8) H区（第83・84図）

調査地はF区とG区の間にあり、扇状地状に開けた水田耕作地及び畑地である。トレーニングの掘削により作物への影響があると考えられる場所については調査が実施できない部分があった。

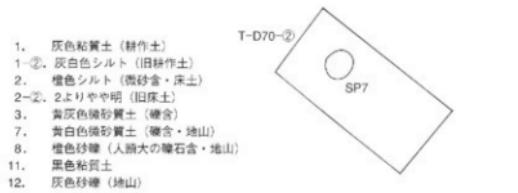
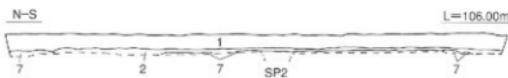
調査は立会人のもとに申請地を確認後、一区画に1本の長さ1~2m、幅30~50cmの長方形トレーニングを合計13本設定した。

基本層位は、第1層灰茶褐色粘質土（耕作土）、第2層暗茶褐色粘質土（床土）、第3層明黄褐色粘質土、第4層淡灰色粘質土、第5層淡灰茶褐色粘質土、第6層淡灰白色粘質土、第7層淡灰褐色粘質土、第8層灰色粘質土、第9層黄白色粘質土、第10層暗灰色粘質土（地山）である。

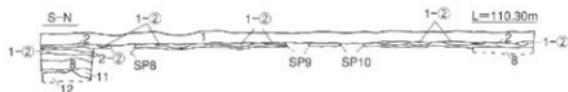
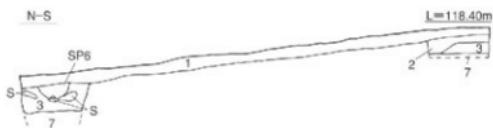
造構は、土坑10基（T-H 1・2・6・10・12）、柱穴5基（T-H 6・12）を検出した。

遺物は土師器（T-H 6・8）や木杭（T-H 9・11・13）が出土している。

A～H区の試掘調査

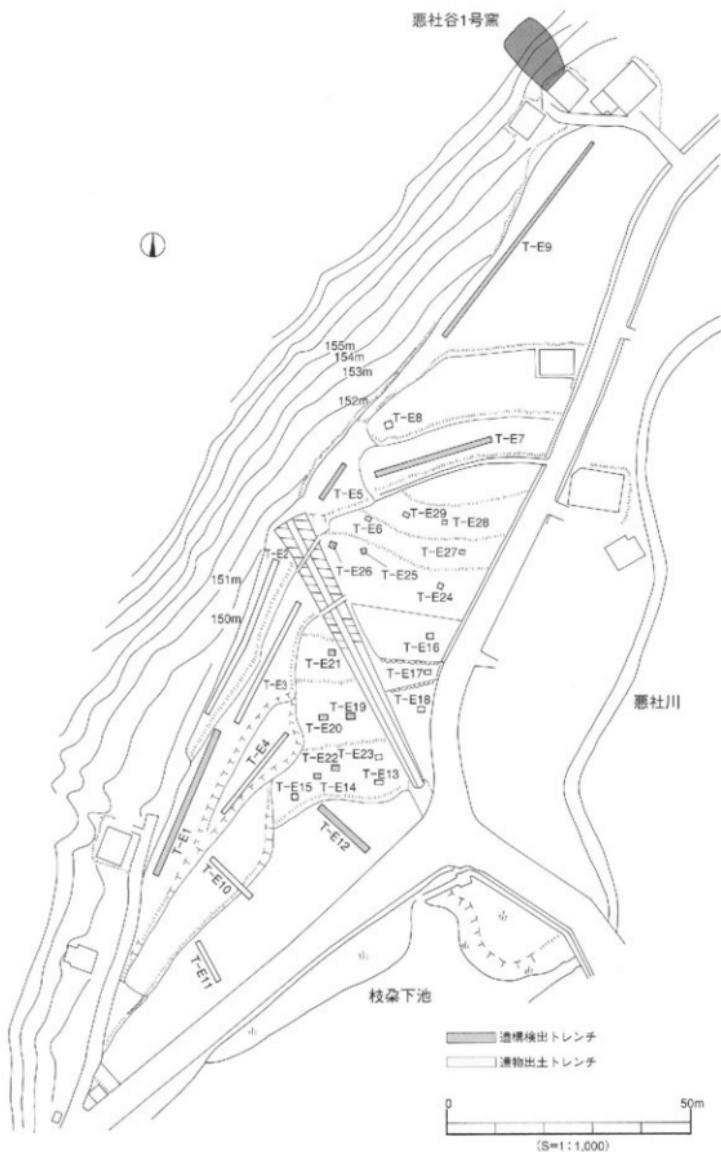


SP1～4…暗褐色シルト
SP5～7…3+褐色土
SP8～10…灰色砂質土



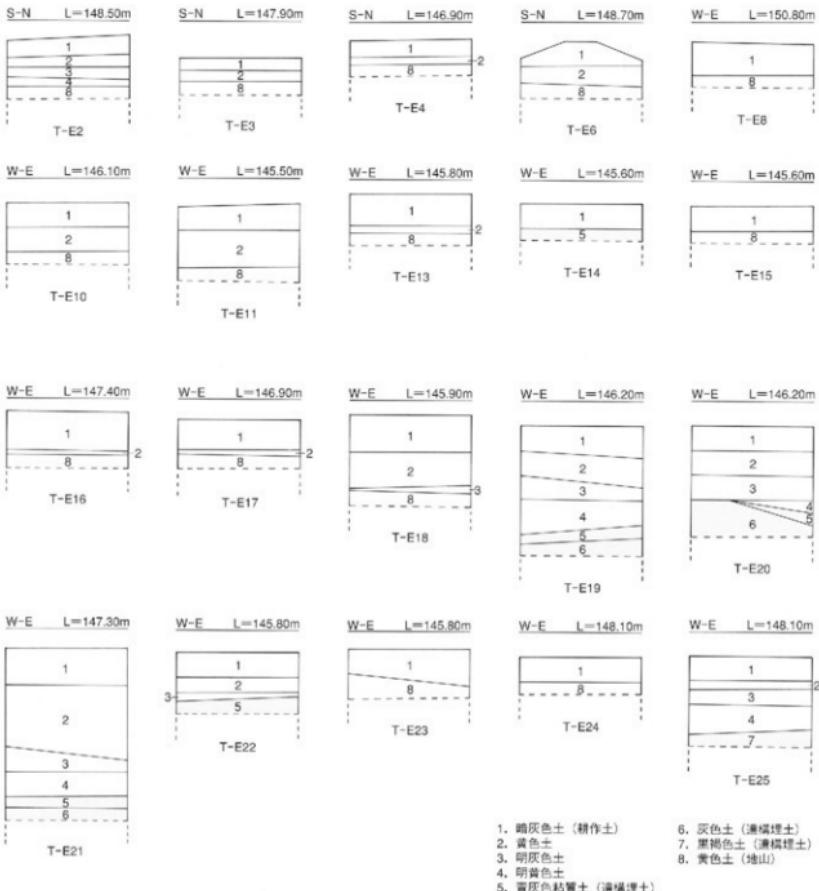
0 4m
(S=1:80)

第70図 D区トレーン測量図・土層図(3)

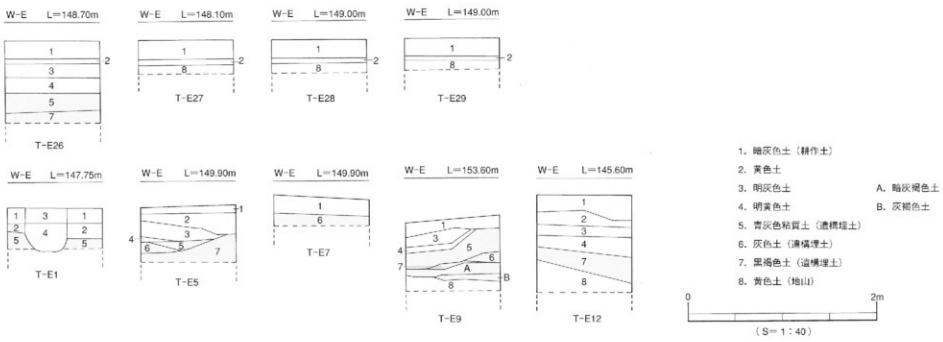


第71図 E区トレンチ配置図

A～H区の試掘調査



第72図 E区柱状土層図(1)

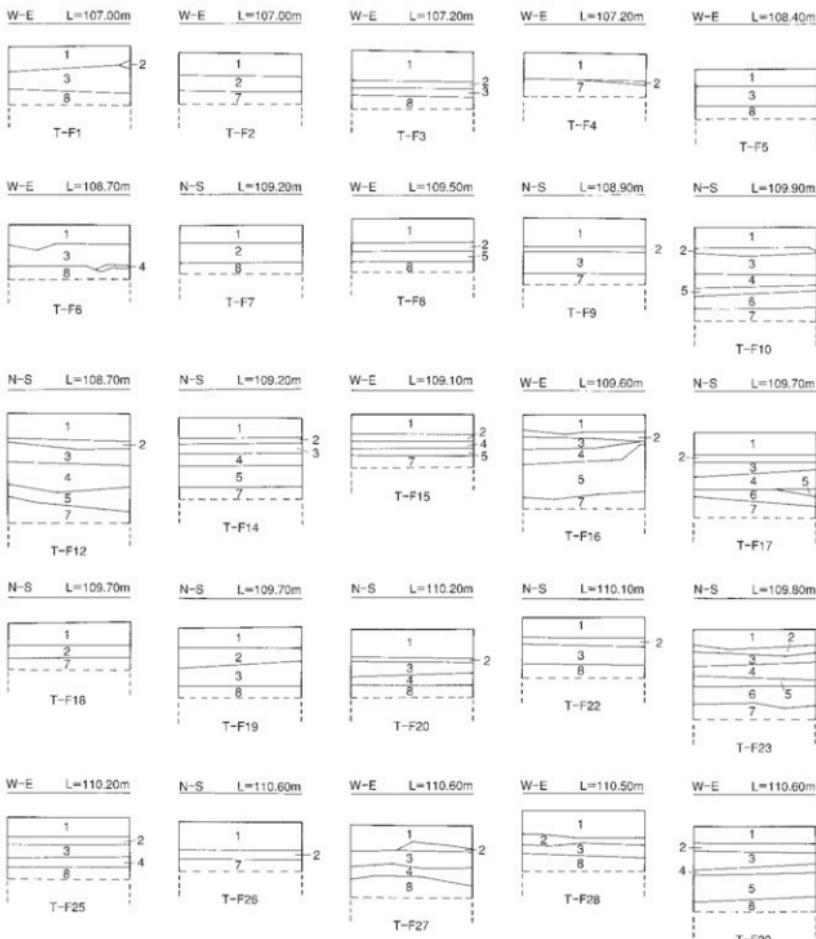


第73図 E区柱状土層図(2)・トレンチ測量図・土層図

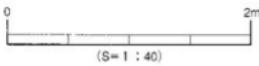


第74図 F区 トレンチ配置図

A～H区の試掘調査

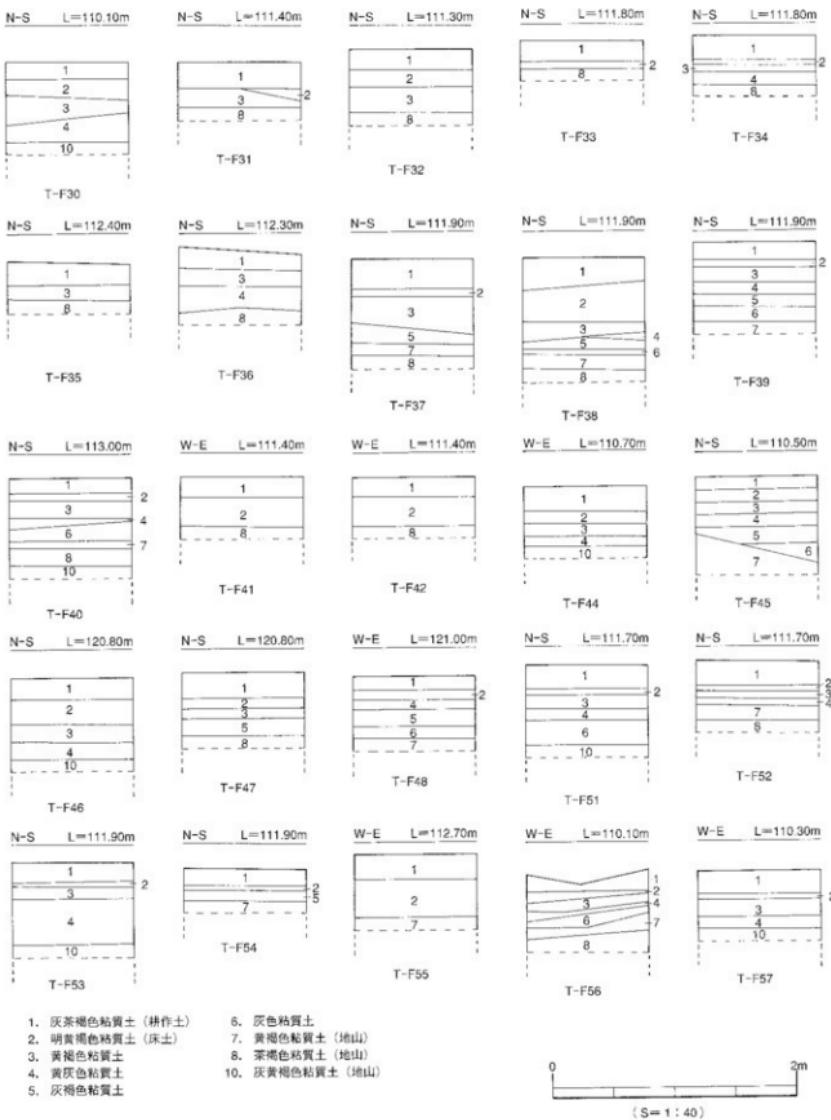


1. 深茶褐色粘質土 (耕作土)
2. 明茶褐色粘質土 (床土)
3. 黄褐色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰粘質土
7. 黄褐色粘質土 (地山)
8. 茶褐色粘質土 (地山)



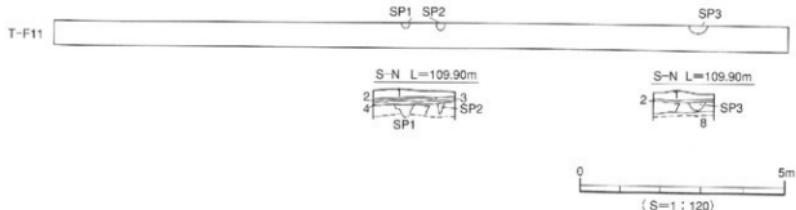
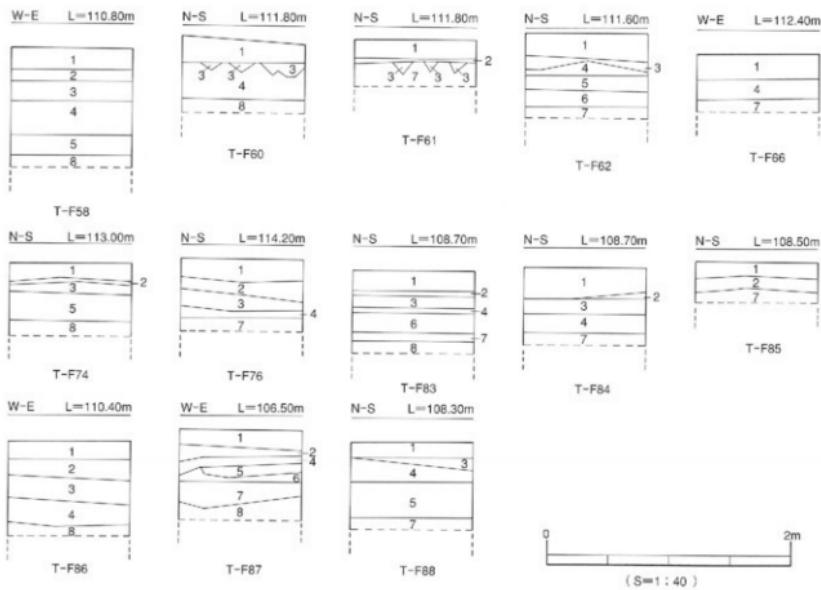
第75図 F区柱状土層図(1)

層位・造構と遺物

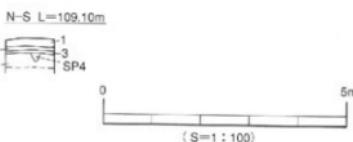


第76図 F区柱状土層図(2)

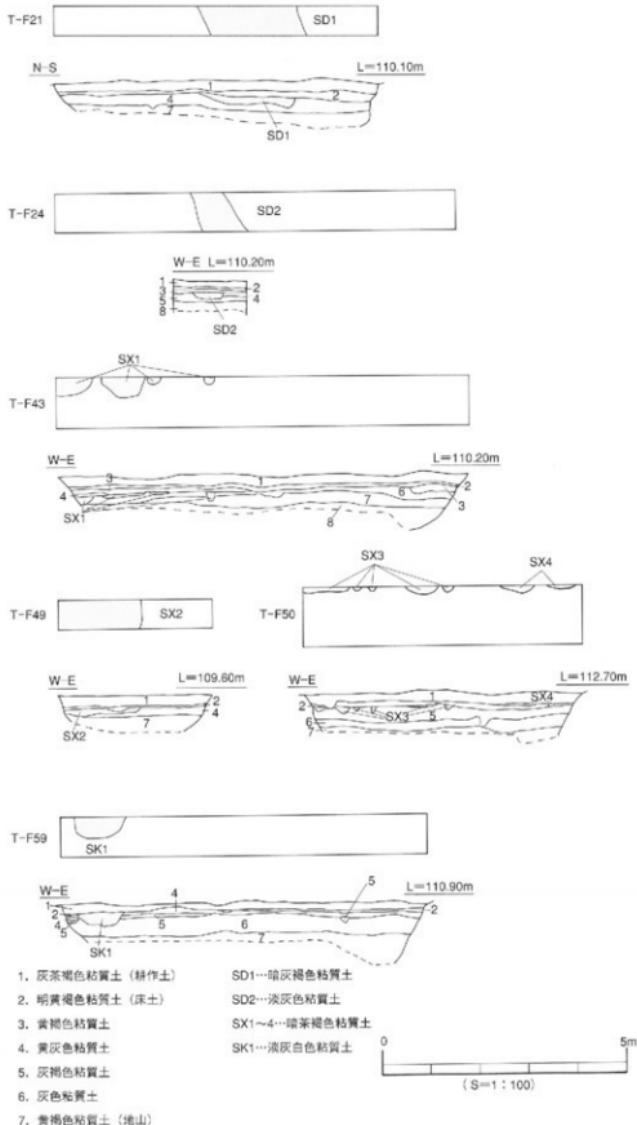
A～H区の試掘調査



1. 灰茶褐色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 黄褐色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土
7. 黄褐色粘質土（地山）
8. 茶褐色粘質土（地山）

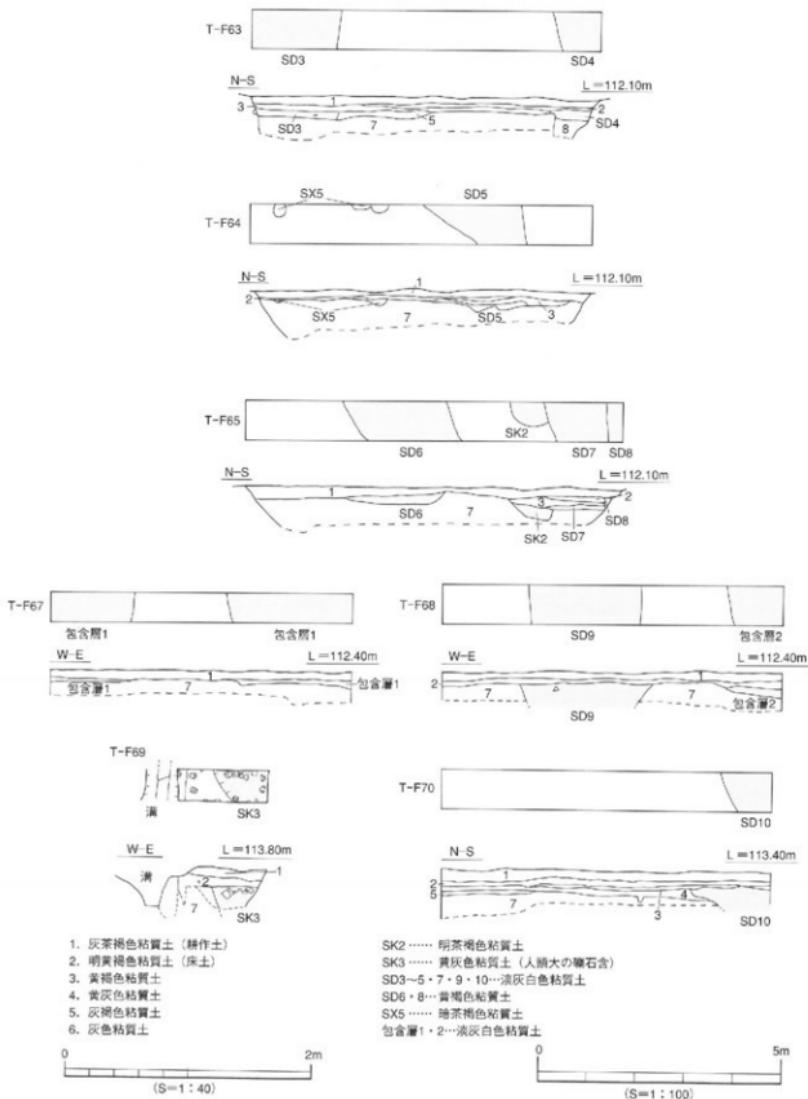


第77図 F区柱状土層図(3)・トレンチ測量図・土層図(1)

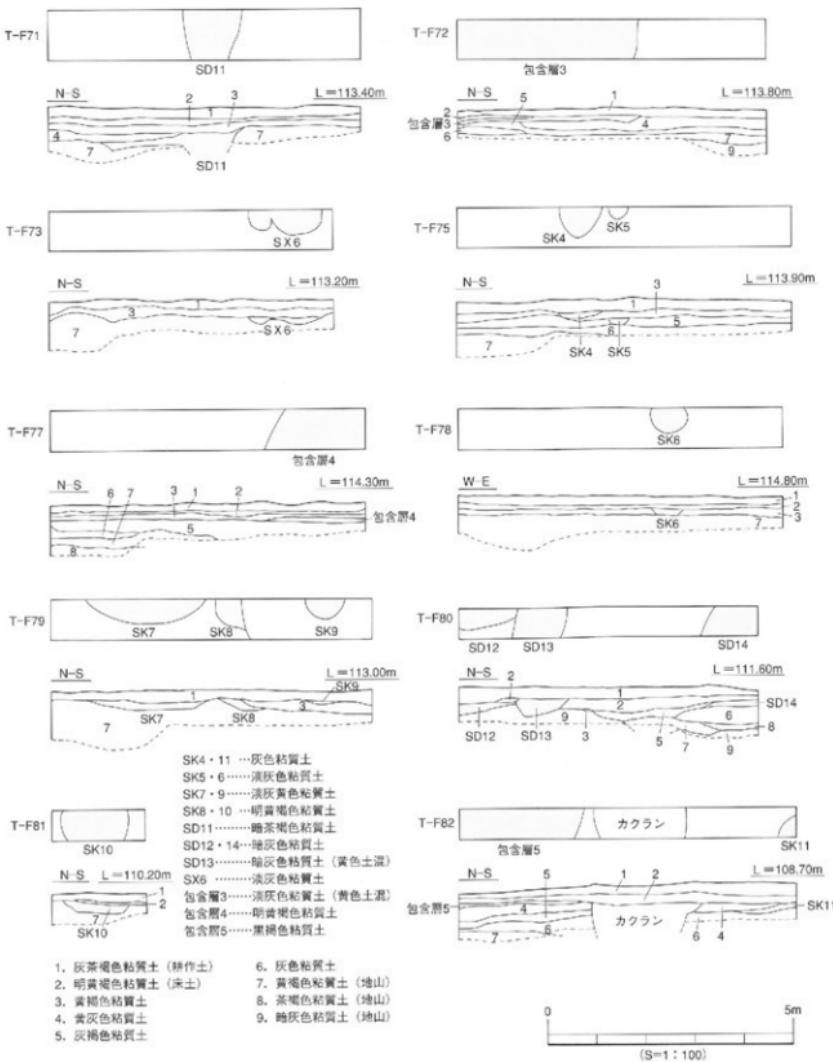


第78図 F区トレンチ測量図・土層図(2)

A～H区の試掘調査

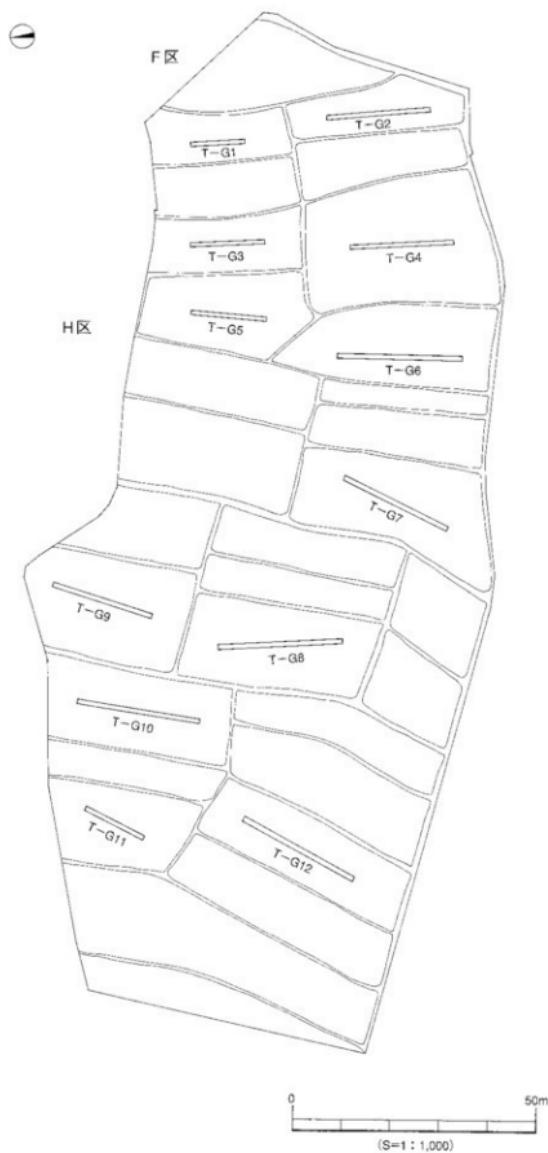


第79図 F区トレンチ測量図・土層図(3)

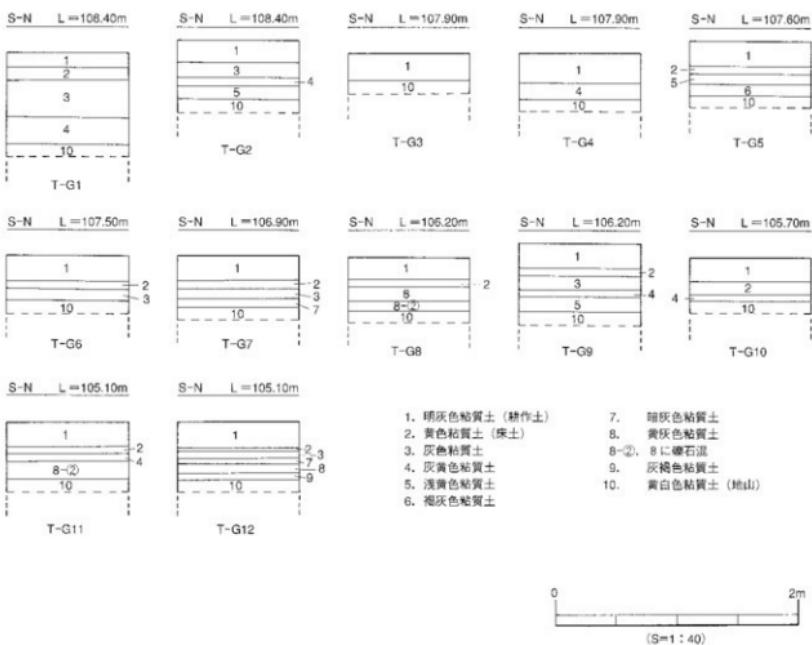


第80図 F区トレンチ測量図・土層図(4)

A～H区の試掘調査



第81図 G区トレンチ配置図



第82図 G区柱状土層図

出土した土師器の形態から、本調査地内には中世以降の集落関連遺構が存在していたことが判明した。また木杭が出土したことから水田に伴う堰や取水口などの可能性が考えられる。これらの遺構と遺物を検出した地点については、盛り土を施して遺構が保存されることとなった。

3. 小 結

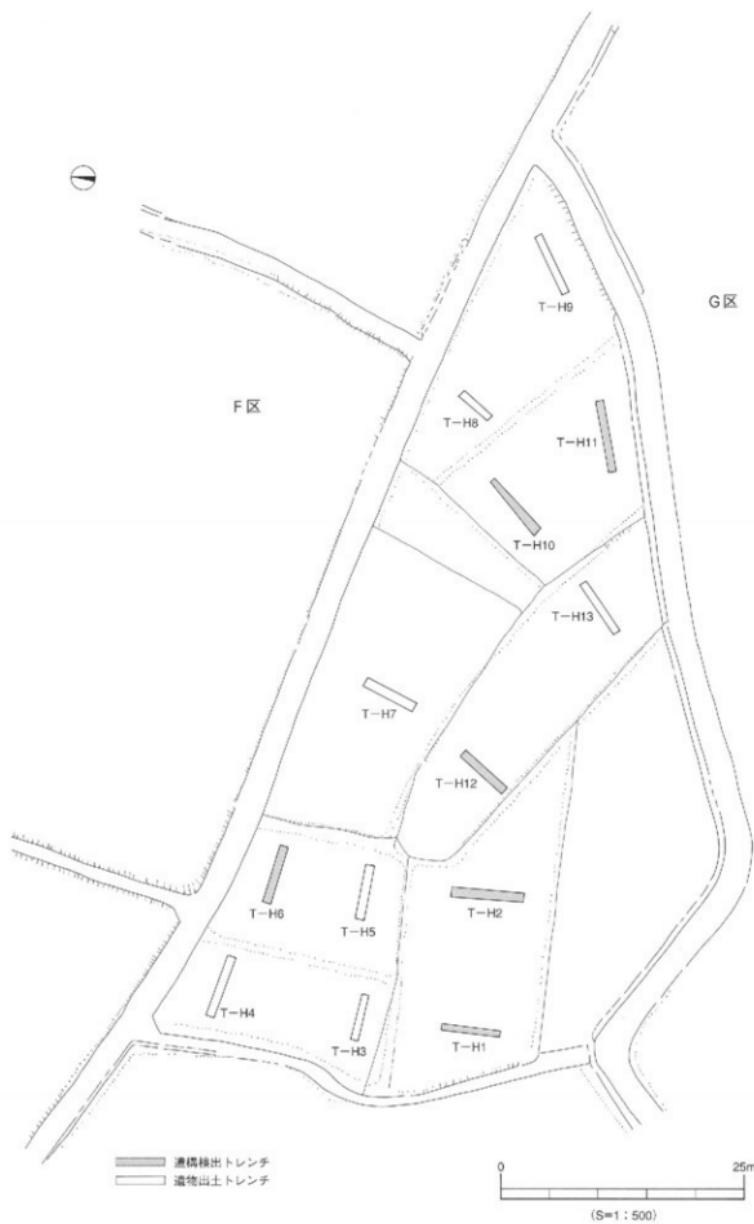
A～H区における試掘調査の結果を報告した。A・B・G区においては遺構・遺物ともに検出されなかった。

C区では溝1条、柱穴5基のほか遺物包含層を2か所で確認した。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石器片がある。溝と柱穴は中世以降と考えられ、遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。以上のことから、弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。

D区では柱穴10基、石列のほか遺物包含層がある。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石器片がある。柱穴は中世以降と考えられ、遺物包含層は弥生時代または古墳時代と考えられる。以上のことから、弥生・古墳時代及び中世以降の集落関連遺構の存在が推定される。

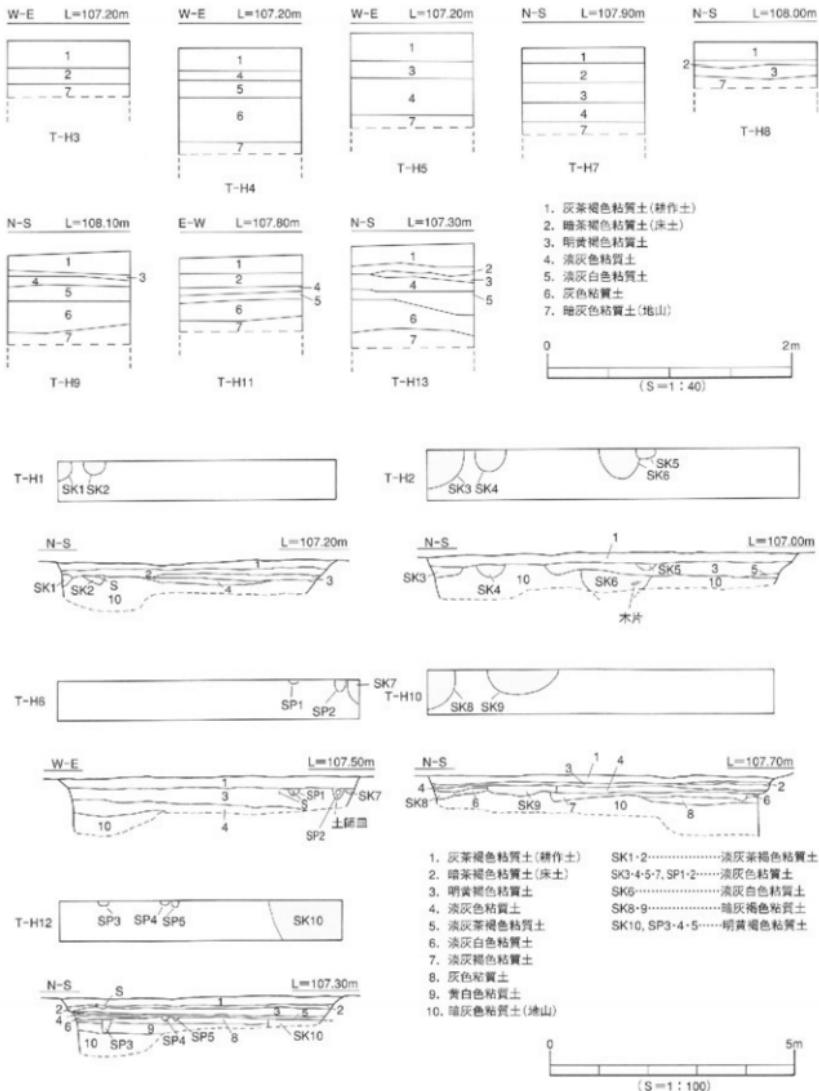
E区では須恵器窯の灰原1か所、土坑3基、溝12条がある。遺物は須恵器、土師器、陶磁器、窯壁、石器片がある。以上のことから、古墳時代から中・近世に至る須恵器生産関連遺構や集落関連遺構の存在が推定される。

A～H区の試掘調査



第83図 H区 トレンチ配置図

層位・構造と遺物



第84図 H区柱状土層図・トレンチ測量図・土層図

F区では土坑11基、溝14条、柱穴4基、塚1基、性格不明遺構6基のほか遺物包含層を5か所で確認した。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦、石器片がある。以上のことから、弥生時代から近現代に至る集落関連遺構が存在していたことが判明した。

H区では土坑10基と柱穴5基がある。遺物は土師器と木杭がある。以上のことから、中世以降の集落関連遺構が存在していたことが判明した。また木杭が出土したことから水田に伴う堰や取水口などの可能性が考えられる。

以上のうち、D区の悪社川より西部・E区・F区東部は工事により遺構が消滅してしまうため、弥生時代から近現代に至る集落関連遺構や須恵器の生産関連遺構について記録保存を行うため緊急調査を実施した。その他のC区全域、D区の悪社川より東部、F区の西部から中央部、H区全域については遺構が盛り土保存されている。

第6章 自然科学分析

—松山市北梅本悪社谷遺跡2次調査地における樹種同定—

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、2区SR2から出土した木材片6点である。

2. 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

結果を表39に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表39 北梅本悪社谷遺跡2次調査地における樹種同定結果

地 区	遺 構	試 料 No	分類群(和名)	分類群(学名)
2 区	S R 2	No 1	マツ属複雜管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
2 区	S R 2	No 2	マツ属複雜管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
2 区	S R 2	No 3	マツ属複雜管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
2 区	S R 2	No 4	マツ属複雜管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>
2 区	S R 2	No 5	散孔材	diffuse-porous wood
2 区	S R 2	No 6	マツ属複雜管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>

a. マツ属複雜管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 (第85図)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

b. 散孔材 diffuse-porous wood (第85図)

横断面：小型の道管が2～3個複合しながら散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～8細胞幅である。輪方向柔細胞が層階状に配列する。

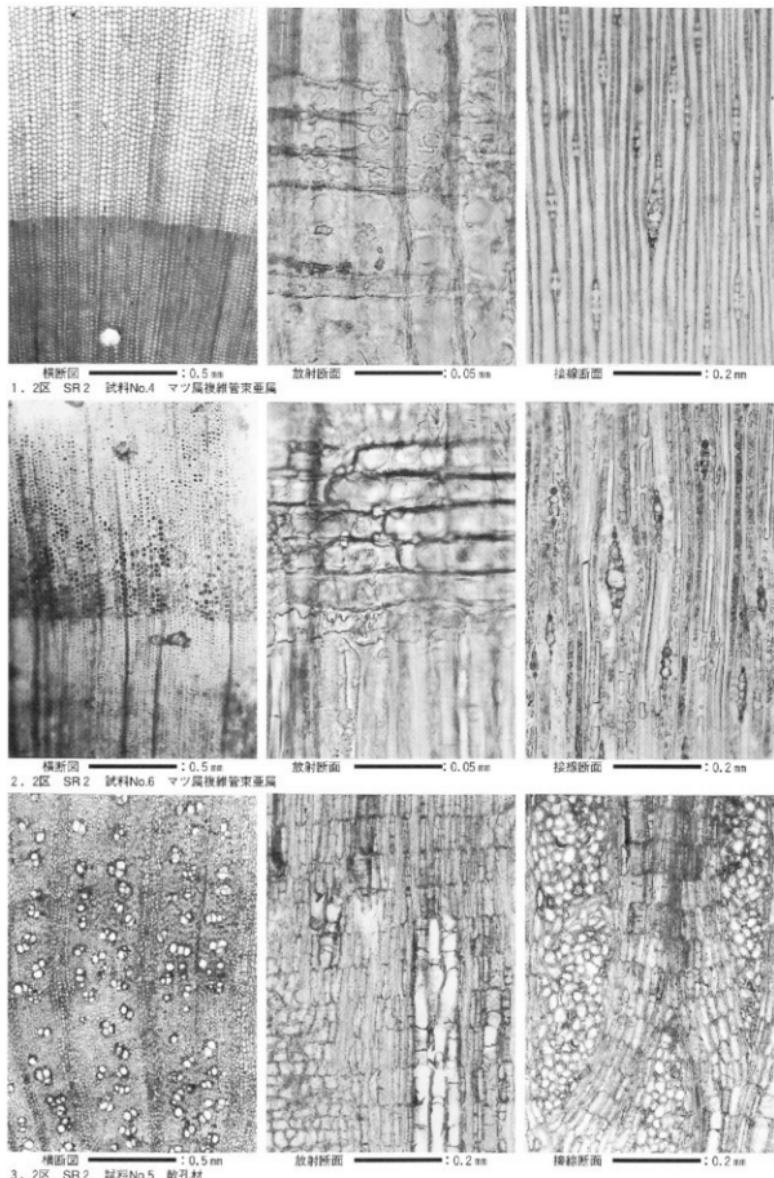
以上の形質より散孔材に同定されるが、属レベルの同定は困難である。

4. 考察

分析の結果、マツ属複維管束亞属 5 点、散孔材 1 点が同定された。マツ属複維管束亞属には、二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがあり、いずれも水湿によく耐える材である。マツ類の木材はいずれも樹脂を多く含み、現在においても窯業に好んで用いられる。本遺跡の周辺では 8 世紀の窯跡が確認されていることから、窯業との関連が示唆される。

〔文献〕

- 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
鳥地 謙・伊東 隆夫 (1968) 日本の遺跡出土木製品総観、雄山閣、p.296



第85図 2区SR2出土木材の顕微鏡写真

第7章 調査の成果と課題

本書では、北梅本町における北梅本悪社谷遺跡2次調査地・北梅本北池遺跡・北梅本太尺寺遺跡の調査とA～H区の試掘調査について報告を行った。ここでは、時代ごとに周辺地域の遺跡を含めた調査成果と今後の課題をあげ、まとめとする。

1. 弥生時代

北梅本北池遺跡で土坑2基・溝1条・柱穴5基・性格不明遺構2基を検出した。このうち重要な遺構として前期のSK10・中期のSX1とSX2があげられる。SK10は不明確な掘り方の楕円形土坑で、弥生時代前期の菱形土器と石器が出土した。小野地区における最古の遺構である古市遺跡2次調査地B地区的SK2とともに、縄文時代晚期以降に人々が定着はじめたことを示す貴重な資料である。SX1とSX2は検出状況から中期の遺物包含層と考えられる。同様に北梅本太尺寺遺跡2区B・Cでもまた弥生時代の遺物包含層（第VI層）を検出している。出土した土器や石器から周辺地域に弥生時代の集落が存在した可能性が考えられる。

2. 古墳時代

北梅本北池遺跡で流路1条と溝2条を検出した。SR1の規模は検出長45.0m、上場幅10.4～16.2m、深さ80cmを測る大規模な流路で、埋土の状況から現在の悪社川と同様に、北から南へ谷を下る河川であったと考えられる。SD4とSD2は埋土がほぼ同じで、同一方向であることから同時期に集落を区画する目的で使用されていたと考えられる。

北梅本太尺寺遺跡では明確な遺構の検出には至っていないが、2区で表探した遺物に須恵器があることから周辺地域での集落や古墳の存在が考えられる。

本調査地南西には下刈屋遺跡1～3次調査地があり、松山平野東部古窯址群（生産地）と米住・久米地区など（消費地）とを結ぶ中継地点や集積地との評価がされている。本調査によってその根拠を示すような遺構や遺物は確認できなかったが、潮見山南窯址や小野谷駄馬窯址で出土した須恵器には内面の同心円文のあて具痕が特徴的なものがあるため、今後は須恵器の形態やヘラ記号だけではなく、あて具痕などの別視点からの検討によって須恵器の出自が明らかになるとを考えられる。

3. 古代

北梅本悪社谷遺跡2次調査地で流路2条、土坑1基、溝1条、性格不明遺構2基がある。これらの遺構は8世紀初頭～中葉の遺構であるが、特に注目に値するのはSX1とSX2である。SX2は悪社谷1号窯の灰原の可能性があり、SX1もまた灰原の可能性があることから、調査区外の北部斜面に未確認の窯の存在を示すものである。本調査においては窯本体の調査を行うことができなかつたが、今回の成果は今後の調査研究の一助になるものと思われる。

4. 近現代

3遺跡で土坑や溝を検出した。この地区が集落として機能していたことを示す貴重な資料である。

以上のように、弥生時代から近現代に至る生産関連遺構や集落関連遺構を検出することができた。本調査地周辺はこれまで松山平野東部古窯址群として多くの窯址や古墳が存在することで知られていた。今後の発掘調査の進展によって、窯址・集落・古墳の関係や須恵器の移動に伴う生産地・中継地点・消費地の関係などもより一層明らかになるものと思われる。

附章 松山平野東部古窯址群・伊予市三秋窯址の採集資料

1. はじめに

ここでは松山市北梅本町に所在する松山平野東部古窯址群のうち潮見山南窯址、駄馬姥ヶ懐2号窯址、枝栄下池3号窯址、悪社谷2号窯址、悪社谷1号窯址と伊予市三秋窯址^(註1)の計6窯址の採集資料を提示する。駄馬姥ヶ懐2号窯址は1989年頃に池田學氏、伊予市三秋窯址は1992年頃に長井數秋氏、その他は1999年に山本健一と山之内が中心に採集したものである。

以下、6窯址についての概要と資料の実測図を掲載し、その特徴を略記する。なお、池田氏と長井氏が採集した資料は、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが譲り受け、保管している。

2. 窯址の概要と採集資料

(1) 伊予市三秋窯址 (第86図)

所在地 伊予市三秋

立 地 三秋川中流の小開析谷北東斜面

標高約50m

遺 構 焼土面を確認。遺物と窯壁片が多数散布する。

遺 物 (第87・88図)

須恵器（1～23）器種には坏蓋、蓋、坏身、高坏、壺、甕、器台がある。1～8は坏蓋である。小片のため天井部の形態が判別しにくいが、4はやや丸みをもった天井部、7は平坦な天井部である。5は天井部と口縁部との境の直上に一条の沈線を巡らす。いずれも口縁部は内傾する。9は短頸壺の蓋である。天井部と口縁部との境に稜をもたない。10～13は坏身である。10はたちあがりは内傾気味に伸び、端部は直立する。14～16は高坏である。14は受部～脚部、15・16は脚部である。いずれも短脚一段透かしを穿つ。17は壺である。口縁部直下に2条の凸帯が巡る。18～21は甕である。18・19は端部を丸くおさめる。20は下方に下垂させる。21の端部は「コ」の字状を呈し、上下に拡張する。22・23は器台である。22は受部である。2条の凸帯間に波状文を施す。23は脚部である。透かし孔の下位に2条の沈線を施す。

瓦 (24) 平瓦である。褚巻き作りにより製作されている。凸面には繩縄叩きを施し、凹面には布目痕を残す。

石製品 (25) 石鍋である。口縁部直下に削り出しの鈎が巡るもので、口縁部は内湾する

(2) 潮見山南窯址 (第89図)

所在地 松山市北梅本町

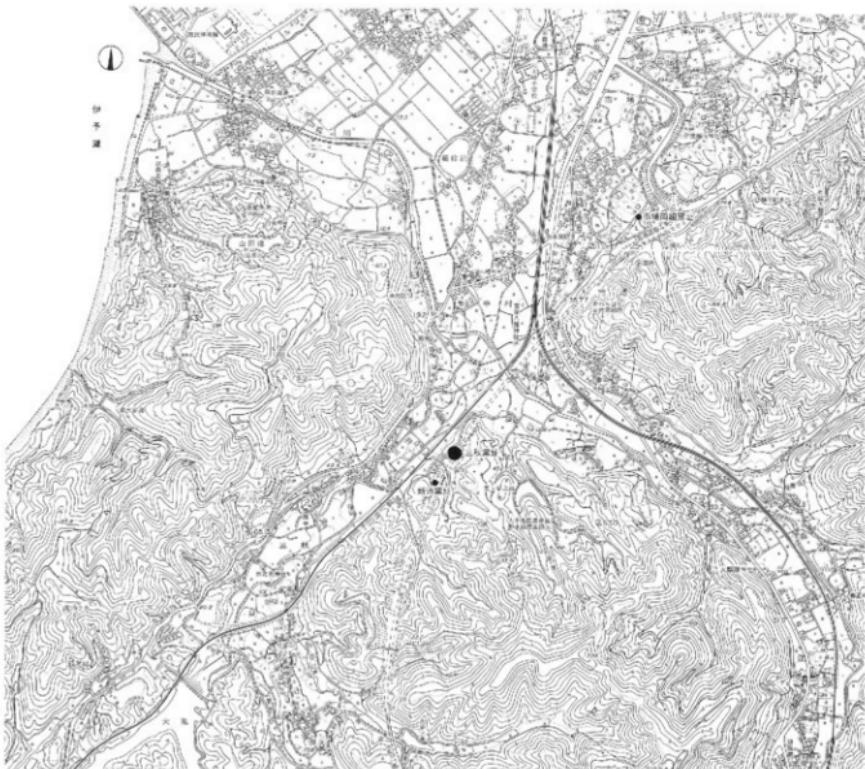
立 地 潮見山の南に開口する谷の東側

海拔108～124m

遺 構 未確認、遺物が多数散布する。

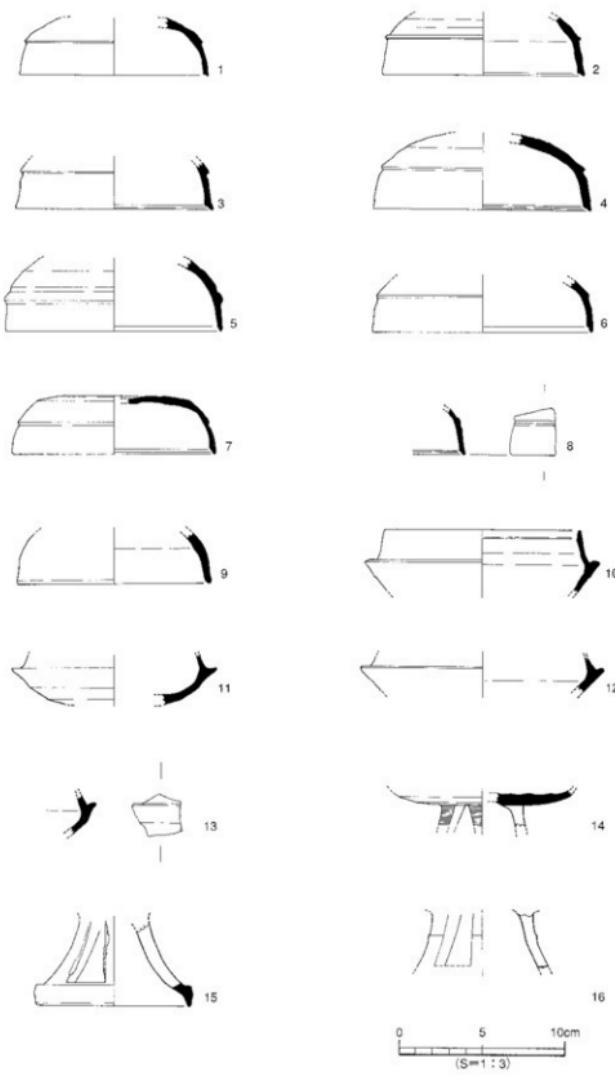
遺 物 (第91～93図)

須恵器 (26～67) 器種には坏蓋、蓋、坏身、高坏、甕、壺、壺、甕、瓶、壺がある。26は坏蓋である。

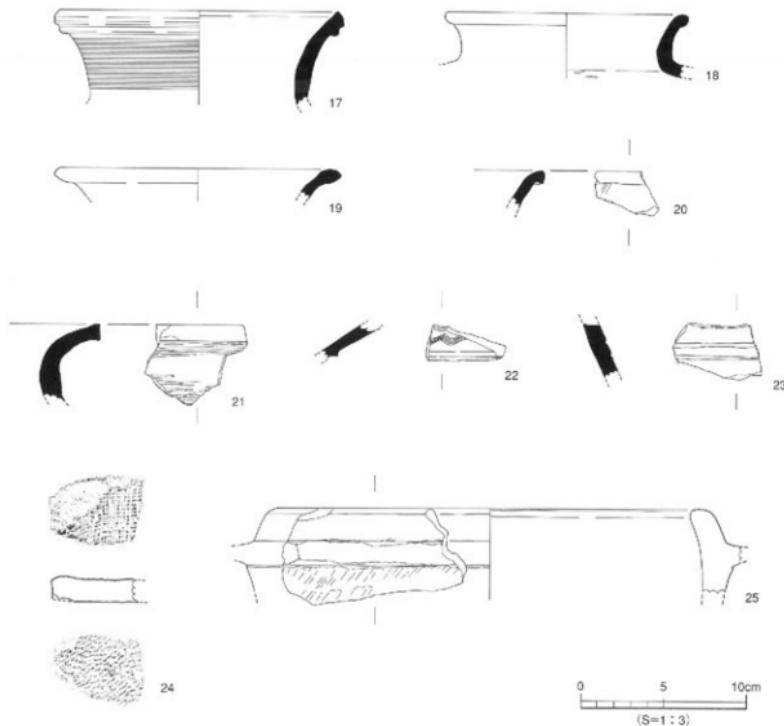


第86図 伊予市三秋窯址位置図 (S = 1 : 20,000)

天井部と口縁部の間に稜をもつ。口縁端部は丸くおさめる。27~31は短頸壺の蓋である。天井部と口縁部の間に鈍い段をもつ。口縁端部は内傾し面をなす。32~47は坏身である。受部は水平または上方に伸び、立ち上がりは短く内傾する。48~57は高坏である。48は受部、49~53は柱部、54~57は脚部片である。49~52は長脚二段透かし、54~55は短脚一段透かしを穿つ。58は臆である。ラッパ状に大きく開く口縁部片である。突宍より上位は内湾気味に広がる。59は塊である。胴部下位に2条の沈線を施す。60~64は壺である。60は長頸壺の体部片である。体部上面にヘラ記号と思われる線刻が施される。61は脚付き壺の脚部である。柱部と脚部との間に一条の沈線を施す。62は短頸壺である。口縁部は短く直立する。63の口縁部は短く直立したのち外反し、端部は尖り気味に丸くおさめる。64の口縁部は短く外反し、やや肥厚する。65は横瓶の体部片である。66は提瓶の口縁部片である。67は甕の口縁部である。口縁部外面に刺突列点文を施す。



第87図 伊予市三秋塚址採集資料実測図(1)



第88図 伊予市三秋窯址採集資料実測図(2)

(3) 駄馬姥ヶ懐2号窯址 (第90図)

所在地 松山市北梅本町

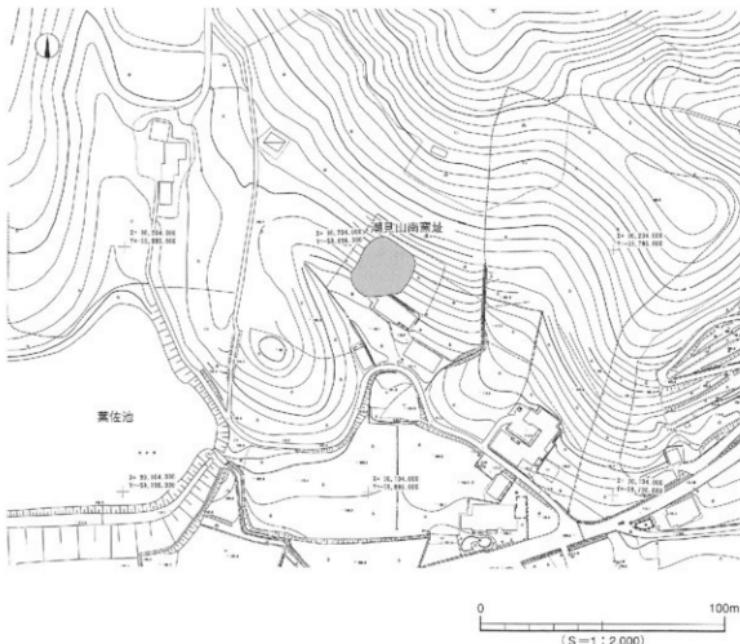
立 地 小野川上流の小開析谷南斜面

海拔145m

遺 構 未確認

遺 物 (第94図)

須恵器(68~76) 器種には壺蓋、蓋、壺、壺がある。68・69は壺蓋である。口縁部は短く屈曲する。70は短頸壺の蓋である。天井部は平らでつまみを付した痕跡が残る。71~74は壺である。71~73は外反気味に立ち上がり、端部は内面に一条の凹線を巡らす。74は高台付壺である。口縁端部は尖り氣味となる。75・76は壺である。口縁端部は「コ」の字状を呈し、わずかに上下方に拡張する。



第89図 松山平野東部古窯址群位置図(1)

(4) 枝栄下池 3号窯址 (第90図)

所在地 松山市北梅本町

立地 現在は枝栄下池北岸に位置するが、本来は悪社川西岸に位置する低丘陵の突端部
海拔142m

遺構 灰原と推測される焼面

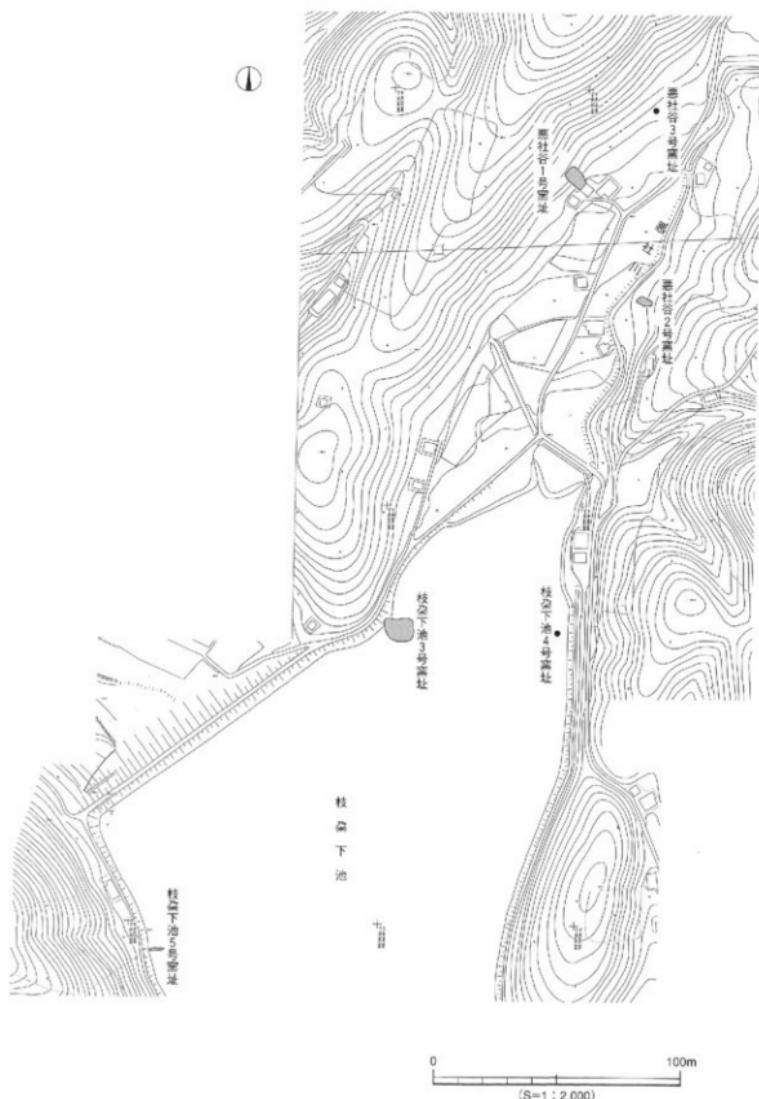
遺物 (第95図)

須恵器 (77~83) 器種には壺蓋、壺、皿、臺がある。77は壺蓋である。口縁部は短く屈曲し、外面に面をもつ。78は壺である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。79は高台付壺である。80は皿である。口縁部は短く外反し、端部は尖り気味におさめる。81~83は臺である。口縁端部はナデ凹み、上下方に拡張する。83の上端は面をなす。

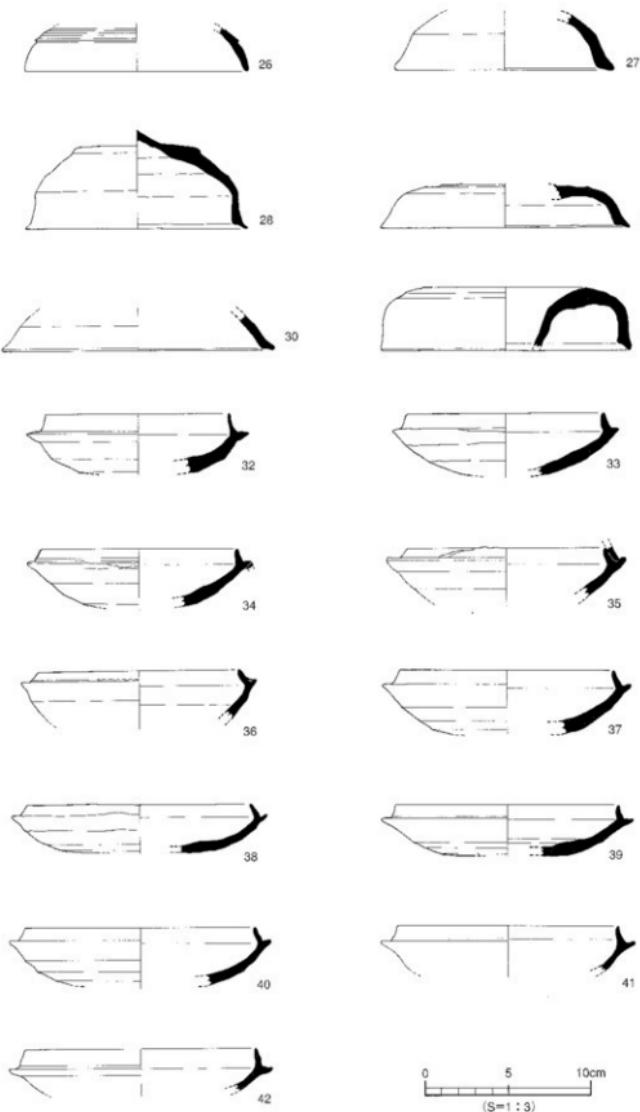
(5) 悪社谷 2号窯址 (第90図)

所在地 松山市北梅本町

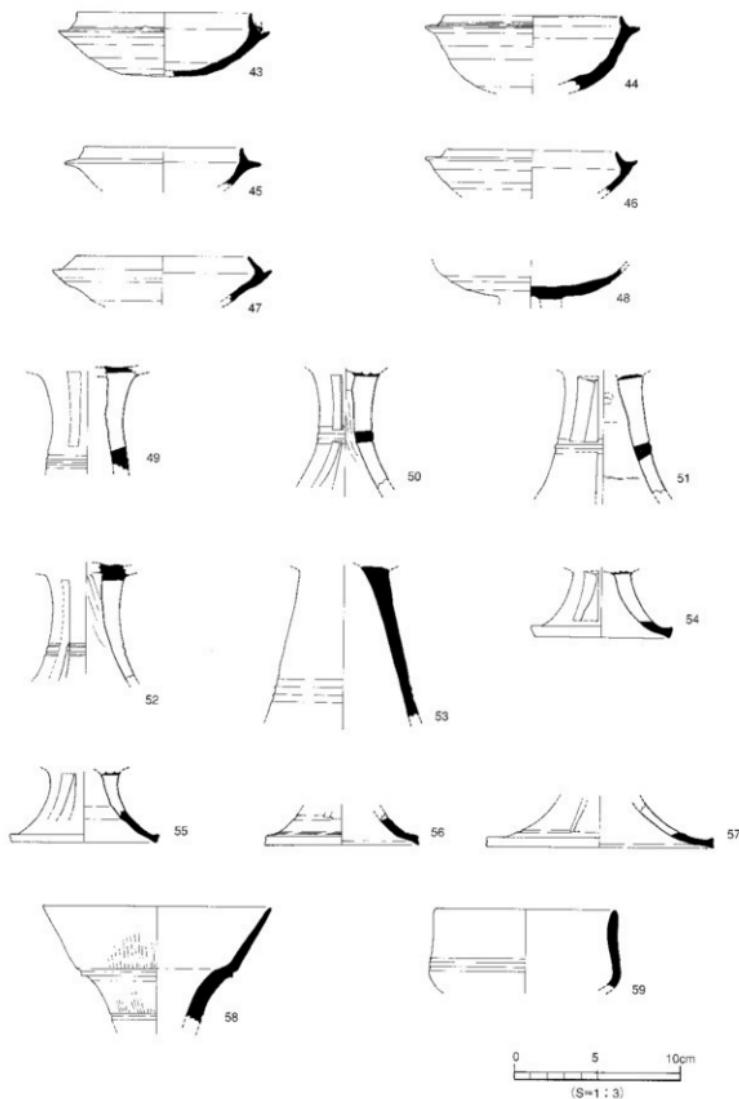
立地 悪社川上流の小開析谷東斜面



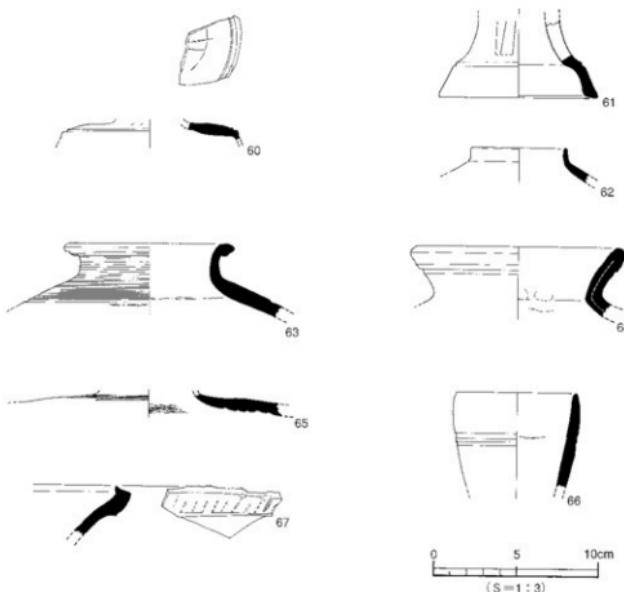
第90図 松山平野東部古窯址群位置図(2)



第91図 潟見山南窯址採集資料実測図(1)



第92図 潮見山南窯址採集資料実測図(2)



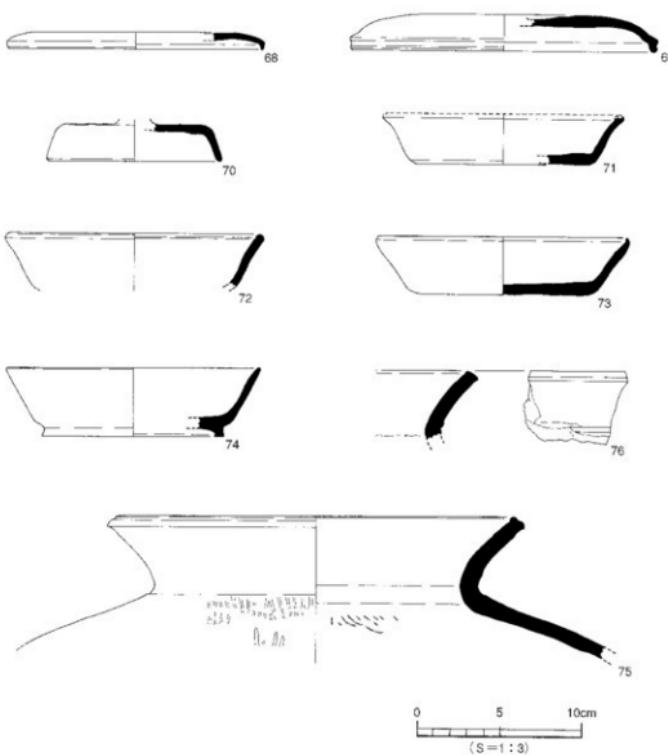
第93図 潟見山南窯址採集資料実測図(3)

海拔140m

遺構 未確認、遺物が多数散布する。

遺物 (第96~98図)

須恵器 (84~136) 器種には壺蓋、壺、皿、壺がある。84~91は壺蓋である。口縁端部の形状から大きく2種に分類できる。(a)84~88のように口縁端部が短く屈曲するもの。器高は扁平なもの。(b)89・90のように口縁端部は屈曲せず、沈線を巡らすもの。器高は前者よりさらに扁平になるもの。91の口縁端部は屈曲せず、外面に段をもつ。小片のため器高が高いかどうかは不明である。92~96は蓋のつまみである。92~95は擬宝珠状の扁平なつまみである。96は扁平な丸みをもったつまみである。97~117は壺である。97~107は口縁部~底部片である。口縁端部の形態により2種に分類できる。(a)97~99のように口縁端部をつまみ出すように外反屈曲するもの。(b)100~107のように口縁端部が屈曲せず尖るもの。108~117は底部片であり、そのうち111~117は高台付壺である。118~135は皿である。口縁端部の形態により3種に分類できる。(a)118~123のように口縁部が短く立ち上がり、端部内面に沈線を巡らすもの。(b)124~129のように口縁部が短く立ち上がり、端部を上方へつまみ上げるもの。(c)130~135のように口縁部が短く立ち上がり、端部直下で「く」の字状に折り曲げ、端部を上方へつま



第94図 駄馬焼ケ懐 2号窯址採集資料実測図

み上げるもの。136は壺である。口縁部が短く直立する短頸壺である。

(6) 悪社谷 1号窯址 (第90図)

所在地 松山市北梅本町

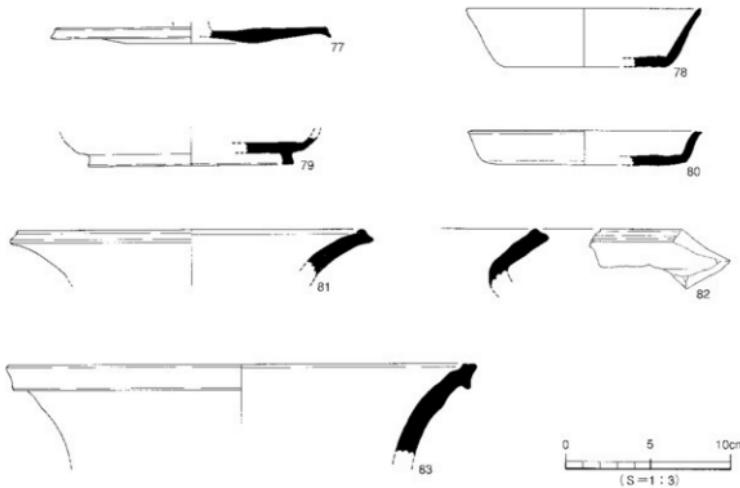
立 地 悪社川上流の小崩谷西斜面

海拔160m

遺 構 遺物が多数散布する。本書掲載の北梅本悪社谷遺跡2次調査地で検出したSX2が灰原の可能性あり。

遺 物 (第99図)

須恵器 (137~140) 器種には壺蓋と壺がある。137は壺蓋である。口縁部は短く屈出し、口縁端部外面に面をもつ。138~140は高台付壺である。



第95図 枝栄下池3号窯址採集資料実測図

3. 小 結

以上、6窯址の資料の提示を行った。これらの出土した遺物、特に坏蓋や坏身などの形態から各窯址の年代観を述べてまとめとする。

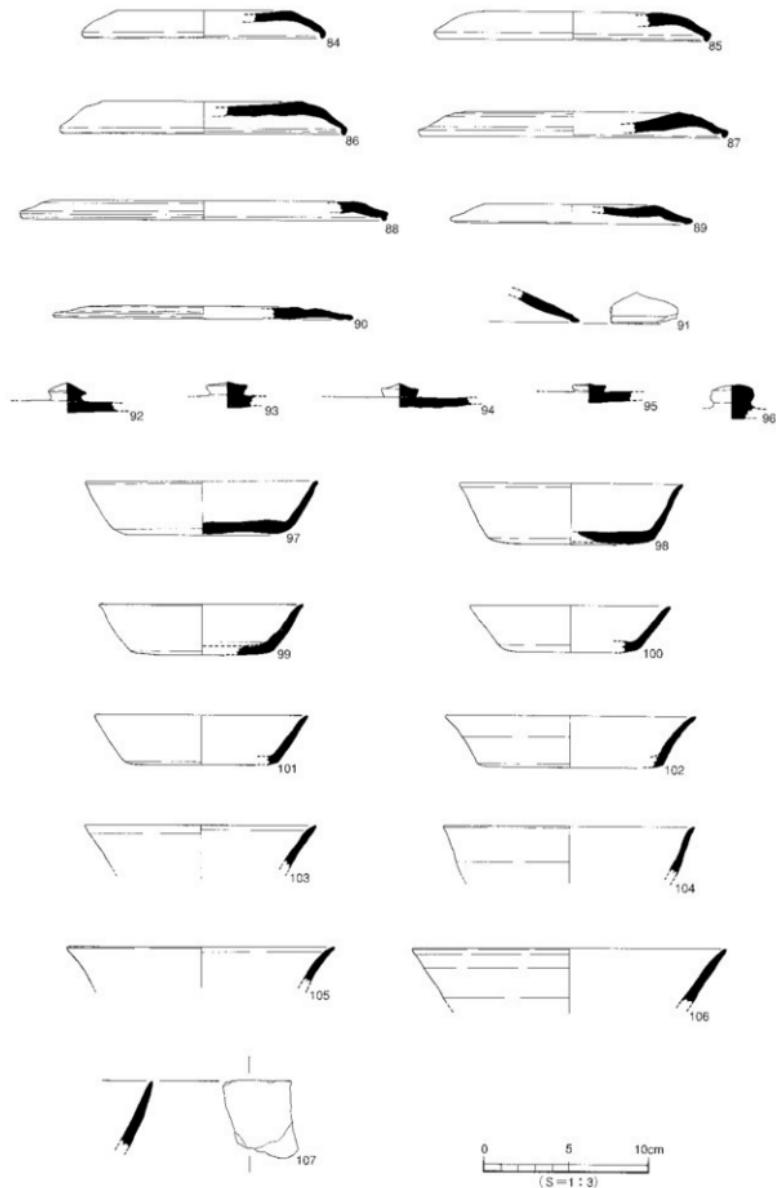
伊予市三秋窯址は提示の資料（1～23）のうち、坏蓋は天井部にやや丸みを残すもの（4）と天井部が扁平なもの（7）がある。いずれも口縁部が若干外方へ開き気味である。坏身はたちあがりが確認できるものが1点あり（10）、たちあがり高は1.9cmを測る。高坏は3点とも短脚一段透かしである。以上のことから、坏蓋に比べて坏身や高坏には時期的に占い要素を残していると考え、陶邑編年MT15～TK10に併行する6世紀前半から中葉の時期と考えている。

潮見山南窯址は既に善永氏によって資料が公表されている⁽²²⁾ことから、今回の資料と比較検討を試みたい。まず坏身は、善永氏のいわれるTK209併行より古い要素をもつものがある。それはたちあがりが細長く尖り気味に伸びるもの（32）である。逆に新しい要素もある。それは高坏に透かしのない長脚高坏（53）や短脚高坏（54・55）が出現している。これらのことから、善永氏が指摘されるように複数期の窯の存在が考えられる。

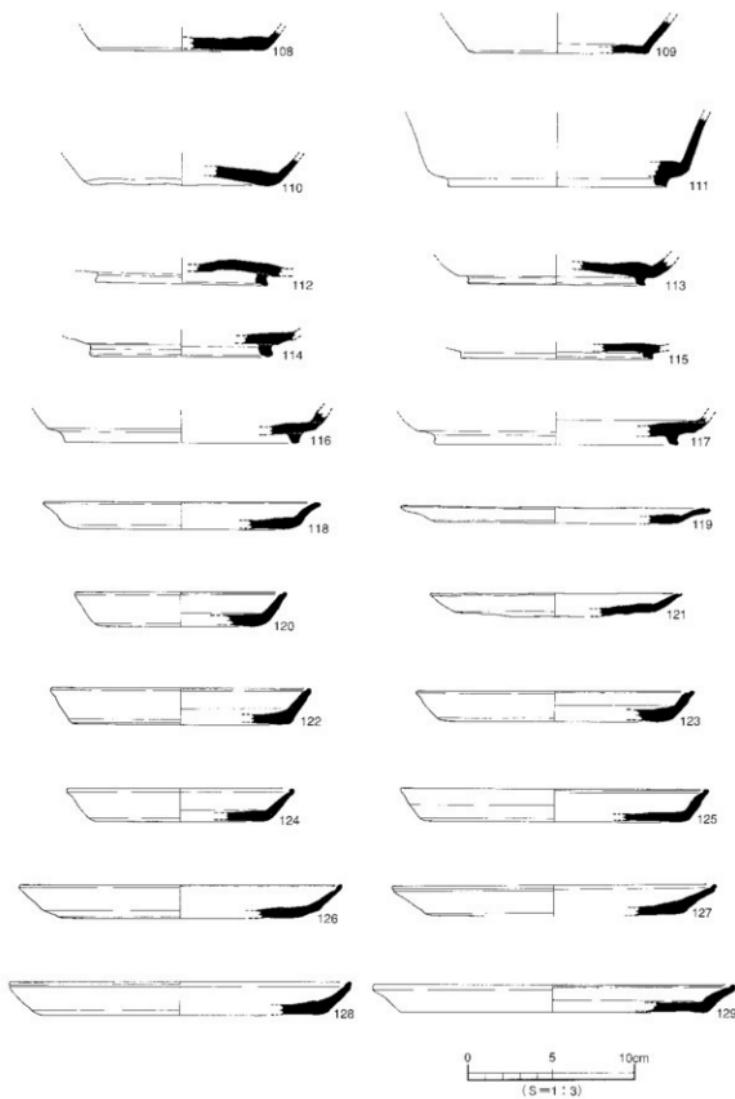
また器種別では坏蓋、蓋、坏身、高坏、甌、壺、壺、壺以外に、今回甌、瓶といった器種も採集することができたのも大きな成果である。

駄馬姥ケ懐2号窯は、「小野川流域の遺跡」のなかで資料が公表されている⁽²³⁾。それらと比較した場合、口縁端部を短く下方に屈曲させた坏蓋や口縁端部内面に凹線を巡らす坏は、MT21併行の8世紀初頭と考えられる。

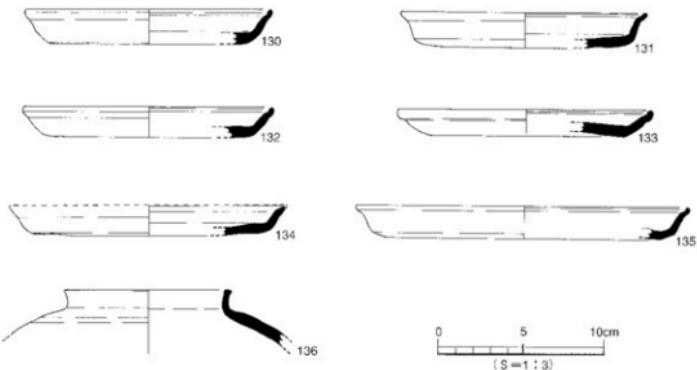
枝栄下池3号窯址は、「小野川流域の遺跡」「小野川流域の遺跡II」のなかで資料が公表されている。



第96図 惠杜谷2号窯址採集資料実測図(1)



第97図 惠杜谷2号窯址採集資料実測図(2)



第98図 惠社谷2号窯址採集資料実測図(3)

そのなかで善永氏が、坏蓋の天井部が扁平なものより時期的に古い根柢とされる器高が高い坏蓋は確認できなかった。今回の採集資料とは坏蓋や坏の点数が少なく比較しがたいが、8世紀前半におさまるものであろう。

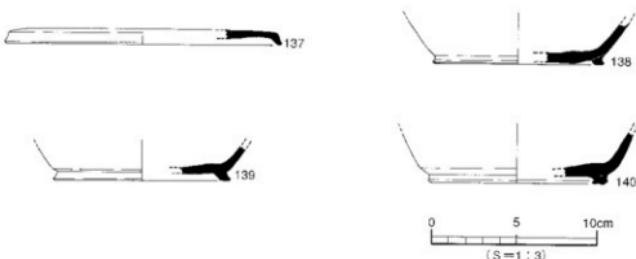
惠社谷2号窯址は、今回の採集資料のなかで最も点数が多く、前述したように器種ごとに形態から細分することができた。特に坏蓋の口縁端部が屈曲する手前の外面に段をもつもの（84~88）があることから、駄馬姫ヶ懐2号窯や枝栄下池3号窯址より後出するものである。『小野川流域の遺跡』掲載の資料を含め8世紀前半におさまるものであろう。

惠社谷1号窯址は、今回の採集点数が少ないため、『小野川流域の遺跡』掲載の資料を含め総合的に判断すると、MT21併行の8世紀前半と位置付けられる。

現在までに松山平野東部古窯址群のなかで本格的な発掘調査が行われたのは駄馬姫ヶ懐1号窯址1基のみである。更に松山平野全体のなかでもその数は限られている。そのため、窯の操業年代や規模・数などを採集資料から推測しているのが現状である。

今回提示した資料のなかで伊予市三秋窯址の資料は、松山平野南部古窯址群（砥部古窯址群）の谷田2号窯址⁽¹²⁴⁻⁵⁻⁶⁾に同時期か若干先行する時期と考えられ、伊予市市場南組窯址⁽¹²⁷⁾に次ぐ古い時期の窯として重要視される。こうした窯址のほとんどは上砂の流出などにより崩壊の一途をたどっており、早急に学術的な調査が望まれる。

最後になりましたが、資料に関する助言と資料を寄贈していただきました池田學氏と長井數秋氏、遺物の採集を快諾していただいた潮見山南窯址の七地所有者である宮内文雄氏、松山平野東部古窯址群について指導をいただきました陶芸家の河野玄容氏、資料についての指導をいただきました宮内慎一氏には末尾になりましたが、記して感謝申し上げます。



第99図 惠杜谷1号窯址採集資料実測図

〔注〕

1. 1995年に愛媛県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査された新池遺跡（新池1～3号窯址）との混同を避けるため、長井氏により命名された。
2. 善永 光一 1998「松山市小野地区における窯址の分布と変遷」『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
3. 栗田 茂敏・加島なおみ 1996「駄馬姥ヶ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
4. 阪本 安光 1981「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」愛媛県教育委員会
5. 真鍋 修身 1991「愛媛県下窯址出土の須恵器について—愛媛県における須恵器編年私論—」『遺跡第33号』遺跡発行会
6. 山内 英樹 2000「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(1)—谷田2号窯出土資料の再検討—」『紀要愛媛創刊号』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
7. 長井 数秋 1992「愛媛県の須恵器編年」『愛媛考古学』12』愛媛考古学協会
1994「伊予市市場南組1号窯址出土の須恵器」『ソーシアル・リサーチ20』

〔参考文献〕

- 真鍋 修身 1966「愛媛県カメ谷窯址発掘調査」『古代学研究』44』
 山辺 昭三 1966「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ
 1981「須恵器大成」
 中村 浩はか 1976「陶邑Ⅰ」大阪府教育委員会
 1977「陶邑Ⅱ」大阪府教育委員会
 1978「陶邑Ⅲ」大阪府教育委員会
 中村 浩 1981「和泉陶邑窯の研究」
 1988「須恵器の年代」『季刊考古学』第24集
 1990「研究入門　須恵器」柏書房

- 松本 敏三 1982 「香川県出土の古式須恵器—宮山窯址の須恵器」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報7』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 1984 「須恵器の源流—四国地方」「日本陶磁の源流」柏書房
- 1988 「須恵器の窯址群—中国・四国」『季刊考古学 第21集』
- 藤原 学 1988 「須恵器の窯址群—近畿」『季刊考古学 第24集』
- 舟山 良一 1988 「須恵器の窯址群—九州」『季刊考古学 第24集』
- 藤原 学 1989 「吹山32号須恵器窯址の遺物」『陶質土器の国際交流』柏書房
- 亀山 修一 1989 「中国・四国地域」「陶質土器の国際交流」柏書房
- 十亀 幸雄はか 1991 「特集・愛媛の須恵器」遺跡発行会
- 宮崎 泰好はか 1992 「砥部町内埋蔵文化財調査報告書II 通谷池第4号窯址・千足第1号窯址」愛媛県砥部町教育委員会
- 舟山 良一・松本 敏三・池山 栄史 1996 「須恵器集成図録 第5巻西日本編」
- 愛媛県史編纂委員会 1986 「愛媛県史 資料編 考古」
- 西川 真美はか 1998 「四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XII」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 作田 一耕はか 2000 「新池遺跡・市場南組窯址」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

遺物一覧 一凡 例一

(1) 以下の表は遺物の計測値及び観察一覧である。山之内・高尾久子が作成した。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法 量 櫛 () : 復元推定値

形態・施文欄 : 器の各部位名称を略記。

例) 口縁→口縁部、口端→口縁端部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部~底部
胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長 (1~4)、多→「1~4 mmの大砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

遺物観察表

表40 伊予市三秋窯址 採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 焼	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
1	环壺	口径(11.5) 残高 3.5	大井部と口縁部の間に断面三角形の縦をもつ。口縁部は内傾する。	同軸ナデ	⑥ナデ ⑤回転ナデ	淡色・青灰地 灰色	密 ○			
2	环壺	口径(12.2) 残高 3.6	天井部と口縁部の間にやや突出する縦をもつ。口縁部は内傾する。	同軸ナデ	同軸ナデ	灰色 灰色	密 ○			
3	环壺	口径(12.0) 残高 2.9	大井部と口縁部の間に断面三角形の縦をもつ。口縁部は内傾する。	同軸ナデ	同軸ナデ	暗青灰色 青灰色	密 ○			
4	环壺	口径(13.2) 残高 4.6	やや丸みをもった大井部。天井部と口縁部の間に断面三角形の縦をもつ。口縁部は内傾する。	④回転ヘラケズリ ⑤回転ナデ	同軸ナデ	灰色 青灰地	密 長(1~2) ○			
5	环壺	口径(13.1) 残高 4.3	天井部と口縁部の間に断面三角形の縦をもち、その奥に1条の沈溝を出す。口縁部は内傾する。	⑥同軸ヘラケズリ ⑦回転ヨコナデ	同軸ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○			
6	环壺	口径(13.3) 残高 3.2	天井部と口縁部の間に鈍い縦をもつ。口縁部は内傾する。	同軸ナデ	同軸ナデ	暗青灰色 灰地	密 長(1) ○			
7	环壺	口径(12.2) 残高 3.6	平坦な大井部。天井部と口縁部の間に鈍い断面三角形の縦をもつ。口縁部は内傾する。	⑧回転ヘラケズリ ⑨回転ナデ	同軸ナデ	暗青灰色 青灰色	密 長(1~2) ○			
8	环壺	残高 2.8	天井部と口縁部の間に鈍い縦をもつ。口縁部は内傾する。	同軸ナデ	同軸ナデ	灰色 灰色	密 ○			
9	壺	口径(12.7) 残高 3.1	大井部と口縁部の間の縦なし。口縁部内部の段なし。	同軸ナデ	同軸ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ○			
10	平身	口径(11.8) 残高 3.8	受部は水平に強く伸び、端部は肥厚する。立ち上がりは内傾気味に伸び、端部は直立する。	同軸ヨコナデ	同軸ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○			
11	环身	残高 3.1	受部は水平に伸び、端部は尖り気味におさめる。	⑩回転ナデ ⑪回転ヘラケズリ	同軸ナデ	灰色 青灰色	密 長(1) ○			
12	环身	残高 2.1	受部はやや上方に肥厚気味に伸びる。	同軸ナデ	同軸ナデ	灰色 灰色	密 ○			
13	环身	残高 2.4	受部はやや上方に近く伸び、端部は尖り気味におさめる。	⑫回転ナデ ⑬回転ヘラケズリ	ナデ	灰色 灰色	密 ○			
14	高坏	残高 2.0	受部～脚部片、短脚～一段造かし。	⑭回転ヘラケズリ ⑮カキメ	⑮回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	青 長(1) ○			
15	高坏	残高 5.2	脚部は「ハ」の字状に外反して下がり、端部は四凹をさせて内傾する。短脚～一段造かし。	同軸ヨコナデ	同軸ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○			
16	高坏	残高 3.3	脚部は「ハ」の字状に外反して下がり、脚中央附近に1条の突線あり。短脚～一段造かし。	同軸ナデ	同軸ナデ	暗青灰色 暗青灰色	密 ○			
17	壺	口径(17.0) 残高 5.7	口縁部は外反し、口縁部直下に2条の突筋がある。端部は上方に水平な溝をなす。	①場回転ヨコナデ ②カキメ(日本/左) ③回転ヨコナデ	同軸ヨコナデ 同軸ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○			
18	壺	口径(14.6) 残高 3.8	口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。	同軸ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○			
19	壺	口径(17.4) 残高 1.8	外反する口縁部。端部はやや尖り気味に丸くおさめる。	同軸ナデ	同軸ナデ	青灰色 青灰色	密 ○			
20	壺	残高 2.3	外反する口縁部。端部は下方に下垂させる。(ハケ)	同軸ナデ (ハケ)	同軸ナデ	灰色 灰色	密 ○			

伊予市三秋窯址 採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
21	甕	残高 4.7	口縁部は大きく外反し、腹部は「コ」の字状を呈する。	①表面輪郭ナデ ②ハサウエーナデ 同軸ナデ タタキ	ナデ	古灰色 青灰色	密 ○			
22	鬱陶	残高 2.2	受部片。2条の突唇間に波状文を施す。	凹凸ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	密 ○			
23	鬱陶	残高 3.3	掉部片。邊かし孔の下笠に2条の沈痕を残す。施転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			

表41 伊予市三秋窯址 採集遺物観察表 瓦製品

番号	種類	法 量			調 整		(凸)色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	凸 面	凹 面				
24	平瓦	5.3	3.8	1.3	46.45	横側凹き	布目刷	斑青灰色 暗青灰色	密 ○		

表42 伊予市三秋窯址 採集遺物観察表 石製品

番号	器種	残 高	材 質	法 量			備 考	図版
				口径(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)		
25	石 瓷	1/6	凝灰岩	(25.8)	5.1	1.5	253.07	

表43 潮見山南窯址 採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 燒	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
26	壺蓋	口径(13.5) 残高 2.7	大井部と口縁部の間に削度上三角形の棱をもつ。口縁部は丸くおさめる。	マメツ	回転ナデ	灰褐色 暗褐色	密 ○			
27	甕	口径(13.4) 残高 3.4	天井部と口縁部の間に浅い棱をもつ。口縁部は外反し、底部は内傾し直面をなす。	マメツ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ○			
28	甕	口径(13.6) 残高 6.0	大井部と口縁部との間に段をなす。口縁部は外反し、底部は内傾し直面をなす。	⑤ナデ 口目輪ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	焼け ひずみ		
29	甕	口径(15.2) 残高 2.6	天井部と口縁部の間に浅い棱をもつ。口縁部は外反し、底部は内傾し直面をなす。	⑥ナデ ⑦回転ナデ	⑧ナデ ⑨回転ナデ	古灰色 灰色	密 ○	焼け ひずみ		
30	甕	口径(16.6) 残高 2.2	口縁部は外反し、底部は内傾し直面をなす。	回転口コナデ	留虹ヨコナデ	青灰褐色 灰色	密 ○	焼け ひずみ		
31	甕	口径(15.0) 残高 3.9	天井部と口縁部の間に段をなす。口縁部は外反し、底部は内傾し直面をなす。	⑩回転ハラケズリ 後ナデ ⑪回転ナデ	回転ナデ	青灰褐色 灰褐色	密 ○	焼け ひずみ		
32	臼身	口径(11.2) 残高 3.6	受部は水平に伸び、端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。	⑫回転ナデ 第4脚物ヘラケズリ	亘輪ナデ	灰色 灰褐色	密 ○			
33	壺身	口径(12.0) 残高 3.8	受部は水平に短く伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。	⑬回転ナデ ⑭五筋輪ヘラケズリ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	焼け ひずみ		
34	壺身	口径(12.0) 残高 3.6	受部は水平に短く伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。	⑮不規 ⑯回転ナデ	⑭回転ナデ ⑮万力ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然 着地痕		
35	壺身	口径(12.0) 残高 3.1	受部は上方へ伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味におさめる。	⑰不規 ⑲ナデ	留虹ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○	落ね洗き		

遺物観察表

(2)

潮見山南墓址 採集遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	被 燐	土 成	備考	因版
				外 面	内 面					
36	环身	口径(12.2) 残高 3.0	受部は「万」へ近く伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は尖り気味におさめる。	① 不明 ④ 五ツマツ ⑤ 五輪ナゲ	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○	自然釉		
37	环身	口径(13.0) 残高 3.9	受部は水平に伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は尖り気味におさめる。	③ 四目ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○	自然釉		
38	环身	口径(13.6) 残高 2.9	受部は上方へ近く伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は尖り気味におさめる。	② 同軸ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○	焼け ひずみ		
39	环身	口径(13.6) 残高 3.1	受部は水平へ伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は尖り気味におさめる。	③ 四目ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ	同軸ナゲ	灰色 青灰褐色	青○			
40	环身	口径(14.0) 残高 3.6	受部は水平へ伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は丸くおさめる。	② 同軸ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○	自然釉 焼け ひずみ		
41	环身	口径(13.5) 残高 2.8	受部は水平へ伸び、開口をなす。端部は丸くおさめる。立ち上がりは内側したの立ち上がり、尖り気味におさめる。	① 五輪ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ	同軸ナゲ	灰白色 灰白色	密○	自然釉		
42	环身	口径(14.0) 残高 2.7	受部は水平へ伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、尖り気味におさめる。	③ 同軸ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ ⑤ 軸付石の為不明	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○	自然釉		
43	环身	口径(10.0) 残高 3.9	受部は水平へ伸び、開口をなす。端部は丸くおさめる。立ち上がりは内側したの立ち上がり、尖り気味におさめる。	同軸ナゲ	② 同軸ナゲ ④ 五輪ナゲ	灰色 乳灰褐色	密右(1)○	自然釉		
44	环身	口径(10.8) 残高 4.7	受部は水平へ伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、尖り気味におさめる。	② 同軸ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ	同軸ナゲ	灰褐色 乳灰褐色	密○			
45	环身	口径(9.6) 残高 2.8	受部は水平へ伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は尖り気味におさめる。	③ ナゲ ④ 五輪ナゲ	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○			
46	环身	口径(10.3) 残高 2.5	受部は水平へ伸び、沿部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は尖り気味におさめる。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	灰褐色 灰褐色	密○			
47	环身	口径(10.5) 残高 2.8	受部は上方へ伸び、凹面をなす。端部は尖り気味におさめる。立ち上がりは内側し、縫部は尖り気味におさめる。	② 同軸ナゲ ④ 五輪ヘラケズリ	同軸ナゲ	青灰色 青灰色	密○			
48	高环	残高 2.1	受部片。底部と縁部の間に段をもつ。	同軸ヘラケズリ ナゲ	ナゲ	灰色 灰褐色	密○	焼け ひずみ		
49	高环	残高 6.3	柱部片。長軸二段造かし。3条の沈縫を施す。	同軸ナゲ	ナゲ	青灰褐色 青灰褐色	密○			
50	高环	残高 7.1	柱部片。長軸二段造かし。2条の沈縫を施す。	同軸ヨコナゲ	④ ナゲ ④ 五輪ヨコナゲ ⑤ 五輪ヨコナゲ	青灰褐色 青灰褐色 青灰褐色	密○			
51	高环	残高 7.4	柱部片。長軸二段造かし。2条の沈縫を施す。	同軸ヨコナゲ	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○	自然釉		
52	高环	残高 7.3	柱部片。長軸二段造かし。2条の沈縫を施す。	同軸ナゲ	④ 自然軸付石の為 不羽 ⑤ しほり度	灰色 灰褐色	密○	自然釉		
53	高环	残高 9.3	柱部片。3条の沈縫を施す。	同軸ナゲ	同軸ナゲ	灰色 灰褐色	密○	自然釉		
54	高环	残高(8.8) 残高 4.0	薄唇片。加脚一段造かし。ラッパ状に広がり、表面は上下に抵抗する。	同軸ヨコナゲ	④ ナゲ ④ 同軸ヨコナゲ	灰褐色 灰褐色	密○			
55	高环	残高(8.8) 残高 4.3	薄唇片。加脚一段造かし。ラッパ状に広がり、表面は上下に抵抗する。	同軸ナゲ ④ 同軸ナゲ	自然軸付石の為不明 ④ 同軸ナゲ	灰褐色 灰褐色	密○	自然釉		

潮見山南窯址 採集遺物觀察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	構 造		(外因) 色調 (内因)	胎 透	土 成	備考	園版
				外 面	内 面					
56	高杯	裏底径(9.4) 残高 2.0	切部片。裏面は下方に板張る。透かしあり。	同版ヨコナデ	同版ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎			
57	高杯	底底径(3.7) 残高 2.8	脚部片。裏面は上に板張る。透かしあり。	同版ヨコナデ	同版ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎			
58	甌	口径(13.6) 残高 7.2	口縁部中位に前面三角形の突唇をもつ。突唇より上は内凹気味に広がる。口縁周辺は突兀気味におきめる。	ハケ (5水/cm)	同版ヨコナデ	灰色 灰茶色	密 ◎	自然釉		
59	甌	口径(11.0) 残高 4.8	口縁部は内凹気味に立ち上がり、沿縁で外反する。底部は丸くおさめる。斜肩部笠位に2条の沈線を残す。	無付着の為不明	同版ヨコナデ	オリーブ色 灰色	密 ◎	自然釉		
60	甌	残高 1.0	肩の張る体部。外側に1条の沈線を残す。	同版ヨコナデ	無不着の為不明	灰色・オリーブ色 灰茶色	密 ◎	自然釉 ハサウエイ		
61	盃	裏底径(9.6) 残高 4.8	外反しながら広がる脚部。脚部と広張部との間に1条の沈線をもつ。滑部は内尚し、圓をなす。透かしあり。	同版ヨコナデ	同版ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎	自然釉		
62	甌	口径(5.6) 残高 2.1	L字縁部は斜く直立したもの外反し、縁部は丸くおさめる。	同版ヨコナデ	同版ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉		
63	甌	口径(9.6) 残高 4.4	口縁部は斜く直立したもの外反し、縁部は六方平向へ突兀気味に丸くおさめる。	①カキメ(同版ヨコナデ コナデ 軽カキメ)(7水/cm)	②同版ヨコナデ ナデ ③同版ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		自然釉	
64	甌	口径(11.8) 残高 4.2	L字縁部は斜く外反し、縁部はやや肥厚して「コ」の字状を呈す。	同版ヨコナデ	④同版ヨコナデ ナデ ⑤同版ヨコナデ ナデ	灰褐色 灰褐色	青 ◎			
65	横瓶	残高 1.2	肩の張る体部。	⑥同版ヨコナデ ⑦カキメ(6水/cm) ⑧心付着の為不明	⑨同版ヨコナデ タタキ	灰褐色 灰褐色	密 ◎	自然釉		
66	堆脂	口径(7.2) 残高 5.8	L字縁部は外反しながら立ち上がり堆脂付近で内尚する。堆脂は丸く上げる。	無付着の為不明	同版ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎	自然釉 焼け ひずみ		
67	盃	残高 3.1	口縁部は外反し、縁部は「コ」の字状を呈し、上方に板張る。	⑩同版ヨコナデ ⑪無付着の為不明	同版ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎	自然釉		

表44 駄馬堵ヶ窓2号窓址 採集遺物觀察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
68	坪壠	口徑(15.4) 残高 1.0	口縁部は短く屈曲し、端部は尖る。	同軸ヨコナデ	同軸ヨコナデ	青灰色 青灰色	密	○		
69	坪壠	口徑(14.4) 残高 2.2	天井部は平ら。口縁部は短く屈曲し、端部は外反しながら丸くおさめる。	⑨ナデ ⑩回軸ヘラケズリ ⑪同軸ヨコナデ	⑧ナデ ⑬同軸ヨコナデ	灰色 灰色	密	○		
70	蓋	口徑(10.6) 残高 2.3	天井部は平ら。尖端部と口縁部の境にあるやかな棱をもつ。	④回軸ヘラケズリ →ナデ ⑤同軸ヨコナデ	同軸ヨコナデ	青灰色 青灰色	密	○		
71	坪	口徑(14.2) 底径(10.6) 残高 3.0	口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸く、内面に一束の凹線を送らす。	⑭回軸ヨコナデ ⑮ナデ	⑭同軸ヨコナデ ⑯ナデ	灰色 灰色	密	○		
72	坪	口徑(15.0) 残高 3.2	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く、内面に一束の凹線を送らす。	同軸ヨコナデ	同軸ヨコナデ	灰色 青灰色	密	○		
73	不	口徑(15.0) 底径(16.6) 残高 3.5	口縁部は外反気味に立ち上がり、縁部は尖り気味となり、内面に一束の凹線を送らす。	⑭同軸ヨコナデ ⑮ナデ	同軸ヨコナデ	黑色 灰色	密	○		

遺物観察表

駄馬塙ヶ棲墓址 採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調(内面)	胎殻	土成	備考	国版
				外 面	内 面					
74	奉台 竹枕	口径(15.2) 底径(11.0) 残高 4.2	口縁部は複数に立ち上がり、端部は尖り氣味となる。短い高台は水平に覆屈する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 青灰色	密○			
75	甕	口径(24.0) 残高 8.6	口縁部は大きく外反し、端部はわずかに上下方に拡張する。端部はややナタ門む。	④回転ヨコナデ ⑤タタキ→ヨコナデ	⑥延長ヨコナデ ⑦タタキ→ヨコナデ	灰白色 灰白色	密○			
76	甕	残高 4.3	口縁部は底部より外反しながら立ち上がり。端部は平らでわずかに上下方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密○			

表45 枝栄下池3号窯址 採集遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調(内面)	胎殻	土成	備考	国版
				外 面	内 面					
77	环甕	口径(17.0) 底径 1.0	口縁部は強く屈曲し、端部は外側に曲をもち、尖る。	⑦ナデ ⑧回転ヘラケズリ ⑨回転ヨコナデ	⑩回転ヨコナデ→ナデ ⑪瓦転ヨコナデ	灰色 灰色	密○		焼け ひびき	
78	甕	口径(14.2) 底径(10.2) 残高 3.6	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	⑫回転ヨコナデ ⑬延長ヘキサゲナダ	回転ヨコナデ	乳白色 乳白色	密○			
79	奉台 竹枕	口径(12.4) 底径 1.7	短い高台。縁部は水平となる。	⑭回転ヨコナデ ⑮延長ヨコナデ→ナデ	回転ヨコナデ→ナデ	乳白色 青灰色	密○			
80	甕	口径(13.6) 底径(12.4) 残高 2.1	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖り氣味に外反する。	⑯回転ヨコナデ ⑰延長ヨコナデ→ナデ	回転ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密○			
81	甕	口径(21.0) 底径 2.8	口縁部は外反し、端部はナタ門み、上下方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 乳白色	密○			
82	甕	残高 3.6	口縁部は強く直線的に立ち上がり、端部はナタ凹み、上下方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密○			
83	甕	口径(28.2) 底径 3.6	口縁部は大きく外反し、端部はナタ凹み、上下方に拡張する。上端部は笛をなす。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密○			

表46 惠社谷2号窯址 採集遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調(内面)	胎殻	土成	備考	国版
				外 面	内 面					
84	环甕	口径(14.2) 底径 1.7	口縁部は強く屈曲し、端部は尖り氣味におさめる。	⑩回転ヘラケズリ ⑪回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密○			
85	环甕	口径(16.4) 底径 1.7	口縁部は強く屈曲し、端部は丸くおさめる。	⑫回転ヘラケズリ→ナデ ⑬回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐色 灰褐色	密○			
86	环甕	口径(17.0) 底径 2.0	口縁部は強く屈曲し、端部は丸くおさめる。	⑭回転ヘラケズリ→ナデ ⑮回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐色 灰色	密○			
87	环甕	口径(18.6) 底径 1.5	口縁部は強く屈曲し、端部は外側に曲をもち尖り氣味におさめる。	⑯回転ヘラケズリ→ナデ ⑰延長ヨコナデ	⑮回転ヨコナデ→ナデ ⑯回転ヨコナデ	灰色 灰色	密○			
88	环甕	口径(22.0) 底径 1.2	口縁部は強く屈曲し、端部は外側に曲をもち尖り氣味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐色 青灰色	密○			
89	环甕	口径(14.0) 底径 1.2	口縁部は強く屈曲し、端部は回曲せず丸くおさめる。	⑧回転ヘラケズリ→ナデ ⑨回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密○			

悪社谷2号窯址 採集遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査箇所		(外)色調 (内面)	胎焼 土成	備考	図版
				外面	内面				
90	壺	口径(18.0) 残高 0.8	天井部と口縁部の間に沈縫を有し、腹部には内曲せず、丸くおさめる。	直軸ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰褐色 (一様灰水色) 青灰褐色	密 ◎		
91	壺	残高 1.9	口縁部は底面せり突き気味におさめる。端部外面に沈縫を有する。	直軸ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
92	蓋	つまみ 2.3 残高 1.8	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
93	蓋	つまみ 2.4 残高 1.6	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	直軸ヨコナデ	ナデ	青灰褐色 青灰褐色	密 ◎		
94	蓋	つまみ(2.2) 残高 1.4	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	①ナデ ②回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰褐色 青灰褐色	密 ◎		
95	蓋	つまみ(2.0) 残高 1.2	扁平なつまみ。中央部が山形となる。	①回転ヨコナデ ②ナデ	ナデ	青灰褐色 青灰褐色	密 ◎		
96	蓋	つまみ 2.6 残高 2.1	扁平なえみをもつつまみ。	ナデ	回転ヨコナデ	ナデ	青灰褐色 青灰褐色	密 ◎	
97	坏	口径(14.0) 底径(10.8) 残高 3.2	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に外反する。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 長(1) ◎		
98	坏	口径(13.6) 底径(10.0) 残高 3.7	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に外反する。	①回転ナデ ②ナデ	①回転ナデ ②ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
99	坏	口径(12.3) 底径(8.6) 残高 3.1	口縁部は内溝気味に立ち上がり、端部は尖り気味に外反する。	①回転ナデ ②ナデ	①回転ナデ ②ハクリ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
100	坏	口径(12.2) 底径(8.8) 残高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	灰褐色 青灰褐色	密 長(2) ◎		
101	坏	口径(13.0) 底径(9.2) 残高 3.1	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	密 長(1) ◎		
102	坏	口径(15.2) 底径(11.2) 残高 3.1	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
103	坏	口径(14.0) 残高 2.7	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
104	坏	口径(15.2) 残高 3.0	口縁部は内溝気味に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
105	坏	口径(16.2) 残高 2.3	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ◎		
106	坏	口径(19.0) 残高 3.3	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰褐色 灰褐色	青 ◎		
107	坏	残高 4.2	口縁部は底面より内溝気味に立ち上がる。	直軸ナデ	回転ナデ	灰褐色 青灰褐色	密 ◎		
108	坏	底径(10.3) 残高 1.3	口縁部は底面より内溝気味に立ち上がる。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 石(1) ◎		
109	坏	底径(10.9) 残高 2.1	口縁部は底面より直線的に立ち上がる。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	青 ◎		

遺物観察表

悪社谷2号墓址 採集遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面)・色調(内面)		胎殻	土成	備考	国版
				外 面	内 面	内面	内面				
110	环	底径(11.0) 残高 1.7	口縁部は底盤より直線的に立ち上がる。	⑥回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	褐色 灰褐色	褐色 ○		使用 ひずみ		
111	高台 付环	底径(13.1) 残高 4.3	L基部は外反気味に立ち上がる。 高い高台は水平に接地する。	⑥回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	褐色 ○				
112	高台 付环	底径(10.4) 残高 1.5	低い高台は中央が凹み、外傾が接地する。	⑥回転ナデ ⑦ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	褐色 ○				
113	高台 付环	底径(10.6) 残高 1.8	低い高台は外側が接地する。	⑥回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	褐色 ○				
114	高台 付环	底径(10.6) 残高 1.5	低い高台は丸みをもち、外傾が接地する。	⑥回転ナデ ⑦ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	褐色 ○				
115	高台 付环	底径(11.5) 残高 1.0	低い高台は中央が凹み、外側が接地する。	ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	褐色 ○				
116	高台 付环	底径(14.0) 残高 2.0	低い高台は水平に接地する。	⑥回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	褐色 褐色	褐色 ○				
117	高台 付环	底径(14.5) 残高 1.8	低い高台は水平に接地する。	回転ナデ	回転ナデ	褐色 灰褐色	褐色 ○				
118	皿	口径(16.4) 底径(14.0) 厚さ 1.8	口縁部は強く外反し、端部は尖り気味におさめる。底盤内面にわずかな凹みを認らす。	①回転ナデ ⑦ナデ	自然剥片の為不明	灰褐色 灰褐色	褐色 ○		自然剥		
119	皿	口径(18.6) 底径(14.9) 厚さ 1.0	口縁部は強く外反し、端部は尖り気味におさめる。底盤内面にわずかな凹みを認らす。	②回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	褐色 ○				
120	皿	口径(22.6) 底径(20.3) 厚さ 2.1	口縁部は強く直線的に立ち上がり、底盤内面に1条の沈線を認らす。	③回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	褐色 長(1~2) ○				
121	皿	口径(14.9) 底径(12.0) 厚さ 1.4	口縁部は強く直線的に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。底盤内面に1条の沈線を認らす。	④回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	褐色 灰褐色	褐色 長(1~2) ○		使用 ひずみ		
122	皿	口径(15.5) 底径(13.2) 厚さ 2.2	口縁部は強く直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底盤内面に1条の沈線を認らう。	⑤回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	褐色 暗褐色 暗褐色	褐色 長(1~2) ○				
123	皿	口径(16.6) 底径(14.2) 厚さ 1.9	口縁部は強く直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底盤内面に1条の沈線を認らす。	⑥回転ナデ ⑦ナデ	回転ナデ	褐色 暗褐色	褐色 ○				
124	皿	口径(13.6) 底径(11.0) 厚さ 2.0	口縁部は強く直線的に立ち上がり、端部は内側に突出する。	⑦回転ナデ ⑧ナデ	回転ナデ	褐色 灰褐色	褐色 ○				
125	皿	口径(18.2) 底径(16.2) 厚さ 2.0	口縁部は強く外反気味に立ち上がり、端部は内側に突出する。	⑧回転ナデ ⑨ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	褐色 ○				
126	皿	口径(19.0) 底径(14.6) 厚さ 2.0	口縁部は強く内湾気味に立ち上がり、端部はわずかに内側に突出する。	⑩回転ナデ ⑪回転ナデケズリ	回転ナデ	褐色 灰褐色	褐色 ○				
127	皿	口径(19.4) 底径(15.6) 厚さ 1.8	口縁部は強く外反気味に立ち上がり、端部は内外面に沈線を認らす。	⑫回転ナデ ⑬ナデ	回転ナデ	褐色 青灰色 青灰色	褐色 長(1~2) ○				
128	皿	口径(20.3) 底径(16.6) 厚さ 2.0	口縁部は強く内湾気味に立ち上がり、端部には内外面に沈線を認らす。	⑭回転ナデ ⑮ナデ	回転ナデ	褐色 灰褐色	褐色 ○				
129	皿	口径(21.6) 底径(18.4) 厚さ 1.7	口縁部は強く外反し、端部は上方に突出する。	⑯回転コナデ ⑰ナデ	回転コナデ	褐色 青灰色	褐色 ○				

悪社谷2号窯址 採集遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 焼	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
130	皿	口径 (14.5) 底径 (11.8) 器高 2.2	口縁部は近く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	④凹軸ナデ ⑤ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	密 ○			
131	皿	口径 (14.6) 底径 (13.1) 器高 2.2	口縁部は近く直線的に立ち上がり、端部は屈曲したのち上方に突出する。	①回転ナデ ②凹軸ナデ後ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	密 ○			
132	皿	口径 (14.7) 底径 (12.6) 器高 1.8	口縁部は近く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	③凹軸ナデ ④ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			
133	皿	口径 (15.2) 底径 (12.1) 器高 1.6	口縁部は近く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	⑤回転コナデ ⑥ナデ	回転コナデ	灰色 灰色	密 ○			
134	皿	口径 (16.5) 底径 (13.8) 器高 1.7	口縁部は近く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	⑦凹軸ナデ ⑧ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 長(1) ○			
135	皿	口径 (19.8) 底径 (18.0) 器高 1.9	口縁部は近く外反し、端部は屈曲したのち上方に突出する。	⑨回転ナデ ⑩ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(1) ○			
136	章	口径 (9.8) 残高 3.5	口縁部は近く直立し、端部は「コ」の字状を呈する。	⑪凹軸ナデ ⑫ナデ ⑬凹軸ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			

表47 悪社谷1号窯址 採集遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 焼	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
137	坪蓋	口径 (16.2) 器高 0.9	口縁部は近く屈曲し、端部外間に瘤をもち、突起気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○			
138	高台 付环	底径 (10.2) 残高 2.6	「ハ」の字状の短い高台。接地面部は水平となる。	④回転ヨコナデ ⑤凹軸ヘラケズリ	回転ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○			
139	高台 付环	底径 (10.6) 残高 2.1	「ハ」の字状の短い高台。接地面部は水平となる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○			
140	高台 付环	底径 (10.2) 残高 3.1	短い高台は水平に達する。	⑥回転ヨコナデ ⑦ナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ○			

写 真 図 版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は、調査担当者及び大西朋子が行い、高所作業車を使用した。

なお、巻頭航空写真は、株式会社アイシーによる。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパー・アンギュロン 90mm他
アサヒペンタックス67		ペンタックス67	55mm他
ニコンニューFM2		ズームニッコール	28~85mm他
フィルム	プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP		

2. 遠物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ	トヨノビューア-45G	レンズ	ジンマーS 240mm
ストロボ	コメット/CA-32・CB2400(パンク使用)		
スタンド他	トヨノ無影撮影台・ウェイトスタンド101		
フィルム	プラスXパン		

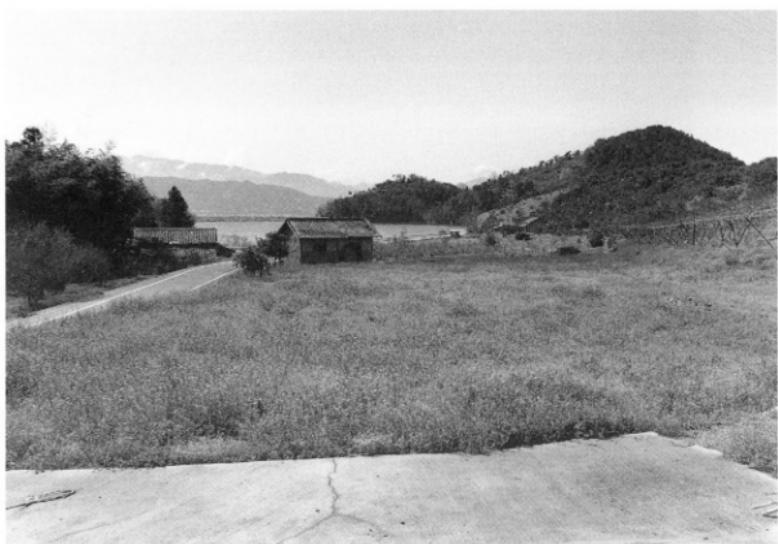
3. 白黒写真の現像と焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD	レンズ	エル・ニッコール 135mm
	ラッキー90MD		エル・ニッコール 50mm
印画紙	インフォードマルチグレードIVRC		
フィルム現像剤	コダックD-76・HC110		

【参考】『理工写真研究』Vol.1~10

{大西 朋子}



1. 調査前風景（北より）



2. SK 4 遺物出土状況（東より）



1. SR 1 遺物出土状況（北より）



2. 惠社谷 1 号窯（奥）と SX 2 遺物出土状況（東より）

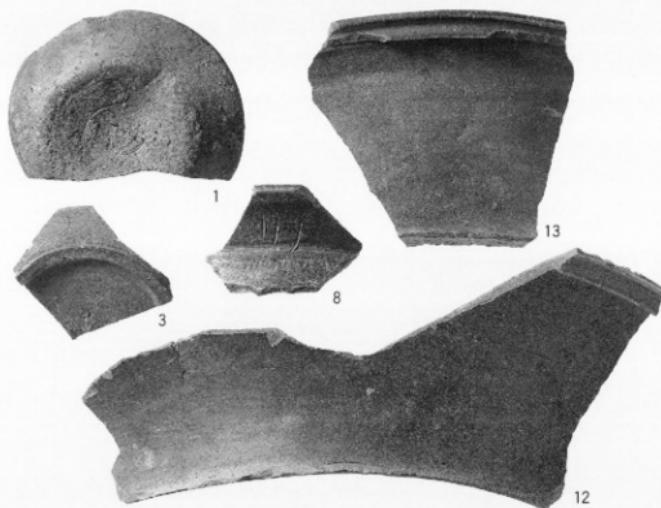


1. SR 2 土層（南より）



2. SR 2 遺物出土状況（北西より）

図版四



1. SR 1 出土遺物



2. SK 4 出土遺物



3. SX 2 出土遺物

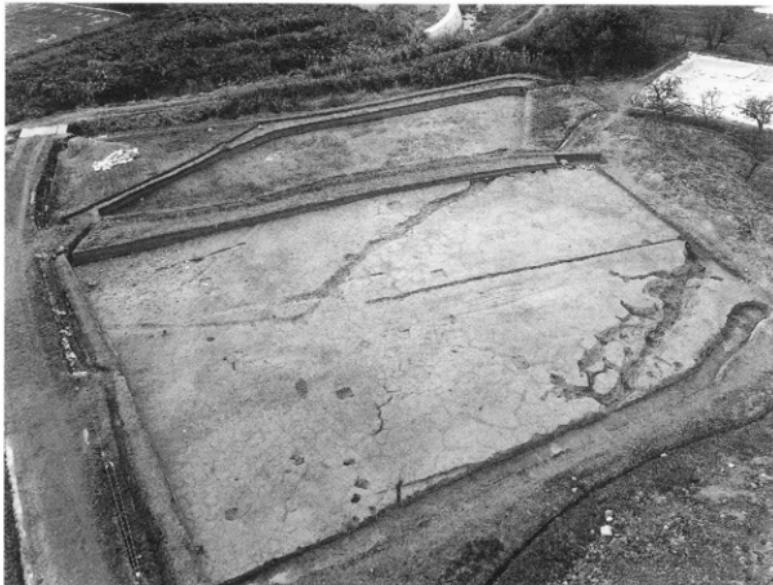


1. 調査前風景（北より）

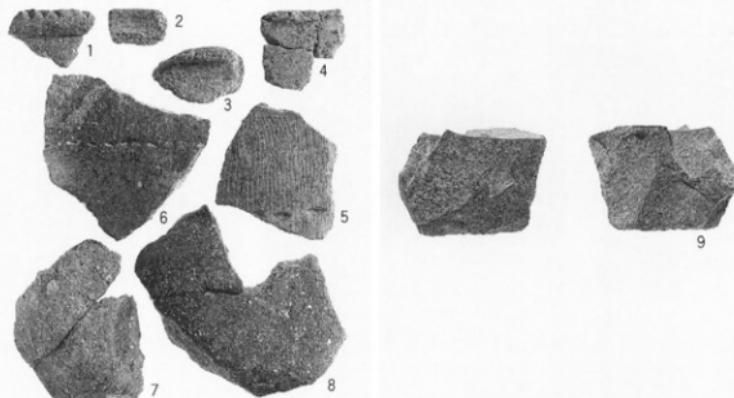


2. SR 1 完掘状況（北より）

図版六



1. 1区A・1区B完掘状況（北より）



2. SK10出土遺物



1. 調査前風景（南より）

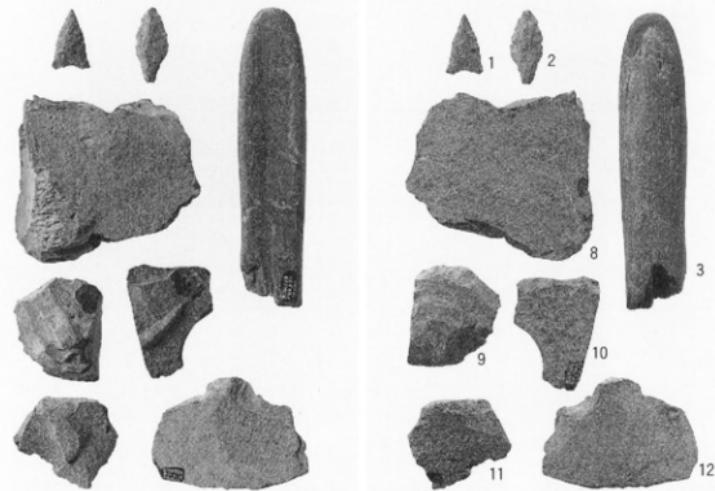


2. 1区 完掘状況（南より）

図版八



1. 2区 完掘状況（北より）



2. 出土遺物（1～3：2区 第VI層、8～12：地点不明）

報告書抄録

ふりがな	おの ちく いせき						
書名	小野地区的遺跡						
副書名	北梅本悪社谷遺跡2次調査地、北梅本北池遺跡、北梅本太尺寺遺跡						
卷次							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第81集						
編著者名	山之内志郎						
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター						
所在地	市教委:〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL (089) 948-6605 埋文:〒791-8032 松山市南宿院町乙67番地6 TEL (089) 923-6363						
発行年月日	西暦 2001年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 °'"	東經 °'"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
北梅本悪社谷2次	松山市北梅木町 乙697-1外	38201	33° 49' 11"	132° 51' 36"	19990408 ~ 19990922	6,265	園場整備
北梅本北池	松山市北梅木町 甲1,732外	38201	33° 48' 38"	132° 51' 10"	19991007 ~ 20000331	9,561	園場整備
北梅本太尺寺	松山市北梅木町 甲3,489-1外	38201	33° 48' 22"	132° 51' 54"	19980407 ~ 19980930	4,575	園場整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北梅本悪社谷2次	集落 墓址関連	古代 古代以降 近現代	古代:流路、土坑、溝 古代以降:土坑、溝 近現代:土坑、溝	須恵器、土師器、 陶磁器、石器	悪社谷1号窯址の開 発遺構		
北梅本北池	集落	弥生 古墳 古代以降 近現代	弥生:土坑、溝、柱穴 古墳:流路、溝 古代以降:土坑 近現代:土坑、溝、 柱穴、石列	弥生土器、須恵器、 土師器、石器	弥生前期の土坑		
北梅本太尺寺	集落	弥生 近現代	近現代:土坑、溝、 柱穴、塚、石列	弥生土器、須恵器、 陶磁器、石器			

松山市文化財調査報告書 第81集

小野地区の遺跡

平成13年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1

TEL (089) 948-6605

財團法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (089) 923-6363

印刷七キ株式会社
〒790-0012 松山市湊町7丁目7番地1

TEL (089) 945-0111
